
あなたを忘れない為に・・・

佐藤梨緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたを忘れない為に・・・

【Nコード】

N7672E

【作者名】

佐藤梨緒

【あらすじ】

19歳の華が出会ったのは高校生のハル。いつの間にか好きになり、いつの間にか世界で一番の存在になったハルと華の少し悲しいお話です。最後にハッピーエンドと思うかどうかは読んだ人の気持ち次第です。

プロローグ

ハルへ

君が最後の瞬間・・・

一瞬でも私の顔を思い浮かべてくれたのだろうか。

もっと一緒にいたかったと思ってくれただろうか。

君に聞きたいことはいっぱいあるけど、どうやって聞けばいい？

もしも1分だけ君にもう一度会えるならば、私はどうするだろう。

きっと聞きたいことも言いたいこともあるのに何もできずに
ただ君を再び見つめることができた時間に嬉しくて動けないだろう
ね。

もしも、私が60歳くらいまで生きたとして、

これまでの人生の悪いことを神様が許してくれたとしよう。

そしてまんまと天国に行けて君に再び逢うことができた時、

私は60歳の姿で、君は18歳のままなのだろうか？

さすがにそれは勘弁してほしい。

君の60歳の姿も見たくないから、そこは神様の力で

私を20歳に戻してほしい。
そして、行けなかったヒマワリ畑に行こう。

あの日、待っていたあの場所から

何時間も待ちぼうけをしていたあの時間を無くして

時間通りくる君のバイクの後ろに乗って

埃まみれになって、途中でお尻が痛くなったと文句を言いながら・・・

・

その場面を幾度と無く想像しながら、私は時間を重ねている。

叶わぬことだと思っけていても、朝起きたら今までのことは

すべて夢で、あの日の朝なんじゃないかと思いつながら。

今、君は幸せですか？

またヒネくれて心を閉ざしてませんか？

笑うことを忘れていませんか？

私がいつまでも心配していることは迷惑ですか？

でも、それは仕方無いね。

だって一番好きな時に勝手に消えてしまったんだから。

忘れようと努力しようとしたけど、たぶんどんなことをしても
忘れることはできないから。

勝手に消えてしまった君。

忘れられない私。

両者痛み分けってことで引き分けにしようね。

きつと忘れられないんじゃないやなくて、忘れたくないんだと思う。でも私はあの日以来、なんとなく目の前の時間がボヤけている。

毎日いろんなことが起きるし、いろんな人にも出会う。

時間は流れているのに、なにか置いてきたように胸に穴が開いている。

消えた君の面影を誰かに被せ、その人を通して君を好きでい続けるより

形こそ無いが、それでも本物の君を好きでいるほうが
きつと私には合っているのかもしれない。

今、目の前に君がいるならば

「すっごく嬉しくでしょ？こんなに好きでいてもらって

あの時のようにイタズラな笑顔で君をからかい、

「別に……馬鹿じゃないの？」

君が照れる顔が目に見えかぶ。

ちよつとだけ下を向いてニヤツとするあの笑顔を……

ハル……

君にもう一度会えるなら、私は何もいらぬ。

それ以上のモノは存在しないから・・・

19歳と高校生

初めてハルに会った日。

薄暗い曇り空が今にも泣き出しそうな午後だった。

「なんだか降り出しそうですねえ・・・」

知り合いのオジさんに紹介してもらったガソリンスタンドのバイト先で

同僚のオジサンと曇り空の下、給油機にもたれながら話をしていた。

高校を卒業はしたものの・・・勉強があまり好きでは無く、それほど自分の将来はシッカリしたものにはならないとなんとなく諦めていた。

大学に進学した友人達の中途半端な自慢をたまに聞いても特に羨ましいと感じることも無く、それでいて自分の毎日が自慢できる訳でもないことはわかっていた。

そんな毎日の中、少しずつやりたいことを見つけようと
いろいろ考えていた。

アクセサリーのデザイナーになることが夢だったはずなのに、
いつの間にかそんなことを忘れていた。

だからと言って、何も専門的なことなど勉強をしようと思ったことは無く、

ただ毎日が過ぎていた。けど、いつまでもこんな生活をしている訳

にはいかない。

自分でそう決めてから、ちょっと時間をかけて本当に何処までできるのか自分を試してみようと専門学校への進学を考えていた。

そんなちよつとだけ希望が出てきたある日、私はハルに出会った。

ガソリンスタンド（GS）の仕事は結構自分に合っていると思った。人と話をするのが好きだし、訪れる人も自分より年上。多少の無礼も若さでカバーできた。

ブルンブルブルブル・・・

一台のバイクが敷地内に入ってきた。

そのピカピカのバイクに見覚えが無かったので

（一見さんだな・・・）そう思いながら笑顔で誘導をした。

止まったバイクの運転手はヘルメットを取らずに、ボソボソと小さい声で

「あの・・・山崎健二のカードがあるって言われたんですけど。

それでガソリン入れてくれますか？」

そう言つてすぐに眼をそらし、前を見た。

山崎健二さん・・・

暇なのか趣味なのか、ほとんど用事が無くても毎日GSに顔を出し、1時間ほど時間を潰していく50代のオジさんのこと。

私は結構このオジさんが好きだった。

気さくな感じで、いつも冗談を言い私のことを娘のように可愛がってくれた。

「あ・・はい。山崎さんですね」

そう答えバイクにガソリンを入れた。

「息子さんですか？」

「はい・・・」

それだけ言っつて、面倒くさそうに前を見た。

ちよつと愛想が悪いな・・・最初の印象はあまり良くなかった。

けど、きつと始めて来たGSだし、緊張してるのかな？

そんなことを思い、それ以上話をしないで

「はい。終わりました。ありがとうございます」そう頭を下げた。

彼は何も言わずにペコツと頭を下げてただけで

また大きなマフラーの音をさせ帰っていった。

別にもう来ないかもしれないと、その時はなんとも思わなかった。

その日の夕方。ほぼ時間とおりに山崎さんの車が入ってきた。
それを見つけてニコニコして近づいていった。

「こんばんは。今日も時間どおりですね」

「ああ。一日一回は華ちゃんの顔見ないとね」

そう言っつて何をする訳でも無いのに車から降りた。

「じゃ、洗車でもしますか？」

「ああ・・・まかせるよ」そう言っただけで山崎さんはシヨップの中に入っただけだ。

自動ボタンを押して山崎さんの車を洗車スペースに入れ、洗い終わるのを黙って見ていた。

平日のそれもあまり天気が良く無い日だったので、その日は忙しく無く、ただ山崎さんの車が洗い終わるのを待っていた。

そこに山崎さんが歩いてきた。

「華ちゃん。今日はなにか良いことあったかい？」へらへらして話かけてきた。

「そうですね・・・あ！さっき息子さん来ましたよ？」

あまり話はしなかったけど、ピカピカのバイクで

「お！どうだったうちの息子？結構いい男だったでしょ」

いい男もなにも・・・ほんの一瞬だけ、それもメットの目しか見ていない。

「あ・・・メットしてたからなあ・・・今度来たらジックリ見ます」

「あのバイクさ、自分で小遣い溜めて買ったんだよ。

少しくらい出してやるって言ったんだけどな」

新聞配達とかお年玉とか溜めてね。自分の金で買ったんだ。変なとこに意地張るヤツだからさあ・・・せめて燃料くらいは会社経費で落としてやるうかなって、ここ紹介したんだ。そっかゝ来たか」

なんとなく自慢の息子という感じがした。

山崎さんも若ければ、そこそこモテそうな雰囲気が残っているし、その息子なら・・・今度はちょっと期待して見てみよう。そんなことを考えながら山崎さんの話を聞いていた。

「息子さん、なんの仕事してるんですか？」

「仕事？仕事は勉強かな。だって高校生だもの」

うわ・・・残念！

さすがに高校生には手を出せないや・・・自分も19歳で未成年だけど、高校生って・・・

「高校何年生ですか？」それでも一応聞く自分が結構面白かった。

「2年生だよ。どう？うちの息子」

「いやあ・・・ちよつとそれは・・・」

二人でそんな話をして笑っていた。

それでも、可愛い高校生と友達になれるなら、それもいいかもな。そんなことを考えながら時計を見るともう5時を過ぎていた。

「あ。じゃあ私そろそろあがります。今度息子さん来たらしっかり顔見ますから。それじゃーお先にー」

山崎さんはニコニコと笑顔で

「気に入ったらご自由に」と手を振った。

(それはないって……) そんなことを思いながらその日は帰宅した。

翌日、2時くらいに暇だなと外を見ていたら、遠くからバイクの音がしてきた。

あまり気にしないでボンヤリと外を見てみると、一台のバイクがこつちに曲がってきた。

(あ……昨日来た山崎さんの息子だ……)

そう思いながら、バイクを黙って見ていた。

給油をする訳でもなくバイクは洗車スペースに入り、コイン洗車の前で止まった。

それを見て「顔を見るチャンス！」そう思い、無料で使えるカードを持ち、バイクの側に歩いていった。

山崎さんが洗車会員だったので、それくらい誤魔化すのは訳無いと思ひ、ヘルメットを取った顔を覗きこみながら

「これ、よかつたら使ってください。お父さんが洗車会員だから無料で洗えますから」

ニコリと愛想を振り撒き笑顔で言った。

チラツと目が合ったその顔は、高校生にはちょっと見えなくらい大人びた顔だった。

山崎さんが自慢するだけあるな・・・そう思うくらいその子は綺麗な顔立ちをしていた。

けれど、どこか寂しげで冷たい感じが印象的だった。

ヘルメットで潰れた髪を手でクシヤと掻き分け、愛想の無い顔で黙ってカードを受け取った。

別に頭を下げる訳でも無く、「ありがとう」と言う訳でもないその子に、

やはりあまり良い印象は無く

「じゃ、終わったらカウンターに戻してくださいね」

それだけ言っただけでまた店内に戻った。

(ちよっとくらい顔がいいからって感じ悪いの・・・)

そう思ったけれど、所詮高校生だし・・・

その程度の印象でちょうど入ってきた車に走っていった。

その日は前日の夜が雨だったのこともあり、

夕方は洗車の数が多く、慌しく時間が過ぎた。

バイトのオジさんが汗をかきながら

「華ちゃん、あれ見た？バイク少年。まだ洗ってるよ」

そう言っただけで笑いながら敷地の隅にいる、山崎さんの息子を指差した。

「うっそ！まだいたの？もう3時間くらい経ってるのに・・・」

「ただ汚れてんのよ。すごい・・・」

そう言いながら指を指したほうを見た。

そんな話をしながら笑っていると、山崎さんが時間通りにまた現われた。

「こんばんわー 息子さん来てますよー」そう声をかけるとバイクの側に歩いていき、一言、一言会話をしてこっちに歩いてきた。

「アイツ何時からいるの？」

「そうですねえ・・・2時頃かな」

「女の子からしたら気持ち悪いでしょ？あんなにヲタクだと」

「いえ。そんな事ないですよ。でも、ちょっと長いかな・・・でも好きなんです。バイク・・・」

そう言いながら二人でバイクを磨く息子を見ていた。

その顔はさっきの無愛想な顔では無く、どことなく嬉しそうな顔で一生懸命に磨いていた。

「お！気に入った？」

「あ・・・いや、、、嬉しそうな顔してるな〜って」

「ハル〜！父さんが彼女見つけてやったぞ〜よかつたな〜」と急に大声で言った。

慌てて「違いますって！そんなんじゃないですよ！」といったが
肝心の息子は興味なさげにチラツとこつちを見たが、またすぐにバ
イクに視線を戻した。

(やっぱり・・・なんだか無愛想だ・・・)

「息子さんハル君で言うんですか？可愛い名前ですね」
たいした可愛いとは思わなかったが、一応社交辞令でそう言った。

「だろ？4月生まれだから春彦って言っただ。忘れないだろ。
で、縮めてハル。華ちゃんもそう呼んであげて。」

女の人とあんまり話さないから喜ぶから。ほら、あのくらいの年
って

毎日女のこと考える年でしょ？ふふふふ」

オヤジらしいこと言いやがる・・・そう思いながら

「あ・・・はい」と愛想笑いをした。

忙しさに気がついてみたら、もう時間は6時近くになっていた。

「あ・・・もうとっくに帰っていい時間だ。じゃ、もう帰りまーす」
山崎さんにそう言って帰り支度をして事務所を出た。

自分の車に歩いていく途中、彼の側を通った。
無視するのも大人気ないと思い、

「じゃ、お先に失礼します。ごゆっくり」見ていないのを知ってい
たが、
軽く頭を下げ挨拶をした。

すれ違うギリギリにそのしゃがんでいた影がスツと動いた。

「あの、オヤジがすいませんでした。いつもあんなんで・・・
今日はカード、ありがとうございました」
そう言ってペコツと頭を下げた。

「あ・・・いえ。じゃ、」
ちよつと驚いた。どーせ無視をされると思っていたので
そんないきなりの言葉にビックリして思わず立ち止まってしまった。
高校生相手にちよつと緊張している自分がどうかと思ったが、
なんとなく・・・彼とはもつと仲良くなるんじゃないかとその時
思った。

黙って立ち止まっていると、フツと顔をあげ

(なにか?)という顔をされた。

慌ててもう一度頭を下げ、そのまま急いで車の所に走っていった。
高校生に変にドキドキしている自分に動揺しながら車を発進した。

バックミラーを見ると、こつちを見ている彼の視線を
感じた・・・それだけでちよつとドキツとした。

(いやいやいや・・・違う!違う!)そう思いながら車を走らせ
た。

それからハル君は一日おきにGSに顔を出した。

だいたい4時くらいになると、遠くから聞こえるマフラーの音に
(あ！きた・・・)と少し嬉しくなる自分がいた。

2週間もすると、ハル君はバイクを洗車場に止めてから

「カードいいですか？」と自分からカウンターに

来るようになり、「はい」と手渡すと少しだけ柔らかい表情で

「ありがとう」と言うようになった。

その顔にだんだんとドキドキする自分がいた。

高校生相手に……

一日おきに来るので、少しずつ他のスタッフもハル君が

洗車をしていると、側に行き話し掛けたり冗談を言ったりと仲良くなっていた。

けれど私といえば、別にバイクに詳しい訳でもなく

なんの共通点も無いままに、みんなと笑顔で話すハル君をカウンタ
ーで仕事をしながら見ているだけだった。

そんなある日、

昼休みをバイトのオジサンと一緒に食べていた時。

「ねえ。華ちゃん知ってた？山崎さんの息子ってさ

ここの近くの結婚式場でバイトしてるんだってさ。

バイクに金かけたいみたいだねー」

「高校生が結婚式場でなにすんの？」

「ウェイターじゃないの？似合うかもね」結構ガツチリしているし

高校生には見えないよね。ハル君て・・・」

(へえ・・・だから1日置きなんだ・・・あれほどバイクが好きなら毎日来てもおおしく無いって思ってたけど、なるほどねえ)

そんなことを思いながらご飯を食べた。

「あ！私、その結婚式場に来週行くよ？友達の結婚式で。うまくいったら見れるかもね」

「華ちゃんあーゆーの好きなんだ？まあ・・・結構可愛いもんね」

「全然そんなんじゃないよ。だって高校生でしょ？

ストライクゾーンから外れてるから・・・」

「だよね」 さすがに高校生はね～～～」

「ね～～～～」

妙な感じで二人で笑った。

そう言ったが、本当はちよつとあの無愛想な顔でどんな風にウェイターをやっているのか見たいかも・・・

結婚式での楽しみがまた一つ増えたな・・・

これで新郎の友人にカッコいいのがいたら申し分無いや！
そう思いながらニヤニヤして食事を続けた。

ふとそんな顔で食事をしているとオジサンと目が合った。

慌てて真面目な顔に戻った。

「顔・・・ヤバかったよ・・・今」

「ですよね・・・」

微妙な空気で昼休みを過ごした。

昼休みの後はいつの間にか高校生が好きな年上女として
スタッフにからかわれた。

（別にそれだけじゃないんだけどなあ・・・）
そう思いながら、来週の結婚式をちょっとだけ楽しみにした。

落ち着けない

友人の結婚式の当日。

朝からボクとしながらも、美容室に行き髪をセットし化粧をされ大きく背中が開いたシックな洋服に身を包んだ。

（気合入ってるぜ！）思わず自分でそう思うくらいに完璧にキメた。

まだ19歳だと、それほど多くの結婚式を体験することは無かった。それに今は入籍だけで式をあげる人が多いのもあり、

このチャンス逃がすものか！と友人達と気合を入れ式場に向った。

だいたい結婚式で友人が式をあげるとしても、

心の底から「おめでとう〜」なんて思う人はきつと少ない。

だれしもが「チツ・先を越されたぜ・・・」と思い、

高いお金を払うのだから、イイ男の1人や2人いないとやってられない。

そこで彼氏でも捕まえられればチャラでもいいか・・・

人の幸せよりも自分の幸せ！この頃の私達の合言葉でもあった。

まだ肌を露出しても余裕な年齢だからこそ、わざと目立つように背中が大きく開いた服を着て、友人達と式場に向った。

ただ・・・ハイヒールだけはやっぱり苦手だった。

まだ式場に足を踏み入れたばかりなのに、もうカカトが痛くなり歩いては座り、歩いては座り・・・足の悪い老人のような動きで自分の席についた。

新婦の香奈に、

「絶対、新郎の友人も半分入れた席にしてよ！」と
他の悪友の亜矢と里実と3人がかりで攻撃し、大騒ぎの末ゲットした席なのに……

これじゃ外の受付で一日終わってもいいや・・・
そんな気持ちになるくらい期待とは裏腹な新郎の友人達だった。

「朝からの苦勞・・・どうしてくれる・・・」

いつもの目よりも倍に大きく

見えるように完璧に化粧をした里実が手をわなわなさせて自分の名前が書いた紙をちぎっていた。

「今日ジャージでもよかったね・・・」

そう言いながら鼻から煙を出し亜矢がその意見に賛同した。

「私、足痛いからトイレでスリッパ盗んでこようかな・・・」力無く言う私に

「そうしなよ。もういいじゃん！」と二人は言った。

派手なドライアイスの中から笑顔で香奈が登場しても、
綺麗なシャンパンタワーを見ても気分は一向に上がる気配を見せず、

「ちきしょう・・・あいつ一番まともな男押さえやがったな・・・」

そう3人でブツブツと文句を言いながら席に座っていた。

余興が始まる少し前、上座に行きみんながお酌をする時間帯になった。

すかさず3人で笑顔で香奈の側に行き、

「おめでとー」「すっごい綺麗」「お前後から殺すからー」とビールを注ぎに行った。

その秘めた笑顔を察して、中腰になり顔を近づけ

「ごめんって！だってあそこまで質が悪いなんて思わなかったんだよー」

眉間にシワを寄せて香奈が謝った。

せつかくの結婚式だし、まあ・・・仕方ないか・・・

そう思い、「いいよ！いいよ！旅行の土産なんて期待しないから」と少しだけ根に持った言い方をして各自、席に戻ろうとその場を離れた。

里実と亜矢は他の席に行き、

「キヤー！久しぶり〜」と古い友人達とはしゃいでいたが、その頃には私の足の靴ズレが本格的に痛くなり、歩く度に鈍い痛みが走った。

「イテテテテ・・・もうダメかも・・・」

そう思いながら足を引きずり自分の席まで痛いほどの足をあまり床につけずに歩いていた。

「バンソウコウいますか？」

その声に振り向くと、そこにはいつものとは違う髪型をピシッと決めたハル君が笑いを堪え立っていた。

一瞬、誰かと思うくらい大人びたその姿に黙って顔を見た。

「靴ズレでしょ？あっちまで行ける？」

そう言いながら出口を指差し笑った。

「い、行けるけど。全然痛くないし！」そう言って我慢をして無理に早足で出口に向った。

一歩ごとに心の中で「きゃー！」と叫びながら痛みを我慢してなんとかロビーのイスに倒れこんだ。

急いでヒールを脱ぎカカトを見ると真っ赤になって内出血をしていた。

「あゝあゝ．．．そんなにキメた格好してその足って．．．」

その声に顔をあげると、バンソウコウを差し出しながら笑っていた。

「仕方無いじゃない．．．普段履かないんだから．．．」

そうふくれた顔をして受け取るうと手を出した。

「格好わるうゝ　せっかくいつもよりお洒落したのに残念だね」

「別にそんなに痛くないもの。ただ赤いだけだし」

明らかに嘘なのに言い返した。

「じゃあ・・・いらないね。バンソウコウ」

そう言っ取り返す仕草をするハル君に慌ててカカトにバンソウコウを貼った。

「もう貼っちゃったもんね」

「プツ！子供かよ・・・」

初めて間近で見るその笑顔に妙にドキドキしている自分がいた。バンソウコウを貼った足でヒールを履くと、さっきよりは少し痛みが和らいだ。

ハル「そんな足じゃ二次会とか行けないんじゃない？」

「どーせ行かないもの」

期待ができないあのメンツと、ジワジワと痛いこの足では行っても仕方が無い。

「今日は車？」

そんな私の言葉を聞いてハル君が聞いた。

「ううん。タクシーで来たから・・・バンソウコウありがとね」
そう言っ立ち上がったが、やはりまだ痛みが響いた。

「送ってあげようか？」

その言葉にドキツとした。

そして瞬間的に「送ってもらいたい！」そう思う自分がいた。

高校生相手に慌ててると思われるのは恥ずかしいと感じ、普通な声で

「じゃあ・・・そうしようかな」とできるだけ（仕方無いから・・・）
そう聞こえるような声で答えた。

「おっけー。じゃあ8時半に、ここで。そろそろ戻らないと怒られ
ちゃうから後からね」

そう言つて小走りに式場の中に消えていった。

その後姿を見ながら、本当はドキドキして仕方無い自分の心臓を押
さえた。

（うっそ・・・ 相手高校生なのに・・・大丈夫？私？）

自分に問いかけ、ゆっくりと足の痛みを感じながら式場に戻った。

（いや・・・違うな、ただ足が痛いから送ってもらうだけだ。うん）

頭の中でそんなことを考えながら、自分の席に着いた。

目の前の同じ歳くらいの新郎の友人がお酌をしてくれたが

そんなのには目もくれず、ボツとしていた。

いつの間にか戻ってきた私の姿を見つけ里実が駆け寄ってきた。

「ちよつと！どこ行ってたの？二次会の参加出席とってたよ」

「え？あ・・・あの・・・私はいいかな？遠慮しとく」

「だよね〜 行っても意味無いもんね〜 私もやめようかな〜
じゃ、どこか行く？せつかくここまでキメたのにもつたいないじ
ゃん」
そう言っつて目を光らせた。

(うつ・・・そんな話になるなんて)
どう断ろうか必死で言い訳を考えていた。

「なにになに。どこか行くの？じゃあ私もそうしよーっと！」

亜矢も話に入り込み段々と断りづらい状態になってきた。

「あ・・・あのね。私、ちよつとバイト先の知り合いに会って・・・
その・・・足痛いから送ってもらうことにしたの。
だから・・・その・・・これ終わったら帰ろうかなって・・・」

足が痛いのは事実だし、このまま行っても痛みで楽しめない。
そのことは本当だった。

けど・・・内心はハル君と一緒に帰りたい気持ちが一番だった。

「ええー！なにー いつの間に。ここの会場にいる人？どれ？だ
れ？どこにいるの」

二人が険しい目で一気に言うのに負けて、会場の中を見渡した。

「えーと・・・」少し暗い式場の中を探すと正面にハル君の姿が
見えた。

目線が合い、それに気がついたハル君が自分の足を指差した後「O

K?」という仕草をした。

その仕草に同じように「OK」というポーズで返した。

その瞬間、里実と亜矢に力いっぱい背中を叩かれた。

「うっ……」一瞬息が詰まるほどの力に

「グーで殴らなくていいじゃん!」と振り返って怒った。

「ちょっとー! なにあれ。イイ男じゃん。いないと思ったらナンパしてたの? 抜け目無いねえ……」

「違う! そんなんじゃないってば! だって高校生なんだって。

うちの仕事先にいつも来ている人の息子なんだって!」

咄嗟に言い訳をした。

「はあ。高校生? なーんだ……。おこちゃまじゃん。

じゃあどうする? 亜矢、二次会行く?」

スツカリこつちの話を無視して二人で話しを進め出した。
その冷め具合に

(やっぱり高校生はナシだよなあ……)

そんなことを思いながら二人の会話を聞いていた。

60歳くらいになって相手が58歳でも問題は無い。

けど、17歳と19歳で、しかも相手が高校生だとすると、なんとなく世間の目が痛く感じた。

そして……まだそんな間柄でも無く、ただ送ってもらっただけなのに

そこまで頭の中で考えている自分が寒くなった。

結局、里実と亜矢は二次会に参加することになり、別れる時に二人に散々

「悪いこと教えちゃダメよ？お姉さまあ〜」と冷やかされ二人は元気に去って行った。

「はああ〜……」ため息をついてさっきのイスに座った。

時計を見るともう9時を少しすぎていた。

人がどんどん帰り、ロビーにはもう数人の人しか残っていなかった。

(もう帰ろうかなあ……タクシーで帰ってもいいし)

そんなことを考えながら、その場に座っていた。

「ごめんね。ちょっと遅くなっちゃった」

その声に顔をあげると、そこにはさっきのピシツときめた感じとは違う

わざと髪をグシャグシャにし、Tシャツ姿のハル君がいた。

さっきとのギャップに少しガツカリした顔をしてしまった。

「あ……さっきの格好のほうがいい？その顔は」

「あ・・うつん。そんなことない！ただちょっと変わるな〜って思っただけ」

「じゃ、行こうか。先輩にメット借りたからさ」
そう言っつてちよつと汚いメットを見せた。

「あ・・送るつて・・バイク・・だよ。そうだよー」

「だつて俺、まだ17歳だもん。車は乗れないよ。はいこれ」
そう言っつてメットを手渡した。

そのまま後ろを着いて行くと、
式場の駐車場にはいつものピカピカのバイクが停まっていた。

「その格好じゃ・・ちよつと目立つかなあ・・ま、仕方無いね」
また少し笑いながらそう言われた。

確かに今の格好はバイクに乗る格好ではないと思った。
これじゃキャバクラ嬢と学生の如何わしい同伴出勤のような感じが
するくらいの差があった。

メットを被ろうとしたが、なんだか上手く被れず、一人で苦戦を
していた。

「もう・・被ったこと無いのお」

そう言いながらやや力を入れてグツと押され目の所をカパツと開け

「よし。これで大丈夫！」

そう言っつて顔を近づけた。

(わー!!近いつて!顔!!)

そう思いながら、慌てて目の所を閉じた。

バイクに跨り、慣れた感じでエンジンをかけ

「じゃ、乗って」と言われ、慌てて横座りをした。

危なく後ろに倒れそうになるのを見て、

「なんかさ・・・もっと落ち着こうよ・・・」

ハル君も目の所を閉じているので、顔は見えなかったが絶対笑っていると感じた。

(もっと落ち着けよ・・・)自分でそう言い聞かせ
とりあえずシャツの裾を掴んだ。

「ちよつと・・・シャツ伸びるんだけど。ちゃんと捕まらないと落ちるよ」

そう言われたが、そのまま体に手を回すことがどうしてもできなかつた。

ジーンズの腰の部分をほんの少し強く握った。

それでもドキドキしすぎて、どうしようかと思った。

クルツと振り向き、両手でジーンズを掴む手を握り自分の腰にまわした。

その手の暖かさにもドキドキした。

「じゃ、行くよ」

そう言ってゆっくりとバイクが動き出した。

最初こそ、ゆっくりだったが、道路に出た後は開いた背中が寒いと感じるくらい、風が冷たかった。

本当にきちんと捕まっていないと吹き飛びそうな衝撃に自然とまわした手にシツカリと力が入った。

ハル君と触れている部分だけは、その寒さをまったく感じず暖かかった。

信号で止まり「あ・家知らなかったんだけど。どこ？」

そう聞かれ簡単に説明をした。

走って10分もしないうちに家に着き内心ちょっとガツカリした。

メットを脱ぐ時にちょっとファンデーションがついてしまい、

「あ。ごめんなさい。今、急いで拭いてくるから」そう言うと

「いーよ！いーよ！どうせ借り物だしさ、それより怖くなかった？大丈夫？」少し心配した顔で聞かれた。

「ううん。全然！とっても気持ちよかった。バイクの後ろなんて初めて乗ったから。もう家に着いちゃって残念。ありがと」

そうお礼を言ってメットを返した。

「あ……あの、よかつたらもう少し乗る？まだ時間あるから。
バイトの日は11時までには帰ればいいんだ。あの、無理にとは
言わないけど……」

その言葉に慌てて答えた。

「あ……じゃあ、10分。いや、5分で着替えるから。
ちょっと待ってて。あの、すぐ来るから」

「そんなに急がなくていいよ。待ってるから」

急いで家に入る途中に

「あの、名前。ちゃんと教えてなかったよね？」
そう振り返ると、

「え？知ってるよ。進藤華さんでしょ？」

「あ……うん。ならいいの。じゃ、ちょっと待ってて！」

家に慌てて入り、部屋で服を着替えながら、

() やばい……絶対やばい……() そう感じながら焦っていた。
名前を呼ばただけなのに、ドキドキしている自分がいた。

可愛いなあ……

結構高い服なのに、急いでベットに着ていたドレスを脱ぎ捨てた。ジーンズを履き、Ｔシャツを着て慌てて部屋を出た……。が、階段の所まで走り、また部屋に戻り化粧を直した。

薄い色のリップだけを塗り、急いで外に走っていった。二度ほど階段に足をぶつけながら……

「ごめんね！ハア……ハア……」

その姿を黙って見て、

「ん〜 俺もさっきのほうがよかったかな？」

「えっ……なに。格好？だってさっきの格好じゃねえ……」

「いや、あんなに肌が出てるのって見たことないしさ。普段は制服だしね。じゃ、行こうか」

そう言ってさっきのメットをもう一度手渡された。

また被るのに時間がかかり、

（もう……）と言われまたグツと押された。

「じゃ、今度は普通に乘れるでしょ？横座りならこっちが怖いよ。ちゃんと捕まって」

そう言われて、今度は普通の座り方をして乗った。

また手をまわす時にちょっと躊躇したが、それでも軽く腰に手をまわした。

「どこ行こうか。どこか行きたい所ある？」

「うーん・・・運転手におまかせする」そう言ってそのまま黙って後ろに座っていた。しばらく考えてから

「じゃ、文句言わないでよ？」

さつきより距離が長かったせいもあり、風が気持ちよかった。思っていたより広い背中に少し緊張をしながらも、やはり触れている部分は暖かく感じた。

15分ほど走ったあたりで速度が落ち、ゆっくりと停まった。辺りは真っ暗で、ここがどこなのかサッパリわからずキョロキョロと辺りを見渡した。

「離してくれないと降りれないんだけど」

ポンポンと軽く手を叩かれ慌てててを離した。

メットを脱ぎ、バイクを降りたがやはりこの場所がどこなのかわからなかった。

周りに人はいなく、ただ真っ暗だった。

「こっち来て」

そう言われて少し小高い丘にあがると

そこにはコジンマリとしてはいたが、綺麗な夜景が見えた。

この街にこんな景色が見える所があったんだ・・・

そう思いながらその夜景を見ていた。

「あゝ・・・やっぱダメだった？俺よくわかんないからさあ・・・

女の子が喜びそうな所とか考えたんだけど・・・いまいちわかんなくてさあゝ」

「ううん。そんな事無い。すごく綺麗だよ。こんな所あったんだねえ・・・へえゝ」

そう言つて夜景を見ていた。

「やっぱ華さんくらい遊び慣れてると、こんな所じゃつままないよね」

(おい・・・今なんて言つた・・・)

「なにそれえー 誰が遊び慣れてるって？」ちよつとムツとして言つた。

「え？だつてそうじゃない。なんか男慣れしてそうだしさ。

ドライブとかも、もっと凄い所行くんでしょ？

こんな陳家な夜景じゃなくて、もっとドーンとして凄いのとか見慣れてそうだなゝつてさ」

「ちよつと・・・私そんな風に思われる訳？

それ酷くない？全然真面目だから！失礼な！」

「はいはい。そーゆーことにしておこうか。

今日だってたまたま足が痛いから、俺と付き合ってもいいかなって
思っただけでしょ？わかってるって〜」

そう言っただけで笑いながらもっと奥の高い丘に昇っていった。

なんだかなあ・・・そう思いながら後ろを着いていった。

さっきの場所とは少し違う角度から見える夜景は綺麗に光っていた。

「俺さ、たま〜に嫌なことあると、ここに来るんだ。俺の秘密の場
所・・・内緒だよ」

そう言っただけでこっちを見て笑った。

その笑顔を見た瞬間、大きく胸が痛んだ。

(絶対やばい・・・本当にやばい・・・)

「そ、そうなんだ。うん。内緒にする・・・」
片言ないい方で返した。

男の人とこんな所に来たことが無い訳でも無いのに、ドキドキして
まともに視線を
合わせることができない自分がある。

「ハル君さ、彼女とかいないの？」

「いる訳ないでしょ〜そんなの!!」

「そ、そんなに焦って言わなくても・・・」

「だって、俺って怪しくない？華さんもそう思ってたんでしょ?」

すこし怪訝そうな顔でこっちを見た。

「え?・・・言ってる意味がわかんない。別にそんなこと
思ったことないけど。どうして?」

「だって・・・オヤジが言ってたから。あんまり夢中でバイク洗って
るから

華さん怖がってたよって・・・」「うわあ〜 ヲタク」って言って
たって・・・」

あのオヤジ・・・碌なこと言わねえ・・・
くつつきたいのか、そうじゃないのか。

でも、ニヤニヤとそんなことをハル君に言う山崎さんが想像できた。

「そんなこと思ってないよ。バイク好きなんだな〜って
思っただけ。別に怪しくも怖がってもいないよ」

「だって、全然俺の近くに來ないじゃん。いつもショップの中にい
て、

他のお客さんとは話すけど・・・」

「だって・・・私バイクとか全然わからないし。

一生懸命洗ってるのに邪魔しちや悪いかなって・・・

なら、今度は邪魔しに行くよ。ワーワーとうるさいくらい」

「うん！どんどん邪魔してよ。待ってるから！いや〜そうだったんだ」

どことなく安心したような顔をして前を向いた。

けど、こっちは「どんどん邪魔してよ」とか「待ってるから」の言葉に冷や汗が出るほど緊張していた。

そして、その横顔を見てほぼ確定くらいハル君のことが気になっていた。

しばらく夜景を見ながらそこで話をしていた。

「あ！やばい！今って何時だろ？」

いきなりそう言われ携帯の時計を見ると11時を少し過ぎていた。

「あ。ごめん！怒られちゃうね。もう帰ろう！」

慌ててバイクに乗り、家まで向った。

時間を気にして帰るあたりが、やっぱり高校生だな……

あんなにヘラヘラとして山崎さんは家では結構シツカリした父親なんだと思った。

家の前に着きバイクから降りて今日のお礼を言った。

「今日は楽しかった。ありがとう。でも、ごめんね……山崎さん怒っちゃうね」

「ううん。大丈夫。今日は面白かったよ。
またね。ちゃんと邪魔しに来てね。じゃ・・・」

そう言つてバイクが見えなくなるカーブまでその場に立って見送つた。

もう一度戻つてきてくれないかな・・・

そんなことを思ったが、姿が見えなくなる手前のカーブでブレーキを2回踏み、ハル君のバイクの音は完全に聞こえなくなりその期待はあっけなく終わった。

部屋に戻り、さつき脱ぎ捨てた洋服の残骸を手にとりハンガーにかけた。

けど、そんなことをしながらも頭の中にはハル君の顔が延々とまわっていた。

（やっぱり高校生は、ちょっと年下とかが好きなんだろうなあ・・・）

普段はまだ19歳ということを武器に好き勝手していたが、相手が年下となると、急に若さの武器が使えなくてどうしようかと考えた。

でも、さつきの雰囲気とイメージからして、自分に興味があるようには思えなかった。

遊び人のお姉さんとちょっとバイクに乗ってみました・・・

そんな感じのハル君にどう動けばいいかわからず、

その日はあれこれと考えながら終わった。

翌日。

いつもの時間にハル君がバイクで現われた。

カウンターで簡単な計算をしていると、下からいきなり顔を出した。

「うわ！」急に驚かされ思わず声が出た。

「昨日さ、オヤジに怒られちゃった・・・」

怒られたわりにはニコニコして話し掛けてきた。

ちょうど周りに人がいなかったのを確認してから

「やっぱり怒られたんだ・・・ごめんね」と謝った。

「ううん。でも華さんと一緒だったって言うたら

「ならいいか。今度はうちに連れておいで」ってさ。

それほど怒ってなかったよ。大丈夫。

だから今度うちに来ない？オヤジも楽しみにしてるってさ」

「えっ・・・そ、そうなんだ。うん。じゃあ今度行くね」

実際かなり慌てながら、それがバレないように答えた。

「うん。それじゃ洗車してくるね」

そう言っつてハル君はいつものポジションに消えていった・・・

内心、家に誘われて嬉しいような・・・

でも親が公認という所にちよつと子供だと感じた。

やっぱり所詮、高校生は高校生だな・・・

そんなことを思いながら、その日も5時を過ぎた頃に
バックを持ってみんなに挨拶をして車まで歩いた。

ハル君の隣にきた時、

「じゃ、帰るねー」「ゆっくり」「そう声をかけ歩いた。

「あの一ちよつといいかな？」

「ん？どうかした」

そう聞くと、ちよつと言いずらそうにキョロキョロと
辺りを見渡し、小声で話し出した。

「今日・・・暇かなと思って・・・昨日の今日でなんだけど・・・
もしよかったら遊びに行かないかなって・・・」

いきなりの言葉にちよつと動揺しながらも、

「あ。うん・・・いいよ。じゃあ・・・どうしようか？」
そう笑顔で言った。

内心、そう言ってくれたのが嬉しく少し照れたような顔が可愛いと
思った。

「じゃあ・・・1時間後に迎えに行く。いい？」

「あ・・・うん。じゃあ待ってる。それじゃね」
あくまで冷静にそう言っただつもりでも、本当は口を開けたら
心臓が飛び出しそうなくらいドキドキしていた。

窓際の自分の部屋から、バイクの音が近づくの黙って待っていた。

なんとなく嬉しい気持ちでいっぱいになった。
小さくマフラーの音が聞こえてきたのを感じ、外に出ると
もう目の前にハル君のバイクが停まっていた。

「じゃ、今日はもつと違う所に行ってみようか！

まだ明るいし。海とかが行ってみる？ちよつとベタ？」

メットを被ったまま、籠った声でそう言われた。

「ううん。海でいい。天気もいいし、まだ温かいと思うから」

後ろに積んだメットを、またギョツと頭に被せてくれ後ろに乗った。

昨日よりは少しだけ手をまわすことが慣れたような感じがした。

途中でふと思いつき

「ちよつとコンビニに寄ってもらっていいかな？」

信号が赤の時に言い、花火を買って海に行った。

「海って言ったら花火でしょ？」

「花火なんか小学生からしたこと無いなあ・・・」

まるで子供を見るような顔で言われた。

まだ暗くなりきっていない海を歩きながら、いろんな話をした。

ハル君の家のこと、自分の家のこと、

バイクのこと（よくわからなかったけど）

いままで知らなかったことを靴に砂が入りながら話した。

「華さんてさ・・・彼氏いないんだよね？」

「うん？今はないけど・・・なに。バカにしてんの」

「いや〜 そんなこと無いけどさ。じゃあいつも何してんの？
休みとか、仕事終わってから家帰ってとか？」

「ん〜 休みは友達と遊んでるかな？平日は家にいるかなあ？
TV見てたり・・・ゲームしてたり。そんな感じかな」
我ながら、19歳を満喫してないなあ・・・そんなことを考えた。

「ゲームとかするんだ？見えないね」

「そう？ミーハーだから有名なRPGとかはするよ」
何を自慢してるんだか・・・と思いながらもそんな話をしていた。

「じゃあ・・・今度一緒にゲームしない？暇な時でいいから」

「うん。いつでもいいよ。早めに言ってくれたら休みの日でもいい
し」

「えっ・・・本当！いいの？休みの日でも」

嬉しそうな顔を見て頷いた。

「じゃあ・・・今度の日曜でもいい？俺の家！」

山崎さんもいるのかあ・・・

別になにをする訳でも無い、ゲームをするだけなんだが・・・

「うん。じゃあ、山崎さんも誘ってくれたし・・・そうしようかな」

「？」

「うん！じゃあ日曜日に迎えに行くよ。何時がいい？」

どんどんと話を詰められ、結局日曜の1時迎えに来ることになった。その日、暗くなった海で花火をして遊んだ。

あんなことを言っていたが、いざ始まるとハル君は喜んで盛り上がっていた。

(やっぱ子供だな・・・こんなところは)

「ほら！華さん。これ見て！」

花火でグルグルと輪を作り、その輪の向こうに見えるハル君の笑顔がとても輝いて見えた。

(可愛いなあ・・・) そう思いながら笑いながら花火をするハル君を見ていた。

年下の彼氏

ハル君と遊ぶ前日の土曜。

里実と亜矢と3人で近くのクラブに遊びにいった。

里実「あゝあゝ．．．彼氏欲しいなあゝ」

亜矢「だよねゝ せっかくのこの若い時期を女ばかりで過ごすなんてもったいないよねえゝ」

二人は煙草を吸いながら文句を言っていた。

なんとなく明日のことを、この二人に言ったほうがいいのか、言わないほうがいいのか．．．そう思いながら二人の会話を聞いていた。

里実「華．．．欲しくないの？彼氏。お客でいいのいない？

金持ちでイケメンで．．．そうだなゝ背が180くらいの」

「あのさ．．．やつば高校生はナシ？」

軽い感じで聞いてみた。

亜矢「うっそ！実はそんな関係だったの？あのおこちゃまと」

「あ．．．いや。そうじゃないんだけど．．． ちよつと可愛いかなって。

ほら、見た感じ背も高いし、見えないでしょ？高校生に」

里実「ん〜 まあ・・・高校生って言っても2つ下だしね。
制服でデートしないならアリかな」

「だよな？だよな？全然アリだよな？」同意を求めて詰め寄った。

亜矢「え〜 私は無いな・・・ だって金も車も無いんでしょ？

私は年上しか興味無いなあ・・・」

亜矢はいつも年上のお金持ちしか付き合わない人だから
きつと言うことは分っていた・・・

里実「で。付き合ってるの？あの結婚式の時もうそうだったの？」

「いや・・・そうじゃないけど。何回かバイクで遊びに行ったんだよね。」

で、明日家に行くことになってるんだけど・・・」

亜矢「へえ〜 高校生かあ・・・ まあ一回くらい付き合ってみても

面白いかもね？ちよつと新鮮で。今度紹介してね」

ニヤニヤして二人は言った。

(別に付き合うとかって感じじゃないんだよなあ・・・)

そんなことを思いながら、その日はちよつと遅めの3時に家に帰った。

うちの親はそんなにうるさい方でも無いし、

いつも3人で遊んでいるのを知っているので、特に外泊を

しなければ文句は言われなかった。

翌日、12時には用意をしてリビングでお茶を飲んでいた。昨日とは打って変わって健全な日曜日の誘いにやっぱり学生だと変な所には連れて行けないもんなあ・・・そんなことを考えていた。

時間よりちょっと早い時間にハル君のバイクの音が聞こえ外に出るといつものバイクが停まっていた。

真っ直ぐハル君の家に行くと、山崎さんと初めて見た奥さんがニヤニヤしながら玄関に出てきた。

山崎「いらつしゃい」

山崎さんの言い方がちょっと気になった。

「あ・・・お邪魔します。へへへ・・・」

無意味にヘラヘラして笑いながら家にあがった。

逆に考えれば親に会うことに緊張しなくていい・・・とう特権があった。

山崎「ちよつと茶の間でお茶くらい飲んでいきなよ」

奥さん「いつも主人がお世話になって、すみませんねえ・・・どうぞ」

二人に詰め寄られどうしようかちよつと困った。

ハル「つーかさ・・・俺と遊ぶって来たんだから。部屋二階だから、こっちな」

そうやって先にハル君が二人を止め二階にあがっていった。

「あ・・・じゃあ後から・・・ご馳走になります」
そういって二人に挨拶して二階にあがった。

「よかったの？少しくらいなら顔だしてもよかったのに」
山崎さんが（あくあ）といった顔をしたのを見て、
部屋に入ってからハル君に聞いた。

ハル「いいんじゃない？だってどうせ夕飯食べていくでしょ？」

ならその時、顔合わせるじゃない」
そう言いながらTVのリモコンを探していた。

「え・・・いいよ。夕飯なんて。なんだか悪いし・・・」

ハル「え！そんなに早く帰るの？」

真顔で言われた。

「え？じゃあ泊まっていったほうがいい？」

ハル「ガキだからって馬鹿にしてるでしょ！」

「で。なんのゲーム？私なんでも強いよ」

そうやって話しをそのまま飛ばした。

ハル「ちょっと・・・本当にゲームだけしに来たの？こんなに早い
時間に」

そうやって話しを誤魔化したことを蒸し返した。

ちよっとだけドキツとした・・・

(え・・・他になにが?) 少し変な方向に頭が回った。

「え・・・なに? ゲームしようって言ったじゃない」

ハル「いや、そうだけど。もっと時間あるんだし、TV見たりとか話したりとか

あるじゃん。せっかく初めて遊びに来たのにさあ〜」

「あ・・・なるほどね。うん。いいよ。ハル君の好きなことで」

勉強机のイスしか、イスらしいものが無いので、ベットに腰掛け部屋を見渡した。

何枚かのバイクのポスターが貼ってあり、部屋は綺麗だった。

「もっと・・・アイドルのポスターとかベタベタ貼ってるのかと思っ
た」

そう言っただけのバイクのポスターを見ながら笑った。

ハル「そんな訳無いじゃん・・・ まあ、貼ってるヤツもいるけどね」

「ふん・・・綺麗だね。男の子の部屋って汚いのが定番だと思っ
てた。意外だったなあ・・・」

ハル「そりゃ・・・華さんくらい男慣れしてたら、いろんな部屋も見てるだろうから

汚い部屋の男もいただろうけど、俺結構綺麗好きだから」

ちよっと嫌味っぽく、それでいて笑いながら言われた。

「だからさ・・・そのイメージどうにかならない？
真面目だっけって言うてるじゃない。それにそんなに男の人の部屋だ
って知らないから・・・」

全然知らない訳では無いが、いままで遊びに行った人の部屋で
独り暮らしの人はやっぱりちょっと汚い部屋が多かったように感じ
た。

ハル「へえ・・・ そうなんだ。じゃあさ、年下っでいまままで付き
合っただことある？」

いきなり言われてちょっと慌てた。なんでこんな話になったんだろ
う・・・

それもなんだか上手く尋問されてるし・・・

「年下は無いかなあ・・・ やっぱり学生の頃と違って

1学年違うだけでも、すごい離れた感じするしね」

ハル「そうなんだ・・・ やっぱりガキだな〜とか思う？」

俺くらいの歳だと。特に華さんもう働いてるしね。高校生とかがっ
てやっぱり眼中に無い？」

この質問の答え方一つで、ちよつと今後この部屋に
居づらくなるんじゃない？そんなことを考えた。

「ん〜 どうだろ？私、制服のハル君見たこと無いしね。

この前の式場の制服姿なら、全然イケてたよ？」

（ウマイ！）自分の答えに完璧だ！と思った。

ハル「ふ〜ん・・・」

それ以上話を突っ込めなくてハル君は黙ってTVをつけた。ちようどお笑い番組が入っていて、二人でなんとなく見ていた。

そこに山崎さんが「邪魔します〜」とジュースを持って入ってきた。

ハル君がドアの前で受け取り、

「だからオヤジはいいってば。後から下行くから〜」とワイワイと二人で騒いでいた。その姿を見て、

「いいじゃない？山崎さん休みなのにどこも行かないんですか？」と話し掛けた。

まってました！とばかりに部屋の中に山崎さんが入ってきて座った。そんな山崎さんを見てハル君は不満そうな顔をしながら目の前にジュースを置いてくれた。

しばらく山崎さんの話に付き合い、30分くらいで

「そろそろ息子が怒ると困るから下に行くよ。」

じゃ、後から一緒に夕飯食べようね〜」と下りて行った。

「ハル君てお父さん嫌いって訳じゃないんでしょ？」

そんな不機嫌な顔したら可哀相だよ」

ハル「華さん、オヤジに会いにきたの？」

ムスツとした顔でこっちを見て少し怒った顔をした。

「ううん。ハル君のところに遊びに来たの。なんで？」

ハル「別に・・・」

その言葉にちよつとだけ機嫌を直したのがすぐ分つた。

やっぱりわかりやすく可愛いなと思った。

なんとなく彼女の気分になった。まだそんな感じは全然ないけど・

それからしばらくしてゲームをしたり、学校の話したりするうちにすっかり夕方になっていた。

下で山崎さんが「ご飯だよー」と呼ぶ声がした。

ハル「じゃ、続きは後からね。ゲームこのままにしとくよ」

そう言つてTVだけ消して一緒に下りて行つた。

リビングに行くと、ハル君にそっくりな人がもう一人いた。

座つた背格好はほとんど同じだった。

顔を会わせるとちよつと驚いた顔をして頭を下げた。

「双子？」驚いて山崎さんに聞くと、

山崎「いや、年子なんだ。こっちは誠つて言うの。どっちがいい？

華ちゃん」

素敵に空気読めてないぜ！オヤジ！と思つた。

誠「ハルの彼女？」

声までソツクリだった。

ハル「そう。俺の彼女・・・」

そう言っつてハル君がイスに座った。

その言葉に一瞬、焦りながらも否定したほうがいいのか、そのまま知らない顔をしたほうがいいのか迷ったが、山崎さんと目が合いヘラヘラと笑うだけでその場を流した。

山崎「そう。父さんが見つけてやったの。誠も探してやるっか？」
ニタニタと笑いながら、誠君を見た。

キッチンを見るとお母さんが一人で悪戦苦闘をしているが見え、私までここにドツカリと座っていいのかちょっと考えた。別にいい顔をするつもりは無かったが、手伝わないのも悪いと思い、

「あの、たいしたお役に立ちませんがお手伝いしますけど・・・」
と声をかけた。

内心（あらいいわよ。座ってて）と言われてからのほうが座りやすいと感じた。

奥さん「あ。いいの？ありがとー　うちって男所帯だからだれも手伝ってくれないのー」

そう言っつて簡単に手伝うはめになった。
一応、一回くらい断ってくれるだろうと次の台詞も用意していたのに無意味だった・・・

「男の子二人だといろいろ大変そうですね？」
一緒にキッチンに並び、お母さんに話し掛けた。

奥さん「そうなのよ」 体ばかり大きくて全然言うこときかないんだから！

大きくなると親と口もきかなくなるし。

でも、こうやって彼女とか連れて来てくれて一緒に台所に立ってお手伝いとか懂れていたの。ふふふ」

ニコニコしながらお母さんにそういわれ、返す言葉が無いまま愛想笑いをしながら手伝った。

食事中は山崎さんはしゃいで、いろんな話をし、ハル君も誠君もその話を聞いて笑っていた。

さっきのお母さんの言ったような親と口ときかないという雰囲気はまったくなかった。

食事の後、一緒に後片付けをしながら、ダイニングに座り釣りの話で盛り上がる3人を見ながら

(やっぱり男が3人もいるとむさ苦しいなあ・・・)と
思いながらその団欒を見ていた。

奥さん「華さん。また近いうちにぜひ一緒に食事してね。

やっぱり女の子が入ると場が和むのか、普段はご飯食べたらずつと二人とも部屋に行っちゃうの・・・

主人も本当は寂しいんだと思うから。ね？」

「あ・・・はい・・・」笑顔で皿を洗いながら答えた。

(けど・・・もう来ないかもよ・・・お母さん！)
そう思いながら複雑な気持ちになった。

後片付けが終わり、お茶を入れまた、みんなでダイニングに座った。
隣に座る誠君の顔をジッと見て、

「あの・・・弟？お兄さん？」と聞いた。

誠「え？あ・・・兄です。ハルより大人っぽいでしょ？」

髪が長い分そう感じたような気がしたが、それでも大人っぽいと
言うほどのことはなかった。

どっちにしても高校生だし・・・

ハル「へっ・・・彼女に振られたばかりのくせに。早く勉強すれば？
受験生なんだから」
そう言っつてハル君がからかった。

誠「うるせえな・・・俺が振ったんだよ。年下はダメだな。うる
さくて。」

華さん・・・だっけ？ハルなんか子供だから、俺のほうがいいよ？
性格だっつて俺のほうがいいし。俺も年上好きだから」

「えっ・・・いや、、そんな訳じゃないんだけど・・・」

ハル「兄貴はやめたほうがいいよ。女癖悪いから。華さんいこーじ
や、部屋行くわ！」

少し慌ててハル君に手を引かれリビングを出た。

部屋に戻り、ちょっと気まずい空気の中、さっきのゲームの続きをしようとTVの前に座った。

「さーどっからだっけ？私がやる？それともハル君がする？」
コントローラーを手に取り、ハル君の顔を見た。

ハル「兄貴、口がうまいから気をつけてね。

その、すぐ女の人コロコロ変えるしさ、悪い人じゃないけど・・・」

「なに言ってるの。あんな言葉で動揺すると思う？へ〜んなの」
そう笑ってTVの画面を見た。

ハル「さっきさ・・・俺の彼女」って言ったのどうして否定しなかったの？」

ポツリと言われ、そっちの言葉のほうで動揺した。

「あの場の雰囲気です違います！」とか言つと空気悪いかと思って、それにお母さんもそう思ってるし、

彼女が来たら一緒にお料理するのが夢だった〜みたいなこと

言われて言えないでしょ。これでも空気は読めるほうだよ？お父さんよりは」

その言葉に二人で一緒にクスクスと笑った。

ハル「あのさ・・・もしよかったら。その、本当にそうなっちゃわないかなって。

思ってるんだけどお・・・どう？」

主語を抜きすぎたその言葉でも、言いたいことは伝わった。
ハル君の顔を見ると、緊張したように何度も髪を触り、
目線をこつちに向けられずに、ＴＶを見たり、壁を見たりと忙しく
動いていた。

「「そう」ってなに？」

その行動が面白くて、わからないフリをして聞いた。

ハル「わかってんでしょ？」

（嘘だろ？）という顔をして、やっと目がこつちを向いた。

「さあ？お兄さんと付き合えってことかな。それもいいかなあ」
チラツと顔を見て言った。

ハル「やっぱ・・・兄貴のほうがいい？」

（いい？）のいの字を言ったままの口で止まっていた。
不安そうなその顔を見て、なんだか可愛くて、つい笑ってしまった。

「ううん。どーせ年下と付き合うなら、ハル君のほうがいいかな？
不器用っぽくて。私真面目だから、女慣れしてるのはちょっと苦
手だし」

ハル「マジ・・・で？よかったあ」ここにきて兄貴に取られるか
と思った・・・」
大きなため息を吐き安心した顔をして笑った。

「けど・・・気にならない？その、歳とか？

やっぱり同じ学生とかのほうがいいとか思うんじゃないの？
それも、ちょっと下の子とか？」

ハル「ぜんぜん！だって年上と付き合ってるなんて自慢だよ。

それだけで友達に「すげー」って言われるよ。

さっそく明日、友達に自慢しなきゃ！兄貴にも言ってるよ！

初めて上に立てた気分だ……くうくう」

なにが自慢なのかは意味不明だったが、本人がそう言うなら

（ま……いつか）と思い、そのまま両手を握って高々と上げ喜んで
いるハル君を見ていた。

そして内心……

（里実と亜矢になんて言おうかなあ……）

そんなことを考えながら、その後も健全にゲームを延々としていた。

これがいつもの調子で、年上の彼氏とかなら

こんな素敵なタイミングにキスのひとつもしてくれるのになあ……

そんなことを思いながら、隣で

（うわ！やられたー！）と敵に倒され<THE END>の

画面にシヨックを受けている年下の彼氏を見ていた。

（まあいいか……可愛いのは本当だから……）

そう思いながら、リセットボタンを代わりに押してあげた……

高校生とのギャップ

ハル君と付き合うようになって数週間後。
バイトが終わった時間にメールが届いた。

<今日はお祭りだから一緒に行かない？>

その文字を見て、（ああ・・・お祭りなんだ）と思った。
ここ最近、家と仕事場の行き来しかしていなかったので、
そんなことあまり気に止めていなかった。

昔ならお祭りと聞けば絶対行つたのに、そんな所に
ちよつと歳を感じた・・・

<OK!じゃあ30分くらい時間ちょうだい。

あと、せつかくだから歩いて行こう>

送信をしてから、急いでお母さんに浴衣を着せてもらった。
しばらく浴衣なんて着ていなかったが、せつかく行くのだからと
高校生以来、着ていなかった浴衣を急いで出してもらった。

バイクの音に急いで外に出ると、浴衣姿を黙って見たまま
何も言わずにハル君が立っていた。

「あ。バイクここに置いていこ。歩いててもそう遠くないでしょう？
この格好ならバイクはちよつと無理だし。
車も停める所無いくらい混んでるし。いい？」

「あ・・・うん。わかった・・・」

ポカンとした顔でこつちを見たまま、玄関の隣の開いたスペースにバイクを停めた。

「あの・・・やっぱり変？」

あまりに長い間、そんな顔をするハル君に聞いた。

「あ・・・いや。そんなことない・・・」

そうは言っても、褒める訳でも無く横目でチラチラと見てはまた前を向いた。

少しくらい褒めてくれたらいいのに・・・
内心そんなことを思いながら歩いた。

夜店の近くになると人がどんどん増えてきて、すれ違う度に体がぶつかった。

ちよつと体の大きいお母さんが子供を追いかけ、後ろからいきなり飛び出し、それにクリーンヒットして、前に転びそうになった。
グツと手首をハル君が掴んでくれて、なんとか転ばずにすんだ。

「ふう・・・ありがと。すごいね。オバさんパワーって感じで」

オバさんがこつちを気にせず猛然と走っていく姿を見て笑いながら言った。

「華さんも・・・ああなるんだね・・・」

そんな笑う私を見て、ハル君が笑った。

「ちよつと・・・まだそんな歳じゃないから・・・」

どンドン人混みの中を歩いていると、人の波に飲まれそうになった。咄嗟にハル君の手を掴み、そのまま黙って歩いた。

ちよつと緊張したような顔を一瞬したが、ニコツと笑い掴んだ手をギョツと握り返してくれた。

そんな小さなことにも嬉しくなり、まるで学生に戻ったような気分になった。

「あれ？ハルじゃん？」

出店と出店の間の狭い通路にしゃがんでいた人がいきなり声をかけたきた。

「おう。お前も来てたんだ。すげえーな。人が〜」

ハル君はその人に近寄り、声をかけた。

見た感じからして、同級生なのかな？

肌の感じがピチピチしているので、なんとなくそう思った……

「あれ・・・彼女？うちの・・・学校じゃないよな？」

こつちを見ながら繋いだ手をチラツと見た後に言った。

（お！学生に見える？まいったなあ〜）

そんなことを思い、少しだけニヤけた。

が、ジツクリ上から下までジロジロ見てから、

「もしかして・・・年上？」そう言ってハル君の顔を見た。

(ちっ・・・バレたか・・・)

「あ。うん・・・そう。やっぱそう見えちゃう?」
なんとなく嬉しそうにその友達に言った。

「まじかよ・・・へえ〜いくつ?」

興味津々にジロジロ見ながら一応は愛想笑いをされた。

なんていうか・・・ 共通な話題も無さそうなこの子に
へらへらとしている自分がどうなんだろうと思った。

「えーと。19歳。2つ上で華っていうんだ」

「そうか〜 どうも。初めまして。ハルと同じクラスの小池です」

ニヤニヤとしながら少しだけ頭を下げた。

「あ。進藤華です。こんばんは」そう言ってニッコリと笑った。

「今度、お友達と合コンさせてください。よろしくお願いしまーす」

小池君はピシッとした姿勢でもう一度頭を下げた。

「あ・・・そのうち・・・考えておくね」

内心(絶対無理!)と思いつつも、ハッキリ言えずに曖昧に答えた。

「おい・・・あんまり無理言うなよ。それにお前じゃ年上とは
付き合えねーよ。そんじゃな〜 行こう。華!」

「あ・・・それじゃ。また」軽く会釈をして小池君から離れた。

友達の前で呼び捨てにする所が、どことなく頑張っている感じがして、

ちよつと可笑しかった。

どこまで歩いてても、人は増える一方でイチゴ飴が買い、

出店の裏にある、川辺のベンチに座った。

「すごい人だね。街中の人が集まったみたいだね」

そう言いながら、飴を口に入れた。

「学生はこんな日じゃないと夜遊びできないしね。

さつきから友達に何人もすれ違ったよ。華さんの友達とか来てないの？」

「あれ？もう華って呼んでくれるんじゃないの？」

さつきは呼んでくれたのにいゝ？」

「あ・・・やつぱ気がついてた？」

「じゃあ、私もハルって呼ぶ。ならいいでしょ？」

そろそろ<君>をつける、ヨソヨソしい感じが気になっていたしちよつどいいと思った。

「え・・・呼び捨てかあ・・・なんかちよつとなあゝ」

困った顔をしながらも、少しニヤけていた。

「じゃ、もう少し見に行こう。ハル！」手を掴んで人混みの中に入っていた。

夜店の一番端まで行き「もう一回向こうまで行く?」

そんな会話をしていると、男の子と女の子が5〜6人いるグループがすぐ側にしゃがんで話をしていた。

その中の一人の男の子が

「あれ?山崎じゃん。久しぶり〜」そう言って側に来た。

「うわー!超久しぶり!なに?こっちまで来たのかよ?

うわー。何年ぶりだ?元気だったか?」

いきなりのハイテンションにちょっと引き気味な感じでその二人を見ていた。

数人の子が側に来て、ハルとワイワイ騒いでいた。

(ああ・・・みんな高校生なんだなあ・・・)

なんとなくその大騒ぎのノリに入りきれない自分がものすごく歳をとったような気分になった。

女の子達もまだ下手くそな化粧をして、唇だけが異常に赤かった。

学生らしい黒髪の子が一人、黙ってこっちを見ていた。

目が合い、ニコツと微笑んでみたが、すぐに目をそらされた。

ちよつと取り残された気分です隣に立っていると突然みんなに紹介された。

「あ、俺の彼女。年上〜華っていうの」

そう歳を強調されて紹介された。

男の子達は「おおおおー!」と言ったが、女の子達はただ黙ってこっちを見ていた。

きつと自分も同級生が学生の頃にそんな年上の彼女を
紹介したらきつと内心じゃ

「なんだよ・・・年上？オバさんじゃん」とか思っただろう。
そんなことを思いながら、とりあえず微笑んで頭を少し下げた。
ちよつとそんなことに疲れてきた自分がいた。

「すげえー いいな〜 いろんなこと教えてもらってえ〜」
イヤラシイ顔でニヤニヤとハルの肩に手を回した子が
こつちを見て浴衣姿を上から下まで見た。

「お前なに想像してんの？そんな話ばっかだな〜相変わらず・・・
じゃ、そろそろ行くわ。今度電話するな」
そう言つてスツと手を握り、また人混みの中に入って行つた。

後ろでは「いいな〜 今夜は朝まで祭りだな。おい！じゃーなー」と
騒いでいる声があった。
そんな友達に軽く手をあげ笑いながらハルは前を向いた。

（高校生は・・・そんなことに興味津々なんだなあ・・・）

そう思いながら、なんとも思つてなさそうなハルの横顔を見て歩い
ていた。

1時間ほどお祭りを楽しみ、また歩いて家まで帰つた。
家の前で時計を見ると、もうすぐ10時になるうとしていた。

「もう11時なっちゃうね・・・帰らないと山崎さん怒るね」

「今日は一緒にお祭り行つてくるって言つたから大丈夫だよ」

「じゃあ・・・少しだけうちあがる？まだ大丈夫なら」

「えっ・・・いいの？まずくないの」

なんとなく親や兄弟にハルを見せることに抵抗があったが、いつかはバレルんだと思うと、（いいや！）という気になった。初めて手を繋いだことがそんな気持ちになったのかも知れない。

「うん。いいよ。でも1時間ね」

そう言っただけで自分の部屋にハルを連れて行った。

部屋に入ってもハルはキョロキョロと落ち着かず、あちこちと部屋をウロウロしていた。

「ちょっと落ち着こうよ・・・なにいまさら緊張してるの？」
そんな落ち着きの無いハルの姿を見て言った。

「あ・・・いや・・・女の人の部屋って初めてだから、
なんだか落ち着かなくて。どこ見ていいのか・・・」

「へえ・・・ハルって彼女いなかったの？いままで」

「あ・・・いたけど、家に行くまででは無かったかな。
その、学校でとか、映画とか、それにそんなに長くは
付き合わなかったし。お互いの家とかが行ったこと無いし」

どんな付き合い方だよ。。。それ。。。
そんな風に思いながらも、そんな拳動不審なハルの動きが

面白くて笑いながら見ていた。

「じゃあ・・・ちょっと着替えてくるね。なにか飲み物もってくる」
そう言っつて部屋を出ようと立ち上がると、

「えっ！帰るまで、その格好でいてよ。」

せっかくだし、いつもよりイイ感じなんだから・・・」

「あら？いつもがダメって言われてる感じ・・・」
そう言っつてまた隣に座った。けど内心嬉しかった。

「そんなこと言っつてないっつてば。ねえねえ・・・さつきから気になっつて

いたんだけど、あれっつて天体望遠鏡？持っつてる人初めて見た。

すげー！なにこれ。覗きとかしてんの？」

たまたまりサイクルショップで見つけた望遠鏡を見て、ハルが騒いでいた。

勢いで買った方がいいが、あまり使い方がわからなかった。

「え？なんだか色が可愛いなっつて・・・買ったんだけど、中古だから説明書が無いの。だからまともに見れないんだ」

「へえ・・・じゃあ使っつてないの？なんか高そうなのに」

「いや？たま〜に月が綺麗な時は見てるよ。」

でもそれしか見えないの。星とかは倍率が違っつみたい」

そう言っつと「意味ねえ〜」と笑いながらベランダを開け
「ここで見えていい？」と勝手に望遠鏡を運び覗いていた。

隣に行き「ね？見えないでしょ」と二人でレンズを替えてみたり方向を変えてみたりとやってみたが、結局お互い1箇所ずつ蚊に食われ、部屋に戻った。

「きつと星が見えたら綺麗かな〜って思ったんだけど、
どうやっても無理なの・・・せつかく買ったのになあ・・・」
ベランダから窓つたいに望遠鏡を受け取りながらハルに言った。

「星とか好きなの？昔よく小学校の時はプラネタリウムとか見たよ。
もう全然行ってないけどね。行かなかった？ほら市立の・・・」

町の外れにある科学館のことをハルは言い出した。

小学生の時に、初めて友達だけで列車に乗って行くという行動が少し大人になったような気持ちになりそれほどプラネタリウムに興味も無いのによく行った。

「うん。よく行った〜 まだあるのかな？私が小学生の時点で
もうかなりボロかったけどね。もう潰れてるかもよ」

「行ってみようか？来週の華さんの休みに。」

俺、日曜はバイト休みだよ、学校はもう夏休みだし」

「呼び捨てにしてくれたら行くけど」

そう言つと、「あ・・・」と言つた後に、

「じゃあ来週行くの？華・・・これでいい？」

あくまでも健全なデートコースばかりだが、それはそれで楽しかつ

た。

ほんの少しずつでもお互い慣れてくることも・・・

バイトが休みの日は夏休みということもあり、ハルは昼前からGSに顔を出し、洗車が終わってもカウンターの椅子に座り、私が終わるまで待っていてくれた。その姿を山崎さんが見て、

「なんか青春って感じでいいなあ〜 うん・・・」と呟いていた。

ほとんど毎日、ハルに会いどちらかの家で遊んだり、バイクで遊びで行ったりと、もうそれが毎日の習慣のようになった。あの初めて見た夜景の場所も、何度も二人で訪れ側に立っている木に小さく落書きをしたりもした。

それでも・・・やっぱり二人の仲は健全なまま過ぎていった。

プラネタリウムに行こうと約束をした日。少し遠いので車で行くことにした。

昼前にハルの家に迎えに行くと、誰よりも先に山崎さんが出てきた。

「おはようございます」と挨拶をし、ハルが部屋から出てくるまでリビングに無理矢理通され、山崎さんと奥さんに捕まった。

「今日はどこ行くの?」「ニヤニヤして言う山崎さんに

「あ・・・プラネタリウム行こうかって・・・しばらく見てないし」
なんだか小学生か中学生のデートコースを言っているような気分に

なつた。

「ん〜・・・なんて健全なんだろ。いいんだよ？華ちゃん気使わなくて、

もつと大人のデートコースに誘ってあいつを男にしてやってよ〜」
そう笑う山崎さんに「もう！お父さん！」と横からお母さんが口を挟んでいた。

「あ・・・いえ。別に気を使つてませんから」

「またまた〜」

ニヤニヤと山崎さんが笑い、なにげにお母さんまで同じように私の反応を楽しんでいた。
似たもの夫婦・・・

そこにハルが下りてきて

「じゃ、いこ。そんなに遅くならないから」と言つて顔を出した。

「ハル・・・たまに遅くなってもいいぞ？華ちゃんにとってわかつてるし。」

なんなら泊まつてきても文句言わないぞ。ふふふ

(今日も素敵に空気が読めてない感じがイケてるぜ！オヤジ！)

「はいはい。わかりました。じゃ、行ってきまーす」
そう言つて二人で家を出た。

「山崎さんが男にしてやってくれつてさ」

運転をしながらハルに笑いながらさっきの話をした。

ふっ・・・と鼻で笑いながら、

「じゃあそうしてもらわなきゃ。よろしくね」そう言って笑った。

「そうだなあ・・・そのうちね」と軽く流した。

<よろしく>と言われた時点でまた年上を感じた。

きつとこの年齢差がなにげなくコンプレックスなんじゃないかと感じた。

けど、どう頑張っても縮められないこの年齢差は、

これからどんなに気にしても無駄なんだあ・・・

年上って喜ばれるのも22〜3歳までなんだろうな・・・

そんなことを思いながら車を走らせていると、科学館が見えてきた。

やはり昔も今も変わらないくらいボロだった・・・

「すげえ・・・まだあった・・・タイムスリップしてみたい・・・」

ハルが窓から覗きそう言った。

中に入り入場料を払うと受付に座っていたおじさんが

何食わぬ顔でスイツチを入れた。

途端に中の照明がパツとついた。

二人で顔を見合わせ

「もしかして・・・俺達以外誰もいないんじゃない？貸切だ・・・」

そう笑いながら中に入った。

あまり昔と変わらない展示物に「懐かしい」を連発して館内を歩いた。

どの階に行っても人の姿は無く、本当に貸切だった。

1時間ほどしてから館内放送でプラネタリウムの時間だと流れた。中に入ると親子連れが1組と、小学生が2〜3組いた。

「人いたんだね？でもカップルなんていないね」と笑った。

「昔よくプラネタリウムにいるカップルが暗くなるとキスするんだよね、

それを友達とよく見てた〜 今日はいそもないなあ〜」

「なにそれ……馬鹿みたい……」

そんな話をしているうちに室内が暗くなり上映が始まった。内容も全然変わっていなかった。

「全然変わってないね？」そう隣でおとなしく見ているハルに耳打ちすると、驚いて「うっわ！」と言った。

室内が暗くて他の人の反応がわからなかったが、絶対声は響いたと思った。

「シー……そんなに驚かなくてもいいじゃない……もう……いいよ」

そう言っただけまた上を向いた。

「あ。ごめん。なんだって？」まだ声が少し大きいような気がして体を寄せ小さい声で、

「昔と内容が同じだね……って言ったの。まだ声大きい」

「あ……ごめん。急に体くつつけるから……」

そう言われて体を離した。

そのまま黙って上を見た。作り物と分つていてもその星空は圧巻だった。

真つ暗な中に体が浮んでいるような感覚になった。久しぶりに見たその星空は懐かしさを通り越した。

ふっ……と顔の前に影を感じた。

その瞬間、星座の神話のスライドショーが始まり室内が少し明るくなり、ハルの顔がすぐ近くにあることに気がついた。

「えっ?……」

すぐ近くにある顔に思わず小さい声でそう言つと慌てて自分の席に体を戻した。

いつの間にかいた後ろの小学生達が小さい声で

「うわ……兄ちゃん間がわりい」と呟いた声が聞こえた。

クルッと振り向くとその子達は慌てて中腰で元の席に戻って行った。

(あ……なるほど……昔のハルみたいなものか……)

そう思つて少し明るくなった室内でハルの顔を見た。

チラッと横目でこつちを見てバツの悪い顔をした。

その顔を可笑しくて、その後ずーとクスクスと笑っていた。

時間的にもう終わりだな……という辺りでまた真つ暗な星が映し出された。

ちょうど夏の星座が赤い矢印で説明されていた。

真っ暗なのと、後ろに小学生がいないのを確認して、ほんの一瞬だけハルの頬に軽くキスをした。顔が離れた瞬間に室内に薄い照明がついた。明るくなってからハルを見ると触れた頬を触りこつちを見た。少し驚いた顔をして・・・

「間が悪いよ？お兄ちゃん」そう言って席を立った。二人で出口に向って歩いていくと、さっきの小学生がハルを見て、きゃーきゃー笑いながら抜かして行った。

「小学生の期待を裏切っちゃったね？」
そう言ってハルの顔を見た。

「あそこで明るくなるかあ・・・普通・・・」
苦笑いをしながら側にあつた展示物のボタンを押して照れ隠しをした。

昼少し過ぎた頃には狭い科学館の中を全部見て終わり、それでも二人でいることが楽しく、グルグルといつまでも中を見てまわった。

またプラネタリウムの前に来た時、一人のオジさんが星の写真を展示していた。

その人を見て、
「あの人に望遠鏡のこと聞いたら教えてくれるかも？」
そう言ってオジさんに近づき、なにやら話しをしていた。

(そこまで・・・真剣には思っていないんだけどなあ・・・)

そんなことを考えながらハルとオジさんを見ていた。

なにやら話しを終え、ハルはニコニコしながら一枚の紙を貰い

「これ見て。来週の土曜に、ここの近くの山で天体観測を

するんだってさ。で、望遠鏡を持ってきたら教えてくれるって。

行ってみよ？生で見れるよ」

「へえ・・・ちょっとマニアっぽいね。でも、面白そうだから
行ってみようか？」

少しだけヲタクっぽい人達が集まるような気もしたが、

ハルはウキウキしているようなので、オジさんに「行きます」と
伝え科学館を後にした。

その後、ハルの家に戻りまたいつものように一緒に夕食をご馳走に
なった。

もう夕食の手伝いをするのは当たり前前のようになっていた。

「もう華ちゃんが居ないと、食卓が静かなんだよ」

お母さんにお酌をしてもらいながら山崎さんが言った。

「じゃあ、早く誠君も彼女作ってもらって、日替わりで

来ないとダメですね？」そう言って誠君を見て笑った。

「俺？俺も年上がいいな」 オヤジも俺に先に紹介してくれたらよ
かったのに。

ハルなんか年上は10年早いよ。俺だって付き合ったこと無い
のに・・・」

そう言いながらハルの顔を見た。

「日ごろの行ないだな。俺はちゃんと先祖の墓参りとかしてるも。兄貴しねーだろ？じいちゃんは見てんだよ」

少し勝ち誇った顔をしてニヤツとした。

「あ。山崎さん、来週なんですけど、ハル君を夜ちょっと借りてもいいですか？

天体観測に行こうと思って・・・

ちよつと遅くなるかもしれないんですけど・・・」

空いたグラスにビールをお酌しながら来週のことを言った。

「ん？いいよ。華ちゃんと一緒になら。なんなら泊めてあげて。

下手くそだと思うけど、そこは教えてあげてね」

隣でご飯を詰まらせながらハルが山崎さんを睨んだ。

「いや、ちゃんと送りますって。大丈夫ですってばー」
引きつった笑いで答えた。

「ごめんねー お父さんちよつと酔ってるみたいでー」
お母さんがやんわりと話を誤魔化したが、

（いつもじゃねーか！空気読めっつーの・・・）と思いながら
笑顔でお母さんの話を流した・・・

横目でハルを見ると、少しニヤけた顔でキスをした頬を
軽く触りＴＶを見ていた・・・

星空の下で

天体観測当日。

5時ジャストに仕事を終え、準備万端で八ルを迎えに行った。

その日ハルはバイトの予定だったのに、休みを取り準備万端な状態で私の仕事が

終わるのを家で待っていた。

まだ時間が早かったのもあり、夕飯を終えたばかりのリビングにちよつと顔を出した。

「華さん、そんなのに興味あんの？」誠君が不思議そうな顔で聞いてきた。

「ん〜 でもプラネタリウムって綺麗だったよ？」

昔と今じゃ見る感じが全然違うの。誠君も彼女できたら行ってみたら？」

「そうそう。思ったより面白かったよ？」

そんなことを言う二人を見て、

「俺なんかあそこに行ってもイチャついたカップルを見に行くくらいしか

楽しみ無かったけどなあ？たいした星なんか興味無いし。

暗いとイチャつけた？」ニヤニヤして顔を覗き込まれた。

「してないから！そんなこと」「そう言っただけに」「ねー？」「と言っ
た。

「えっ・あゝ・・・うん。してない」「下手くそな言い方にちょっと
誠君が

笑い、山崎さんもニヤニヤしていた。

「じゃ・・・そろそろ行くか？もう8時過ぎだし」
ハルにそう言っただけで慌ててリビングを出た。

お母さんがポットに暖かい飲み物を用意し、他になにやら
食べるモノを袋に入れて手渡してくれた。

「もう。さっきの言い方じゃ、返って変に思われたじゃない。

もっとサラッと流してよー」

隣で袋の中のお菓子を食べるハルにそう言った。

「え？だつて急に話し振るんだもの・・・ちょっと思い出しちゃ
ったじゃん。

あの場で明るくならなきゃ小学生にいい物見せてあげたのにね」
口の周りにお菓子を付けながら笑った。

隣のナビが悪いのか、どんどんと山奥に入っただけ外灯も無い山道
を走って行った。

「ねえ・・・本当にここ？大丈夫？」

今、いきなり何か飛び出してきても、たぶんブレーキより

アクセル全開になりそうな暗闇にちよつと怖くなりながらノロノロ

と運転をした。

「うーん・・・たぶん大丈夫かな？この道しか無いじゃん。」

間違ったら間違っただけ仕方無いよ。十分肉眼でも綺麗に見えるよ」

呑気なことを言いながら外を見ているハルに気分はかなり不安になった。

そこから10分ほど上がったたり下がったりを繰り返して、やっと少しだけ広い道路に出た。

かなりの間隔をあけて外灯もあった。それを見て少しだけホッとした・・・

数台の車が停まっているのを見つけ、

「あの辺かな？」そう言いながら車を停めた。

「俺、ちよつと聞いてくるわ」そう言っただけでハルは車を降り、近場の人に話し掛け、こっちを見て「来て！」と手を振った。エンジンを切り、荷物を降ろして側に歩いていくと、この前のオジさんがニコニコしていた。

ハルが車から望遠鏡を降ろすまでの間、オジさんと

「今日は天気がいいからよかったね」と話をしていた。

ハルが持ってきた望遠鏡を見て、「どれどれ・・・」と

オジさんは慣れた感じでレンズを入れ替え焦点をあわせ覗いていた。

(少し寒いなあ・・・) そんなことを思いながら、辺りを見渡すと

結構な人がいた。

ヲタクっぽい人もいない訳ではなかったが、もう夏休みも終わりそうな週末ともあって親子連れの姿が目立った。

ハルはオジさんに捕まり、専門用語を山のように使われちよつと困惑した顔をしながら、「うんうん」と頭を縦に振り話を聞いていた。

「よし。これで見えると思うよ」オジさんがこつちを見て他の人の所に歩いて行った。

先に覗いていたハルが「すげえ・・・ちゃんと見える！」と騒ぎながら覗いていた。

「え？本当？見せて」場所を変わってもらい覗くと本当に星が間近に見えた。

寒いと感じていたのに、それも忘れワーワーと騒ぎながら二人で望遠鏡をいつまでも見ていた。

そのうち一組、二組と帰る人達が出てきたのに、

ハルと私はそんなのは全然気にしないでいつまでもあつちこつちと視点を変えて騒ぎながら見ていた。

きつとその場にいた誰よりも「すげー！」を連発して

ハルは真剣になっていた。

ハルが望遠鏡を覗いている間、肉眼で広がる星空を黙って見ていた。この前のプラネタリウムよりは、ちよつと落ちるけど

それでもここ最近、こうして星空を見るなんてことが無かったので綺麗だなあ・・・そう思いながら少し冷えた空気を中見上げていた。

空気が冷えている分、余計に綺麗に見えるような気がした。

「華、ちょっとこれ見て。土星って本当に輪があるんだな」

その声にまた望遠鏡を覗いた。

辺りにはもう人影がほとんど無かった。ほんの数組の人が遠くにいるような気配がしたが、それが男なのか、女なのか何人なのかもわからないくらい遠かった。

突然、ふわっ……とした暖かさが背中を包んだ。

振り返るとハルが毛布を自分の背中からかぶり、そのまま私の体に軽く抱きついていた。

「いつ積んだの？全然知らなかった……」

背中の中かさにちょっとドキツとしながら、前を向いたまま聞いた。

「え？華が母さんと話している間に、兄貴が持っていていけてさ。

たまには良いこと言っじゃん」そう言ってギュツと強く抱きしめた。

「ごうしなさいってことまで言ってくれたの？」

ハルには浮ばないような案にそう聞くと「バレた？」と笑った。

背中を通してハルの心臓の音を感じた。

笑っているのに、その動きがとても速く感じた……

「ハル……心臓ドキドキしすぎなんだけど……」

「え……そう簡単には止められない……」

「止められちゃ困っちゃうな・・・ずーと生きててくれないと」
そう言っただけのほうをクルリと向いた。

シーンとした音が耳に響くくらいの中で、ハルがゆっくりと顔を近づけた。

少しだけ背伸びをして唇を静かに重ねた。
ヒンヤリとした空気で冷えた鼻が少しだけぶつかりはしたが、唇は暖かく感じた。

目を瞑っても開けていても変わらないくらいの暗闇の中、ハルとの初めてのキスをした。

初めは気がつかなかったが、軽くハルの歯が小刻みに震えているのを感じて、唇を離し「寒い？」と聞いた。

「いや。暖かいけど・・・」ポツリと呟いた。

「もしかして・・・初めて？」

「当たり前じゃん・・・」

照れたような声で答えた。

なんの変哲も無い触れるだけの、そのキスを私は一生忘れない。

ちよつと下を向いて笑った・・・

「なに？下手だった？」そう聞かれて、「ううん。そんなことないよ?。」

そう言っでもう一度静かにキスをした。

それでも手が震えているのを感じて（可愛い……）と心から思った。

少しだけ唇を動かし、軽くハルの唇を挟んだ。

その動きを真似するかのように、少しはまともなキスになった。

お互い耳が冷たくなって少し痛いと感じるまで

何度も何度もその場に立ったままで唇を重ねた。

「明日、口腫れたりして？」冷えた体を車のヒーターで

暖めながらハルが照れくさそうに笑った。

「毒でもあるような言い方しないでよ……」

少し唇を尖らせながらハルを睨んで言った。

「どう？少しはうまくなった？」

「ん……そうだなあゝ もう震えないかもね？」

そんなことを言いながら帰り道も信号が赤になる度に
どちらからとも無く、唇を近づけた。

今考えると、馬鹿みたいなことだけど……その時はそんなことが
嬉しく、これ以上の幸せは無いと思った。

0時を過ぎた時間帯にハルの家の前に車を停めた。

下の階はもう真っ暗で二階の誠君の部屋だけは明かりがついている
のが確認できた。

「それじゃ……またね」

毛布やポットなど、手にいっぱい荷物をかかえハルがニッコリと

微笑んだ。

「うん。じゃあまた明日。明日は早い時間に家に行くよ」
そう言っただけ荷物を持ったまま、窓に顔を近づけて
もう一度、少しだけ上手になったキスをした。

途中でポットが下に落ち、思っていた以上の音が静かな家の前に響いた。

せつかくの良いムードを素敵にぶち壊すのがハルらしいと感じながら、

大慌てでポットを拾う姿を見て思わず笑ってしまった。

「寒いからもう家に入って。じゃ、明日」

そう言っただけ見送るのに「先に行つていいよ」といつまでも帰るきっかけを

掴めないまま、お互いその場にいた。

ガラガラ・・・と窓が開き、

「ちよつと・・・いつまでチュ〜チュ〜してんのよ！こっちは勉強してんのに！」

誠君の声が聞こえて慌てて窓を閉め車を発進した。
ハルも慌てて家の中に飛び込んで行った。

部屋についてからも、幸せな気分は続いた。
ニヤニヤとしていつまでも、窓辺に座り星空を見ていた。
携帯にメールが入り見るとハルからだった。

<今日は楽しかったな。また明日 おやすみ>

そのメールにも嬉しくていつまでもお互い夜中まで返信をした。恋愛の最初の頃は本当に馬鹿になると思った……

それから何回かの日曜日。

ハルの家で一緒にＴＶを見ていた。

するとニュースでここ数十年に１回、あるかないかの流星群が近々見られると話題になっていた。

次の時にはきつともう生きてはいないだろな……というほどの珍しいものらしかった。

またみんなで夕飯を食べている時、

流れていたＴＶの中でもやはり同じニュースが放送され、

それを見た山崎さんも、そこまで話題になる流星群にちょっと興味を持っていた。

「華ちゃんこれ見に行くのかい？」

「そうですねえ……なんだか凄いいみいだし、今度同じものを見るのは

もう無理みたいですね」そう言いながらご飯を食べていた。

「この辺でも見られるみたいだけど、どーせならもつと

綺麗に見える所に行ったほうがいいね」

そう言つて昔、家族で旅行をしたと言つ星が綺麗と有名な所を教えしてくれた。

それを聞いてハルが

「え……行つていいの？そんな遠くまで」と少し驚いた顔をして山崎さんを見た。

「でも11月じゃバイクはダメだけど・・・華ちゃんが運転してくるって言うならいいぞ。次の時にはもう死んでるだろうし、天体ヲタク二人にダメって言ったら可哀相だしな〜」
そう言っただけを見た。

「でも、そんな遠くなら日帰りは無理だし、ましてや夜じゃないとダメだから、最低でも1日は泊まらなないと行けないですよ？
外泊までOKしてくれるんですか？」

二人で山崎さんを見ると、ニタニタと笑いながら

「ああ。華ちゃんの家がいいって言うならいいよ？

後のことはあんまり言わないよ。それは二人のことだから〜」

「でも、見るのは夜中だし、きっとそのまま寝ちゃうから、
そんな変な心配しなくても大丈夫！」

それを見て誠君が

「よかったねえ〜 朝まで一緒にいられて〜」と笑った。

ニタニタする家族の視線を痛いほど背に受けながら
二人でそそくさと二階の部屋に行った。

戸を閉めてからお互い目が合い、「よかったね・・・」とニッコリ笑った。

親にいちいち聞かないと外泊もできないのは、ちよつとめんどろっただ
つたが

それでもハルと丸一日一緒にいられることが嬉しかった。

その日までは、まだ一ヶ月以上もあつたが、二人で地図を出し
あれこれと言いながらプランを練った。

そんなある日。
仕事帰りの山崎さんがいつものようにGSに顔を出し、
ちよつと困った顔をして話し掛けてきた。

「華ちゃん・・・ハルにさ、勉強すれって言っただよ。
アイツ最近ビックリするくらい成績落ちたんだよ・・・
ったく、バイトも辞めさせようかなあ・・・」と難しい顔を
した。

きつとバイトを辞めさせても、それは変わらないのではと思った。
毎日、GSに顔を出し、私が終わってから遅くまで遊んで、
バイトの日は終わればまた一緒にいて・・・
絶対その下がった原因は自分にあると思った。

「あの、きつとその原因は私だと思います・・・
最近ずつと遊んでいるし・・・あの、すいません」
申し訳無い声でそう言った。

「いやいや。そんなこと言ってもらう為に言ったんじゃないよ。
本当に！ただ俺から言ってもうちのヤツが言っても
あまり聞かないからさ。華ちゃんからなら聞くかなって・・・」

「あ・・・わかりました。じゃあ言います。これ以上下がるなら
しばらく会わないで勉強してもらわないと、私も山崎さんに
合わず顔無いし・・・後からバイト終わったら言いますね」
気を使ってそう言ってくれた山崎さんに言った。

「そうかい？きつとく会わないって言うこと真剣になると思っから。」

アイツは単純なヤツだからさ。最近は少し逆上せ上がってるからどーせ授業中も華ちゃんの体でも想像してニヤニヤしてるから成績も下がるんだよ。よし、これで一安心だ〜」

きつとそう言わせようと企んでそんなことを言ったようにも思えたが、

やはり学生という線はキツチリしてもらわないとな・・・

その日、ハルがバイトを終えてから皮ジャンを風に膨らませながら家の前に来た。

そのままハルを部屋にあげ、さっきの話を切り出した。

「ハル・・・成績下がってるんだって？」

チラツと見ながら言った。

「え・・・なんで？オヤジから聞いたの？」

冷たそうに手を擦り合わせてちよつと驚いた顔をして聞いた。

その手を上から包み込んで息をかけながら、

「これ以上下がったら、もう会えないかも・・・」

ハルには期待してるんだよ、山崎さん。

来月のドライブだってダメって言うかもよ？反対されたら、行き辛いなあ・・・

明日から仕事終わったら家庭教師してあげる。どう？少し勉強しない？」

上目使いで寂しい顔を演じてそう言った。

「えっ・・・家庭教師って。できんの？華・・・」

ちよつと動揺しながらも、反撃してきた。

「英語ならね。うちのお母さんて帰国子女だから、子供の頃から英語は得意なの。数学は無理……。国語もどうかなあ……微妙だけど……」

言われてみたら、その役には立ちそうも無かった。

「あ、でも俺、数学は得意。英語はさっぱりダメなんだよ。じゃあちよつどいいじゃん。華が教えてくれるならいいよ」

案外あっさりとOKしてくれた。

やっぱり親の言うことは正しい、結構単純だった。

「でも、家庭教師ルックにしてね。どーせなら」

（お前……エロオヤジに似てきたな……）

そう思いながらもせっかくやる気になったのだからと、それをOKした。けど、どんな格好なのかいまいち分らなかった。

「勉強か〜 早く学生卒業してえ〜」

グツタリとしながらベツトに横になり文句を言っているハルを横目で見ながら、

「でもこれで次のテスト下がったら泊まりのドライブも無しだね……

ぎゅんねん……なにかあったかもな〜」と言つと、ガバツと起き上がり

「それはダメでしょ！ヤバい。絶対あげないと！よし、明日からね」

とまたヤル気になっていた。

単純はきつと山崎さんのDNAなんだと思った・・・

学生だと思い知る

翌日、仕事が終わってからハルの家に行った。

山崎さんには仕事場で会った時に、

「今日からちゃんと勉強するって言っていました。」

ちゃんと見張ってるから大丈夫ですから！」と報告しておいた。

「お・・・やっぱり単純だな。そっか。よろしくね

やっぱり華ちゃんに言っただけよ。」

そう言っただけニコニコしていた。

家に着いて部屋に入ると、ハルは呑気にゲームをしていた。

「ちょっと・・・勉強するんじゃないの？」

そう言いながらスイッチを消し、机まで引っ張って行った。

ブツブツと文句を言いながらも、横で見ていると

得意と言っただけあり、数学はちょっと本を見ただけでスラスラと解いていった。

「ハルさ・・・下がったってどれくらい下がったの？」

その難しい問題をなんなくこなすハルを見て聞いた。

「え？ん。学年でいつも5番以内だったのが・・・」

15番くらい？別に勉強しなかった訳でも無いんだけどな。

たまたまテストの前にちょっと遊んでたりしたから、

頭が回らなくてね。でも、それほど騒ぐことでも無いよ。」

(わ・・・5番以内って。頭いいんだ・・・)

学生のハルの姿など、ほとんど考えたことが無かったのだから、それを聞いて改めて(やっぱり学生なんだな)と思った。

「ハルって頭いいんだ？あまりそんな風には見えなかったけど・・・」

「ちょっと、それ酷くない？まあ、学校でやってる勉強なんて将来そんなに役にたつとも思っていないけどね。」

俺、バイク関係の仕事に行きたいしさ。

別に英語なんか出来なくても問題無いじゃん・・・」

まだ学生のハルですら、自分の将来をちゃんと固めているのにもたもたとあまり収入の良くないバイトで専門学校の入学金を溜めている自分が小さいな〜と思った。

「でも、偉いね。ちゃんと将来なにしたいって決めているなら。私なんかチマチマと専門学校の入学金溜めるのが精一杯だもん。それにそこに行ったからって、その後も続けるかなんてまだわからないし・・・」そう言っただけで英語の教科書を見た。

「華・・・専門学校行くの？いつ？そんな話聞いてないけど」
動かしていたペンを止めこっちを見た。

「え・・・そうだなあ・・・結構入学金高いんだよね。
本当は来年の4月って思ってたけど、ちょっと無理だから
その次の4月になるかも？」

「そうなんだ・・・じゃあ、俺も近くの大学にすればいいかな。」

どーせこの辺にはいい大学無いしさ。じゃあお互い独り暮らしだしもつと気軽に会えるじゃん。そっか、じゃあ再来年にしようよ。その頃ならもう一緒に住んでもいいって言うかもよ？」

「そうだね。でもまだ全然先の話じゃない？」

それより今は次の試験に力入れてよ！こつちも困るんだから！

次の流星群なんてもう死んで見れないんだよ？

せっかく外泊していいって言われてるのに無駄にしているのー」

本当はそう言ってくれたハルの言葉が嬉しかったのに、照れ隠しのように話を誤魔化した。

内心、少しだけ将来の自分の仕事のことなんか

どーでもいいと感じていた。このままハルと一緒に居れて結婚なんかできたら・・・そんなことを思った。

「はいはい。わかりました・・・」ブチブチと言いながらハルはまたペンを持ち真剣な顔をしてノートに目を向けた。1時間ほどしてから、誠君が覗きにきた。

「あれ？今日はイチャつかないで真面目に勉強してんだ？」

ハル、ちよつと英語の辞書貸して。学校に忘れてきたみたいでさ」

そう言ってハルの本棚の中から辞書を出してパラパラとめくった。

「ん〜 違うなあ。やっぱりよくわかんねーや」そう言って辞書を閉じ困った顔をした。

「誠君なに探してるの？英語？」

「あ……うん。ちよつとね。単語じゃないんだけど……」

「私見てあげようか？なに」

「華、母さんが帰国子女だから子供の頃から家で英語教えてもらってたんだったさ。ためしに聞いてみたら？」

ノートから目を動かさずに誠君に言った。

「そうなんだ。じゃあちよつといい？」自分の部屋を指差してそう言う誠君に「ちよつと行ってくるね」とハルに伝え着いていった。

誠君の部屋はハルと同じ大きさの8畳の部屋だけど、置いてるインテリアが違うので、とても狭く見えた。机に行きノートを見て、例文の意味を説明した。

「すげえ〜 華さんもつと違う方向の仕事にすりゃいいのに……もつたないじゃん」ちよつと驚く誠君に優越感に浸りながら、

「別にあれはバイトだから。お金溜まったら専門学校に行くの。でも英語は別に好きじゃないから、どーでもいいの」そう言って笑った。

「後は？なにかわからないことある？」

「うん……どうしてハルなんかと付き合ってるのかってことかな〜」

「え。どうして？なにか問題ある？」

ちよつと嫌味のように言う誠君に苦笑いをしながら聞いた。

「ハルよりキスうまいよ？俺」椅子に座りながらこつちを見て（どう？）とおおげさに唇を出した。

その言葉にこの前の夜、実は見られていたんだと確信した。

「あら。ハルも上手よ？じゃ、また解らない所あつたら言ってね」

（はい）と軽く手を振って誠君も机に顔を向けた。

そのままハルの部屋に戻り、また隣の椅子に座った。

「兄貴の解った？」こつちを見ないで言うハルに「うん」と返事を
して

また教科書を見た。

「なんか変なこと言われなかった？」

「ん〜俺のほうがハルよりキスが上手いってさ」

そう言っつて例題を解いていた。

「はああ？アイツなに言っつてんのよ」顔をあげこつちを見て怒った
顔をした。

そのままこつちを向いたハルに顔を近づけキスをした。

怒った顔をすぐに元に戻し、椅子を少しこつちにズラした。

「だから「ハルも上手よ？」って言っつておいた」パツと唇を離し
また教科書に目をやりながらチラツとハルを見た。

「ん・・ならいいや」機嫌を直してニツコリとまた勉強を始めたハルが
やっぱり可愛くて、思わず頭を撫でた。
そのままハルは機嫌よく勉強をした。

7時を過ぎた頃、下から山崎さんの声がして二人で降りて行った。
誠君もその後にダイニングにつき、食事をした。

「で、どう？ハルの進み具合は？」
真面目に勉強を始めたハルに機嫌をよくして山崎さんが私を見て言
った。

「ハルって、頭いいんですね？もしかしたら前より上がるかも」
軽くプレッシャーをかけてそう言った。

「無理言っなよ・・・今だって渋々やってんだから・・・」
口を動かしながら、それでもちよつと自信ありげに言う
ハルを見て、山崎さんは満足そうに笑っていた。

「ねえ・・・華さん。俺も教えてもらっていい？」

誠君が話しに入り聞いてきたので、

「うん。いいよ。英語くらいしか教えてあげられないけど・・・
それでもいい？」

「全然OK！んじゃ、そんな時は借りるから？な、ハル」

「じゃあ俺の部屋に持ってこいよ・・・兄貴の部屋にわざわざ

行かせるのもなんじゃない。それならいいよ」

愛想の無い言い方に「ちいせえ」と誠君が呟いて笑った。

食事の後も、ハルは真面目に勉強をしていた。

夕食の後には英語に時間を絞り、集中してやり始めたが、苦手ということもあり、すぐに弱音を吐いた。

「俺、日本から出ないからもう英語なんか嫌だあ・・・」

「もう・・・好きなものばかりやっても点数上がらないよ？
ちゃんとやるうって・・・」

「実際、英語使うことある？今の日常で」

「へ理屈言わない！ほら、これ訳して」

ブツブツと文句を言いながら辞書を引き、考えていた。

さっきの数学とは偉い違う遅いペースに、眠気がでてきた。

「今日はもう終わりにする？ちょっと休もうよ」

「ね！華も飽きただろ？」一問終えただけなのに、大きく伸びをして飽きた顔をした。

「だーめ！」そう言って騒いでいると、ノックの音がして誠君が顔を出した。

「ハルがつるさいから、ノート持ってきた。ちょっといい？」

「うん。いいよ」そう言って誠君のノートを見て問題を解いて教

えた。

「はゝなるほど・・・ そっぴや習ったな」

誠君はそんなに英語が苦手な感じには見えなかった。

たぶん疲れて飽きてきたから、ちよつとした冷やかしだなと思った。

そのままベツトに座り、

「で。ハルは？ 苦手な英語克服できそう？」とニヤニヤしていた。

「ん？ なんかダメっぽい・・・」諦めた顔をして本を見ているハルに誠君は、

「でも、せつかく二人で外泊のチャンスだろ？ 真面目にやったほうが
いいと思うぞ」ね、華さん？」そう言っつて部屋を出て行った。

なんとなく誠君の言うことが意味深すぎて、その後の言葉がちよつと困った。

山崎さんといい、誠君といい、考えすぎだよなあ・・・

「じゃあさ、やり方変えようか？ 例題を全部暗記する方法にしよう。
それが一番簡単だから。流れで憶えていれば問題を見るだけで、
単語が簡単に出るからさ」

そう言っつて本にラインを引いて渡した。

「うん・・・」いまいち乗り気になれないハルを見て（やれやれ・・・）と思った。

そんなハルが（あく）高校生だ・・・と実感した。
学生って大変だな・・・今の自分がなんて気楽なんだろうと思った。

「ねえ。なにか英語で俺に言っつてみて。それ訳するっつてどう？」

ちょっと休憩のつもりで「なんとか教科書から抜け出したいのかそんなことを提案した。

「そうだなあ・・・」ちょっと休憩のつもりで考えノートに書いた。

<Come rain·come shine·I will always be in love with you.>

そう書いて渡した。

「すげえ・・・よくそんなにサラサラと書けるなあ・・・」
そう言っつて辞書を引きながら見比べた。

しばらくしてちょっと訳し方が違ったが、だいたいポイントはあっていた。

「よし。じゃあこれ貼っておこう！これを励みに頑張るよ」
訳した内容に気を良くして、また少しだけヤル気になった。

10時くらいまで勉強をしてその日は終わりにした。

「じゃ、明日はなにかプリント作ってあげるよ」
そう言っつて教科書を閉じた。

「なんかさー」ごめんな。つき合わせちゃって」

「ううん。成績下がったのは私のせいもあるしね。」

来年になったら、大学受験もあるから、
その時は私も学校で習うこと一緒に勉強するよ。
ならハルも気を使わないでしょ？」

なんとなく自分もなにかしらしないと、いけない気分になっていた。

「やっぱ華は大人だよな・・・あんまり怒らないし。
嫌なことにも付き合ってくれるし・・・」

「そんなことないよ。ハルと一緒にいるのが楽しいから
こうしてるんじゃない。それに怒ることしてないし」

「なんか・・・こんな時にギャップ感じちゃうなあ・・・
俺なんかでいいのかなとか、どんなに頑張っても上に立てないって
感じがしてさ。あゝあ・・・もう少し早く生まれたかったなあ・・・」

自分が感じていた歳のギャップをハルも感じていたのを知った。
けどハルがもう少し早く生まれていようが、いまいが
きつと私はハルのことを好きになったと思う。
そう考えれば、あまり意味の無い悩みだったように思えてきた。

「ハル、TVでも見ようか？」
そう言って考えているハルを引つ張りTVの前に連れて行った。

ハルがベットに座り、その足の間に入れて黙って見ていた。
いつからか、そのかたちが一番安心していた。
これがベットに座っていない時でも、ハルが座った足の間で座り
ハルの右手の親指の爪を触るのが癖になっていた。

そして軽く後ろから手をまわされた時に、その手を枕のようにして寄りかかるのも好きだった。

そんな私をハルはいつも「犬みたいだな・・・」と笑った。そんな小さなことに毎日が嬉しかった。

テストまでの間は、バイトの日はハルが一人で勉強をして、バイトが休みの日は隣について一緒に勉強をした。

そんな二人を見て山崎さんもお母さんもニコニコしていた。

テストがやっと終わり、

「どう?できた」と聞くと「当たり前じゃん」と好感触な返事が返ってきた。

結果は前よりも少し上の学年で3位というすごい成績だった。

そんな結果に二人で喜び、山崎さんに大意張りで

「これで文句ないだろ?行ってもいいよね?」とハルが聞くと

「そうだな。思う存分楽しんでこい」と笑った。

うちの親にはちょっと言い辛い所があったが、見るのが夜中とということもあり、一泊を許してくれた。

けれど部屋は当然、別と嘘をついた。

テストも終わり、泊まるホテルを探し自分達で予約をしてちやくちやくと準備は進んだ。

私の仕事も、有給を取って金曜の夜から行けるように準備をした。

ニタニタする山崎さんにも部屋は別だと嘘をついた。

そうでも言わないと、戻ってきてから何を言われるかと思うと

それが一番いいね・・・と相談してそう言った。

「えゝ そうなんだ？もつたいない」と言う山崎さんの言葉にハルと二人きりの時に聞いた。

「ねえ？普通さ、親ってそんなとこにうるさいもんじゃない？」

「あゝ でもあの人達からして、早いからね・・・」

「なにが？」意味がわからず、そう聞くと

「んゝ あの人達、高校の同級生なんだよ。で、初体験が1年の時だつて自慢してたから。別にいいんじゃないの？」

兄貴のことだつてオヤジは平気で聞くし・・・」

なんとなく親のそんな話は聞きたくないな・・・そう思い自分の親のことを考えた。

「なんか緊張するよね・・・そう思うと・・・」

そう言われて、その日のことをちよつと考えた。

「う・ん。そうだね。けど、別にその日だつて特に気にしなくてもいいじゃない？ こーゆーのは雰囲気だから。」

それに夜通し見てるから、疲れて寝ちやうかもしれないじゃない」

「あ・ん。でも、そう考えると丸々二日も一緒なんていままで無かったね。それは楽しみ」

お互い変に気を使ってその話の肝心なポイントをズラして話をした。

（別に泊まるからといって絶対なにかすると決まった訳では無い・・・）

そう思いながら、それでいて内心ドキドキしていた。

「でさ・・・ ちょっと聞いていい？」 ハルが不安そうな顔で言った。

「え・・・ なに？」

「あ、っ やっぱいいや。なんでもない・・・」

「あ・・・ そう。ならいいけど・・・」 ギクシャクした空気が返って緊張した。

お互い「楽しみだね」と言っても、違うことに緊張をしながらその日に向えた・・・

流れ落ちる星の中で

「じゃ！行つてくるね。戻りは日曜だから、あとこれホテルの番号。部屋は別だから！」

聞かれてもいないのに妙に強調して家を出た。

なんとなく後ろめたくマトモにみんなの顔が見れなかった・・・

お母さんは「気をつけてね」と呑気に言い、妹は

「いいな」とブツブツと文句を言っていた。

父は・・・「お前はいいけどハル君になにかあつたら困るから気をつける」と

ハルのことばかり心配していた。

うちは女姉妹なので、父はハルのことを息子のように可愛がっていた。

もともと・・・男の子が欲しかったみたいだし・・・

父の前でもハルはとて面白い子だったので、

今回のことも絶対信用されていた。

どっちかというと、私に変なことをするんじゃないかと疑っていて（逆だろ！心配の方向が！）と思いつつも、何も言わずに家を出た。

6時前にハルの家に行くと、山崎さんは顔を緩めながらニヤニヤし同じ顔をして誠君が横に並んでいた。

お母さんだけは普通に車の心配をしてくれた。

誠君が荷物を運ぶのを手伝いながら、

「やっぱりハルじゃなくて俺のほうがきつと楽しめると思うよ?」
と笑った。

それを後ろからバックを積みながらハルが

「そんなことないね」と文句を言っていた。

「じゃ、安全運転で行きますから。あつちに着いたら電話します。

行ってきまゝす」

すっかり暗くなった頃に車を発進した。

これからずっとハルと二人でいられる時間が嬉しくて

二人であれこれと話ながら車を走らせた。

目的地までは5〜6時間かかる道のりなのに、

疲れることを知らずにハルは地図を見て、自分はその通りに道を進んで行った。

途中のパーキングでご飯を食べることすら、

もう10時を過ぎていているのに、そんな時間に堂々と二人で一緒にいられることが嬉しかった。

11時を少しまわった頃、

「たぶんこの辺なんだけどなあ・・・」そう言ってハルが道路にある看板を見ながら地図と見比べていた。

「あ!もう流れ星が見える!華、見て!」

そう言われて車を止め窓を開けて上を見た。
ちよつと見ただけなのに、2〜3回星が流れるのを確認できた。

「あ・・・願い事できなかった・・・」
初めてジックリ見た流れ星に心が踊った。

そして、そこに見た見た星空はプラネタリウムに近いくらいの星空だった。

「俺もできなかったよ・・・ あゝあ・・・」

ガツカリするハルと一緒にいつまでも空を見上げていた。

もう11時を過ぎているというのに、車の数がどんどん増え
軽い渋滞になるほどだった。

「前の車に着いていけばいいね？」そう言って、その渋滞の波に車
を進めた。

ハルはいつまでも助手席から空を見上げていた。

「すげー」を連発して・・・

本格的に一番流れ星が集中するのは夜中の2時すぎだと
ニュースで言っていたのを思い出した。

「ねえ？確か一番流れ星が集中するのって夜中だって言ってたよ？
今でこんなに凄いなら、どのくらいの流れ星が見えるんだろうね
？」

「そうだなあ・・・俺、今でも十分感動してるよ・・・」

「すげー まじですげえ・・・」

首を痛めそうなくらい上を向いてハルは何度も「すげー」を言っていた。

ちよつと大きな通りに出て、歩いていた親子連れに

「この辺に詳しく無いのですが・・・どこか今日の流れ星が見やすい所ありますか？」と聞いた。

「この先に大きな公園があるから、その先の山の方がいいと思うよ。外灯が無いほうが綺麗に見えるから・・・」

お礼を言い、言われた所まで車を走らせた。

外灯も無く、それでいてちよつと小高い所に車を止め座れるような場所を探した。

もう見上げればどんどん星が流れていた。

よそ見をすることが、勿体ないくらいの星空に言葉も無く二人でただ上を見ていた。

シートに座り、またハルの前に座り足の間に入った。

曲げた膝を手すりのようにして上を見上げた。

「すごいね・・・」

「うん・・・すげー」

そう言つて口を開けながら上を見ていた。

どンドン周りにも人が集まりみんなの声が聞こえたが

「綺麗」とか「すごい」とかそんな言葉ばかりが聞こえた。

30分くらいして、お互い首が痛くなり、首を押さえて笑った。

「ちょっと待ってて。いい物もってきたんだ」

そう言っただけハルはトランクを開け、毛布を持ってきた。

シートの上に一枚敷き、その間に入り「こっち来て」と言われ側に行った。

横になり「隣に寝て！そのほうが首も痛くないし、寒くないよ？」

ちよつとその言葉に周りの目を気にして、

「え．．いいよ。なんだか恥ずかしいし．．．」と言いつつ側を見渡した。

寝袋や同じように横になりながら見ている人が沢山いてそれが二人だけじゃないことに気がついた。

（みんながそうしてるなら．．．）

そう思い、ハルの隣に横になった。

毛布を掛けられ暖かさが広がった。体の右側に感じるハルの体温を感じさつきより緊張しながら上を見た。

ちよつど時計が2時前後をさしていた。

もう空の星はひとつもジツとしていないこと無く、どんどん落ちて行った。

歓声に近いような声が揚がっている．．．

「ハル．．．すごいね．．．．．こんなの見れてよかった．．．」

「うん．．．．．なんだか夢見てるみたいだなあ．．．」

そう呟くように言ったハルの肩に頭をつけて流れる星を見つめていた。
もうきつとこんな星空は生きている間には見られないだろう・・・
それをハルと見られてよかった・・・

「俺さ・・・」

ポツリと隣で言うハルを「ん？」と顔をあげ見た。

「中学の頃、本気で死にたいって思ったことあってさ・・・」

そのく死ぬ>と言う言葉にドキツとしながら、そのままハルの顔を見た。

ハルは視線をそのまま上に向けて次の言葉を話した。

「オヤジ、今の仕事につくまで転勤ばかりで中学の1年から2年まで何回も転校してさ。転校先でイジメっていうの・・・あれにあつてさ。」

小学校の頃はそんな事全然、俺には関係の無いことだと思つてたけど

それが実際、自分に降りかかるとどうにもならなくてさ・・・
一度、そんなこと体験するとどこに行つても、もう上手く話すことが

できなくてさ・・・なんかそんなオーラでちゃうのかなあ・・・
3年になる時、こっちに越して来てちょうどこの前会つたヤツいたろ？

お祭りで・・・急に無くなるのな・・・イジメつて。

あいつ等とはなんとなく打ち解けてやっと普通の生活ができた・・・

けど、その前の2年間は最悪でさ……」

どどん話だすハルの言葉をただ黙って聞いていた……
そんな辛かったことなんて思い出さなくてもいいのに……

「あの時、死ななくてよかったなあ……
そしたら華にも会えなかったし、こんなにすごいのも見れなかつた……」

生きていたらいいことあるもんだな？あんだだけ嫌な目に合ったから
倍返してデキた彼女に会えたのかな？」

なにも言えずにただ黙っていた。

私が呑気に楽しく暮らしていた時間にハルがそんなことを考えた
時間があったことに、どう表現していいかわからないが悲しくなつた。

「誰見ても信じられなかったな」 優しくされても裏があるような
気がして。

いつも「俺に優しくしてもなんの得も無いから」って人と関わる
の避けてた」

「私も？」

「いや。もう華と会った時はそんなこと無いけどさ。

それに会う前から少しだけ憧れてたんだろ？……オヤジがい
つも

華の話してたから。初めて会った時も緊張したし。

初めてバイクの後ろに乗ってくれた時なんか俺、記憶飛んでも
の」

あんなに最初、余裕な感じで話をしていたので、そんな風には思えなかった。

こっちが真っ白すぎて見えていなかったのかもしれないけど……

「こんなに流れ星だらけだから、どんなお願い事も効いてくれそうだね。

なにも願います?」

「ちょっと話が暗かった?」

「ううん……でももう過ぎたことだから……

これからは良いことしか無いよ……きっと」

「そうならいいな……願ひ事は現状維持って願ひするよ……華は?なにも願ひする?」

「私は……ハルがどこに行ってもずーと一緒にいられますようにって

願ひする」

そう言っただけ黙って二人で流れ星を見ていた。

「それは星じゃなくて俺に言えばいいんじゃない?」

「そうだね……じゃあ約束ね。歳をとってハルがもし先に死んじゃったら

絶対一緒にいく。一人じゃ寂しいもの……」

「そっか。じゃあそうするよ。嫌だって言っても連れていくよ?」

その時はそんなこと、考えもしない遠い未来のことだと思い漠然とただ一緒にいられることに幸せな気持ちでそう言った。ハルと離れることなんて少しも考えていなかった。

きつとこのまま二人は一緒に歳をとり、いつまでも一緒にいられる・・・そう信じて疑わなかった。

空が少し明るくなる頃、星が見辛くなり帰る人達が出てきた。中には寝袋のまま眠っている人もいた。

朝日が射してきて、空が完全に明るくなり二人で車に乗った。ホテルを予約したけど、チェックインが2時だった。

「どうしようか？まだ時間あるね？」
ほんの少し眠気がさしたままハルに言うと、ハルもぼんやりした顔をして「うん・・・」と考えていた。

大きな木の下に車を止め、そのままシートを倒して目を閉じた。さっきの毛布を横にして手を繋いだまま眠りに落ちた・・・ちよつと体が痛くなりそうだったけれど、ヒーターの暖かさでハルの手を感触に、すぐ眠りに落ちた。

ピクツとハルの手が動いたのを感じ目を覚ました。時計を見るともう正午を過ぎていて、体が異常なくらい痛かった。横でハルは首を斜めにして、気持ち悪い格好で眠っていた。その格好を見て、笑いながら車を発進した。

揺れる振動に目を覚まし、

「あれ・・・あ・・・ 起きたんだ？腹減ったな〜 なんか食べようか？」

「言い、シートを戻し首をゴキゴキ鳴らしながらアクビをした。」

「ご飯食べてからホテルに入ろうか。そこでゆっくり寝よう？」

「あ！山崎さんに電話してなかった！すぐ電話して！」

隣でハルが昨日の星空を嬉しそうに説明しているのを聞きながら、車を運転した。

食事を終え、ホテルに着き、

フロントでハルが高校生だとバレるんじゃないかとドキドキしたが、普段着で、それも大人びた髪型をしたハルのことを

受付の人は全然気にせず年齢を私と同じと偽りカードに記入した。

どことなく二人とも緊張をしていた。

部屋に入り荷物を置き、部屋を見渡すと雑誌に載っていた通りの

部屋に「ふ〜ん・・・」とウロウロと歩きまわり

目が合うたびにドキドキして視線を外した。

「あのさ。もう眠くないよね？」ちよつと声を裏返してハルが言い

「あ・・・そうそう！さっき寝たからね。どうしようか？どこか行く

？」

私も声のトーンが変に高かった。

どこかに行くと行っても、また今日も少し見えるであろう

流星群の名残を見ようと山奥にたつ静かなホテルを予約したので周囲にはたいした見るものも無かった。

外はもう寒く、散歩という雰囲気でも無い。
窓から外を見ると晴れているのに、風が冷たそうだった。

「あのさ・・・そう緊張しないでよ。こっちまで緊張するじゃん・・・」

「あ・・・うん。なんだかこんな所に二人ってこと今まで無いから
ちょっと、、ね・・・」

そう言ってもどうしても取れない変な緊張を持ったまま話をした。

「ホテルの中見てこようか？」視線を合わせず言うハルに
「う、うん。そうだね。見てこよう」と慌ててキーを持ち部屋を
出た。

ロビーのラウンジでお茶を飲みながらこの寒いのに外で
走り回る子供を見ていた。

「なんだかすごい大人になった気分・・・旅行って感じ」
「だって旅行だもの・・・」また沈黙が続いた。

「俺が緊張するならわかるけど、華まですること無いじゃん。
その、、ほら、、初めてでもあるまいし」

「ちょっと・・・私そんなに遊んでないよ！失礼ね！」

「だって・・・そうじゃん。初めてじゃないでしょ？」

「そりゃ、、そうだけど、、でも、、」

後のほうが聞き取れないくらい小さい声に

「え？なに？」と聞かれたが、それ以上答えず黙って紅茶を飲んだ。初めてでは無いけれど、あまり良い印象は無かった。

私の記憶の中のセックスは「痛い事」としかインプットされていなく、

あまりの痛みに「二度としたくない！」とまで思っていた。

あんな痛いことを、どうしてみんな喜んでするのか未だにわからなかった。

一度だって気持ちいいと感じたことが無いのに年上だということと、ハルは私が男慣れしてると思っている今、言えないままだった。

小さいゲームコーナーで遊び、夕食の前に各自大浴場に行った。露天風呂に入り、夜のことを考えて憂鬱になった。

(どうしようかなあ・・・何も無いまま終わらないかなあ・・・) そんなことを考えながらお湯の中で足を小さくバタバタと動かしていた。

ホテルのサービスで好きな柄の浴衣を選び、それを着て部屋に戻るとハルも浴衣を着ていた。

「どう？似合う？」

「バカボンみたい・・・」

「なにそれー！ひでえ」

「だって・・・そんな上で帯締めるんだもん！」

自分で言った例えがあまりにピッタリで二人で目に涙が溜まるくらい大笑いをした。

食事を終え、空が暗くなるとまだ昨日ほどじゃないがいくつもの流れ星が見えた。

昨日ほどのテンションは無くともお互い部屋の窓でそれを見ていた。

そして心の中で、

（痛くありませんように・・・）と願い、隣でハルは（失敗しませんように・・・）と願っていた。

どっちが初めて？

山奥の静かなホテルから見る星空もやはり綺麗だった。

「部屋の電気消したほうが綺麗じゃない？」

そう言ってハルはスイッチまで走りパチッと切り自然な感じで後ろに立った。

(今日もこのまま朝まで星を見る・・・ってことは無いよなあ・・・)

もう星を見ることよりも、この後のことに不安な気持ちで黙って空を見た。

「そんなに無口になるなよお」

笑いながらソツと後ろから

手をまわすハルに緊張して体が堅くなった。

ただくっ付いていることは大好きなのに・・・

「もう寝ようか？ 疲れただろ。ずーっと運転だし昨日も寝てないし。今日はゆっくり寝ようよ」

「うん・・・ そうだね」

そう言って緊張を隠しながらハルの後ろを着いていった。ダブルベットが妙に広く感じた。

お互い少し離れたまままで横になり黙っていた。

もう寝ようといわれたが・・・きつとまだ普通じゃ考えられないくらい
時間が早いんじゃないだろうか？

(まだ9時くらいじゃ？)

突然ハルが「あっ！」と言って起きだし、なにやらカバンをゴソゴソ
しました戻ってきた。

「どうしたの？」

「あ・・・いや。なんでも無い」

なにか隠していそうな感じで枕の下に手を入れたのを見て

「なにになに？」と笑いながら、そこに手を入れようとした。

それを見て「いいって！いいから！」と慌てて人の手を止めしばらく
くふざけあっていた。

ハルの体の上を通りすぎ手を入れようとしていたので、

自然とすぐ体の下にはハルがいた。目が合い急に居たたまれなくなり
パツと体を離し、また元の場所に戻り黙って横になった。

ベットからも窓の外を見ると十分、綺麗に星が見えた。

「ここからでも見えるね。きつと昨日の見てなかったら、

今日のこれでも十分、大騒ぎしてるんだらうね・・・」

「あのさ・・・」

「ん？」

ハルのほつを振り返り顔を見ると、これ以上無いというくらい困った顔をしてこっちを見ていた。

「俺、タイミングがまったくわかんねーんだけど・・・」

その言葉に思わず吹き出してしまった。

こんな時、もつと男の人はスマートにリードするものだと思っただのに

ハルはどんな時でも素直でマイペースだった。

少しだけ空いた二人の空間を無くすようにハルの体に寄り添い布団の中でハルの手首をギュツと握った・・・

ちょっと違和感のある手首に軽く指で触ると

「あ・・・これ？ん・・・なんでもないんだ」

そう言っただけで軽く手首の傷を触った。

それはどう見ても自分で切ったような少し浮き上がった傷だった。その瞬間昨日のハルの話が頭に甦った。

「ハル・・・自分で切ったの？」声が震えていた・・・

「ん？あゝでも、病院に運ばれたのが早かったから・・・でも傷はたぶん一生消えないってさ。ま、根性焼きと思えばね」

そう言っただけ笑ったが、私はその深い傷に心臓が痛いほど早く動いた。

それほど思いつめていたんだ……

そう思えば、思うほどなんとも言えない悲しみが自分に広がった。

(ハルを守りたい……)

もう悲しい気持ちを味わって欲しくない……

今の自分の緊張なんか、どうでもいい物に感じられた。

少しだけ緊張しながらハルを見つめた。

「なに？」

「ハル……したい？」

「えっ……そりゃ、、ねえ……」

「じゃ、しよ？」

そう言っただけニツコリ微笑んだ。

ハルも微笑んで、ホツとしたような顔をした。

どこかぎこちない動きをするハルだったけど、なにも言わず

ハルの手の暖かさを感じていた。

「俺、ガッチガチじゃない？もっと男がリードするもんでしょ？」

「ううん。そんなことない。ハルの好きにして……」

手を上にあげた時に枕の下に手が滑り込んだ・・・
なにかを掴みそれを目の前に持つてくると、折れ曲がった
コンドームがパタパタと下に広がった。

「・・・・・・・・・・」

無言で見ている私にハルが気がつき慌てて隠そうと手から取り上げた。

「いや、無いとダメかと思って!」

「そりゃ、ダメだろうけど・・・普通一個でしょ・・・何回するつもり?」

「失敗した時の為に・・・その・・・」

「何回失敗するつもり?」

「もう! いいじゃん!」

そう言つてハルは唇を重ねた・・・

あの初めてキスをした日から、もう何度こうして唇を重ねたのだろう・・・

いつの間にかハルのキスは上手になった。

けれど、それは重ねるだけのキスであり濃厚なものでは無かった。

ゆっくりと唇に力を入れ、少しハルの口を開けた・・・

そっと舌を入れハルの舌を探した。

すつ・・・と吸う息を感じながらも、舌をそのまま絡めた。

その動きにハルも同じように舌を絡めながら、長い間そのまま何度もキスをした・・・

ハルの心臓の音が早くなり呼吸が少し乱れていた。

静かに唇を離すと、ちよつと不安そうな顔をして髪を撫でながら呟いた。

「俺、下手かもしれないけどごめんな・・・」

「先に謝らないでよ・・・」

「いや、なんだか華ってキスとか上手いからさ・・・」

「あのね、ハル・・・別にプレッシャーかける訳じゃないんだけど・・・」

そう言つて、本当はそれほど経験が無いことと、いままで気持ちがいいと感じたことが無いことを教えた。

「それ・・・プレッシャー以外のなにものでも無いんですけど」

「ごめん・・・だって言うチャンスがなかなか無かつたんだもん・・・」

「・・・」

「だって、華、キス上手いじゃん。慣れてるっていうか」

「だってキスは好きだもの・・・」

「何それ！すごい強引な言い訳だな・・・」

ちよつと呆れたような顔をして笑つた。

「でもハルとなら違うかもしれないし、そんなに緊張しないで？」

「わかつた。でも痛かつたら言つて？無理にするの嫌だし・・・」

その言葉にハルは優しいな・・・と思つた。

前の彼氏は「痛い」と言つても「大丈夫！」となにが大丈夫なのかその時になつてしまえば自分のことだけで突き進み私の痛みなどを考

えてくれなかった。

数回そんなことが続くともう私の中では「嫌な事」になってしまっているだけ二人でいることを避け、会う回数を減らした。

「痛いからするのが嫌い」なんて男の人に言えば
「貴方は下手です」というようなモノだし・・・

結局、私はその人に「好きな人ができた」と嘘をついて別れてしまった。

別れの原因を知ったら・・・その後トラウマになったら可哀想だし。

なんとなくハルとなら痛くないかもな・・・
そう思いながらゆっくりとハルの胸にキスをした。

ハルの手はまるで壊れモノを触るかのように、優しく体を滑った。
ちよつと緊張した顔をしていたが、目があう度に微笑んだ。

ハルの手つきが優しすぎて、いつの間にか小さく声が漏れた。

けど、いざハルが入ってくる時にまた不安がこみ上げ自然と体に力が入った。

「やっぱりやめようか？」

「ううん・・・大丈夫・・・」

(どっちが初めてなんだか・・・)

そう思いながら体の力を抜いた。

それを見て、ゆっくりと気にしながらしてくれたおかげで痛みはあまり無かった。

「大丈夫？痛くない？」

「うん。ハル・・・ありがとう」

「え？なにが」

「痛くないか気にしてくれて・・・」

「当たり前だろ・・・痛がる華を見てできないじゃん」

そんなハルの言葉が大事にしてくれているんだな・・・と感じ愛おしくて仕方無かった。

「大好き・・・」

ハルの耳元で小さく囁きギョツ・・・と抱きしめた。

「華・・・ちよゝ、ごめん・・・」

数回腰を動かしただけでハルは・・・終わってしまった。

(きつと笑ってはいけないんだろうなあ・・・)

すごく微妙な空気が流れチラツと目が合った。

「俺が大丈夫か？って感じだよなあ……」

二人でクスクスと笑いながら、そのままキスをして微妙は空気を消した。

「でも、約束通りに男にしてあげたじゃない」

「これじゃまだ男にはなりきってないな……その、もう一回していい？」

「ん……ハルが納得するまでいいよ」

「だって……華いきなり「大好き」とか言うから……
メーター振り切っちゃうじゃん！」

「次も言っちゃおうかな」

「次は大丈夫！もうコツは掴んだ！」

「コツを掴む時間なんかあった？」

「あのさ……もつと……こう……ムードある雰囲気じゃないの？
こんな時って。なんでこんなに明るい感じい？」

結局、ちょっと早めに終わり気まずい空気になりそうになったが、そこは若さでカバーをし、なんとか普通な感じでハルとの初めての夜は無事終了した。

「思ってたのとなんか違ったぁ・・・」

終わってからハルは大きく息を吐きながら上を向いてグツタリとした。

「どう違ったの？」

「人の話と自分でするのは違うんだな〜ってさ」

「良くなかった？」

「いーや！すっげえ〜よかった・・・」

ちよつと放心状態で言うハルが可笑しくて、顔を見て笑った。

「よかった。でも私もハルなら大丈夫だった・・・」

ありがと・・・あんまり良いイメージなかったけどもう安心した」
そう言っつて首まで布団を引っ張った。

「男にしてもらったし、今度は俺が責任もって華を完璧に女にしてあげるからさ。」

安心して・・・」そう言っつて髪にキスをして笑った。

（そうなればいいけどなぁ・・・）そう思いながらハルに寄り添い目を瞑った。

前日の寝不足と、やっと緊張から開放されたことで

その日はきつと11時には眠ったと思う・・・

知らないうちに二人ともグツスリと眠りについた・・・

次の時にはもう生きていないであろう、流星群も忘れて

ハルの胸に顔を寄せ、ピッタリと体を寄せ合いまたひとつハルとの
思い出が増えた・・・

）（これからはハルにとって素敵な思い出だけ残してあげたい・・・）

翌日、スッキリと目が覚めた。

まだ隣で眠るハルにバレないようにベットから起き上がり大きく伸びをした。背中がポキポキと鳴った。

その音に目が覚めたのか、こつちを見てニヤツと笑い

「部屋明るいから裸見えちゃうよ？」と言いながら胸に口をつけた。

「慣れる為にもう一回しちゃう？」そう言っつてニヤニヤした顔は山崎さんにも誠君にもそっくりな顔だった。

その顔に押されて、朝からまたハルに付き合い、回数を重ねるごとに痛みよりも違う感覚を感じた。

そして私の中に「ハルに抱かれない」という、いままで無かった気持ちが生まれていた。

ハルとなら、ずっとこうしていたい・・・

優しく微笑みながら私の上にいる

ハルが前の日よりも大人になった感じがした。

ホテルをチェックアウトして、のんびりと家に向って車を走り出し

た。
天気はよかったが、やはりもう11月の半ばになると寒さが強くなっていた。

「このまま行けば3時頃には家につけるね？」

ハルを見てそう言つと、ちょっとニヤけた顔をしていた。

「えっ？あ……うん。そうだね」

「今、違うこと考えてたでしょ！ニヤニヤして」

「え？いや……華つて結構胸が大きいんだなって……」

バイクで背中には感じてたけどさ……」

「ニヤニヤした顔、そつくりだね……山崎さんと誠君に……そんなことばかり考えてないで、人の話聞いてよ！」

「わかつたつて。ごめん！ごめん！で、なんだつて？」

すつかり前よりも逆上せ上がったような感じだったけれど、

ハルは終始ニコニコしていた。

（ま……仕方無いか……）そう思いながら車は予定通りの時間にハルの家に着いた。

なんとなくみんなにどんな顔をして会えばいいのか迷ったが、なにも言わずに帰るほうが怪しいと思い、家にあがった。

リビングでは山崎さんとお母さんがお茶を飲みながらTVを見ていた。

「おかえりー こつちでも結構見れたぞ！そつちじゃすごかつただろ？」

山崎さんの言葉にスツカリ忘れていた流星群のことを思い出した。

「星が降りってあんなこと言っんですね〜 本当に凄かったです。きつと一生忘れません。行かせてくれてありがとうございます。そう言っって山崎さんとお母さんに笑顔で報告をした。」

「ありがとな。オヤジ」そう言っってハルもニッコリと笑った。

「そうか〜 よかったな。で、昨日の夜も見れたのか？」

その言葉に二人で慌てながら「うん！うん！」と頷いた。どことなく笑いながら「よかったな」と言っって山崎さんは笑った。ちよつとバレたような気がして、ハルと二人で二階にあがっていった。

部屋に入っってからさっきの山崎さんの言い方に二人で

「あれっってさ・・・怪しんでるよね？」とコソコソと話をしていた。バタバタと二階にあがったこともあり、足音に気がついた誠君が部屋に入っってきた。

「よ！どうだった？見れたか？」

「ああ。すごかったぞ〜 兄貴も行けばよかったのに」

「なに？彼女いないのに嫌味かお前・・・俺だっっていたら堂々と外泊するチャンスだもの行っただに決まってるだろ？」

「たたく、、、星ももうちよつと俺のタイミング見て流れてほしいよな」

誠君が部屋に戻り、ハルとCDを聞きながら本を見ていた。

「あ。車に地図忘れたでしょ？私とってくるね」と部屋を出るとちょうど誠君と廊下でバッタリ会った。

「あれ、華さん帰るの？聞きたいところあったんだよね・英語」

「あ。そうなの？ちょっと車に物取りにいくだけ。戻ってきたら部屋に行くね」そう言っ下へ降りていった。

地図をとり、誠君の部屋に行き、「どこ？」と聞いた。

「えーとね。ここ・」そう言っ問題を解き説明をしていると、

「ねえ・ハルとき。やっぱヤツた？」と聞かれた。

「え、そんなことしないよ？」顔色ひとつ変えずに嘘を言った。

「まじで！こんなチャンスにアイツしなかったの？」

「だって朝まで星見てるんだもの？そんなチャンス無いよ」

「そうなんだあ・」 やっぱ俺とのほうが楽しめたね」

そう言っ誠君はあっさり嘘を信じた。

普通信じないだろ・」と思ったがきつとハルが真面目な分
そうであつてもおかしくないんだらうと思った。

「どう？マジで俺に変えない？」

「変えな〜い。だつてハルのこと大好きだも〜ん」

そう言っ笑っ部屋を出た。

二人とも顔は似てるのに性格は全然似てないんだなあ・
絶対ハルなら、あんなこと言えないのに・

そう思いながらハルの部屋に戻った。

その日は少し早めに家に戻った。

どことなく引け目のある外泊にちよつとだけイイ子になると自然にそんな行動になったような気がした。

帰ると言うと、ハルはいつもよりも寂しそうな顔をしたが、

「また明日会えるじゃない・・・」と言って後ろ髪を引かれながら帰った。

寝る前にハルにメールを送った。

<あの約束は絶対だよ？いつまでも一緒にね>

返信には

<うん。絶対な。初めてが華でよかった>

ハルの初めての人になれたことが何よりも嬉しかった。

クリスマスの水族館

12月に入り、寒さがグツと厳しくなった。

雪が降りどこに行くにも私の車だけになり、

「早く春にならないかな」

恨めしそうな顔をして窓から外の景色を見ていた。

「もうすぐ今年も終わりだね・・・なんだか早いね」

「そうだなあ・・・でも今年は何にとつてすげえ良い年だったなあ」

またニヤけながらにか考えていそうな顔で言った。

あの日以来、何度かハルに抱かれることがあった。

ラブホテル・・・という簡単な手もあったが、

なんだか自分の中でイメージが悪く行く気がしなかった。

どちらかの家ということになるのだけれど

いきなり誰かが入ってきそうな気がして私はあまり集中ができなかった。

こんな時、男の子のほう結構気にしないもんなんだと思った。

ハルの家だと、いつ山崎さんや誠君が部屋に来るか

その緊張感は只者ではなかった。

「人が来るから、やっぱりやめようよ・・・」

「来ないよ。大丈夫だつて」

そう言つて聞く耳をもたず平然と

服を脱いで、今誰かが入ってきたら絶対言い訳できないような感じだつた。

向えの部屋に誠君がいることもあり、とてもじゃないけど違つ意味で疲れた。

「華……全然よくない？」

そう聞かれてもよくない訳じゃないけれど、

違つことが気になりやっぱり集中できなかつた。

（私の家だと……妹がすぐに部屋に来るしなあ）

けれど、なんとなくあの日以来、山崎さんはハルの部屋に突然入つてくることは無く、

地味にバレているかも……と感じた。

クリスマスが近づき、山崎さんがその日の予定を教えてくれた。

「華ちゃんクリスマスつてハルといる？」

「うん……一応そのつもりですけど」

「俺達ちよつとイトコの家に泊まりで行くんだよね。誠もどこか泊まりに

行くつて言うし……ハル一人なんだけど、一緒に居てあげてくれる？」

「あ・・・はい。分かりました」

とてつもなく・・・笑顔で「じゃ、よろしく」という山崎さんと目を合わせる事ができなかった。

クリスマスの当日、ハルは冬休みになり、誠君は友達数人で勉強がてらにパーティーをしようと言い、出かけて行った。

仕事の帰りに真っ直ぐハルの家に行くと、ちょうど山崎さん達が出かける所だった。

「あ。華ちゃん、そこそこクリスマスっぽいものは用意したから、食べて行って。じゃ、適当な時間になったら

コイツ一人にしていいいから。じゃ、よろしくね」

そう言って7時前には家を出て行ってしまった。

「どこか行く？」

「華、何時までいられる？それによる」

「そつだなあ・・・毎年クリスマスにはまとも家に居たことないし、

朝までに帰ればいいかな」

「じゃ、ちょっと出かけようか」

ハルは鼻歌を歌いながら出かける用意をした。

外に出てもそれほど行く所など無いような気がしたが、

それでもハルがなにか考えているんだと思い、一緒に家を出た。

ハルの指示とおりに車を走らせると水族館に続く道だった。

（こんな時期に水族館？）そう思いながらもそのまま黙って車を走らせた。

駐車場に車を止めると、他にも思ったより多くの車が停まっていた。

「ここって夕方に閉館じゃないの？どうしてこんなに車あるんだろ？」

「クリスマスは特別に10時までなんだってさ。新聞に書いてあった。」

それにいろんなイベントがあるんだってさ。」

周りを見るとほとんどがカップルばかりで、昼間に来る水族館とは別世界のような感じだった。

あちこちにイルミネーションが光り、西洋風の水族館には派手にレーザー光線がピカピカしていた。

「じゃ、中見てこようか」

そうハルに言われ手を繋いで水族館に通じる吊り橋を渡った。

入り口の大きな水槽にも今夜ばかりは特別な照明が光りクリスマスっぽい感じだった。

どのカップルも楽しそうに寄り添い、魚よりも二人でいることが楽しそうに笑顔だった。

「しばらく来てなかったけど、やっぱり水族館っていいよな。」

俺、大好きなんだ。ここの海底トンネル初めて見たとき超感動した。

ジョーズの映画みたいで」

嬉しそうに歩くハルを見ながら綺麗な照明に照らされた水槽を見てまわった。

その水族館は北欧をイメージしていて、水槽ばかりでは無く絵画やガラス細工など、素敵な演出で展示していた。

一枚の絵画を見てハルが立ち止まり、

「将来さ。一緒に住むことになったらフェイクでいいから

これと同じ絵買おうな。この絵、大好きなんだ」

そう言っつてその絵を黙っつて見ていた。

海底に沈んだ古代都市のような所に沢山の魚が泳いでいるとても綺麗な絵だった。

「うん・・・ なんなら本物でもいいよ？ハルのお金でね」

そう言っつてその絵を二人で見っていた。

知らなかったハルのことを一つずつ知る度に嬉しい気持ちになった。

普段でも普通の水族館と違い館内はちよつと暗いのに今日は特別暗かった。

気合を入れた暖房がちよつと暑かったけれど、手を離すことなくその中を見てまわった。

ハルが言っつていた海底トンネルの所に来ると、大きな鮫がガラスの上をスイ〜と通っつて行つた。

歯が妙に生々しく、ちよつと不気味に・・・

割れるはずが無いガラスなのに、ハルの手を握る手に力が入った。

「なに、怖いのか？」

「これ割れないよね。ちょっと怖くない？」

あまりキョロキョロすると水死体でも見てしまいそうで、通路を見ながら歩いた。

誰もいないトンネルの中でハルはゆっくりと止まりながら見ていた。

ハルが止まる度に床を見ながら止まり、内心は

(早くここから抜け出したいんですけど……)

そう思いながら目を瞑っていた。

「華、ちょっとアレ見て」そう言われてほんの少しだけ目を開けチラツと見ると畳が泳いでいるかのような大きなエイがブワツと横を通り過ぎた。

「うわ！ やっぱりダメ……なんだか怖い……」

慌てて目を閉じハルの腕に捕まり黙っていた。

「ちょっと……この状態で怖いしか無いのか？ せつかく雰囲気だしてここに来たのに……」

そう言われて渋々目を開け、隣に立ちながらトンネルを見た。

大きな魚はちょっと怖いけれど、魚の大群は綺麗だった。

妙にピツタリとハルにくつつき、そのトンネルを見ていた。

「華……ここにさ、クリスマスには毎年来よう！ 来年も再来年も。」

結婚しても子供ができて、年寄りになっても……」

そう言われてニツコリと笑い、ちよつと怖いのに「うん」と返事をした。

ハルと一緒になら・・・それも悪くないかな・・・

その返事を聞き、お互いゆっくりと顔を近づけた。

さつきから暗い通りで何組もキスをしている人たちを見たのできつと今、誰かが後ろを通っても、それほど気にしなくていいや・・・

そう思いながらいつまでもハルとキスをしていた。

なんとなく足音が聞こえたような気がしたが、ハルは気にすることもなく、逆に腰に回した手を自分に引き寄せた。

「わ・・・早くいこ・・・」

「う、うん・・・」

隣を通った人の声がして、少し顔を下げたが

ハルはそのまま背中の手を回し自分のほうに引き寄せ唇が離れないように顔を近づけた。

「あれ？ハル？」

その声に二人でパツと顔を離すと誠君が友達数人といった。

「ずいぶん大胆なカップルがいると思つたら・・・ハルかよ・・・」

ちよつと驚いた顔をして誠君が笑い、一緒にいた友達もどう言つていいのかわからない顔をしていた。

男の子が3人と女の子が3人で

(グループ交際かなあ・・・) そう思つてちよつと笑つた。

その中の一人の女の子に見覚えがあつた。

お祭りの時にいた黒髪の子だ・・・

「あれ?なんでこのグループに佐野がいるの?」ハルがその子に話かけると、「あ・・・別に・・・」とちよつと困つた顔をした。

「じゃ、邪魔して悪かつたな」 今夜は帰らないから

どーぞごゆっくり」

そう言つて誠君はニヤニヤして通路を歩いていった。

友達もみな「じゃ・・・」と遠慮がちに手を振り歩いて行つた。

けれど、佐野さんという、その子だけは黙つてハルの顔を見ていた。

その目線できつとハルのことが好きなんだとピンときた。

ハルはまったく気がつかずみんなに手を振り「見られちゃつた」と笑つたが、私はその子の視線が気になり目で(まだ人がいるよ?)と訴えた。

その目線に気がつきハルが佐野さんを見て

「もう兄貴達行つたよ?じゃ、またね」とアツサリと言うと

その子はちよつと怒つた顔をして去つて行つた。

「ハル・・・あの子つて同じ高校とか?」

「あ・・・中学の3年の時の知り合い。1ヶ月だけ付き合つた子」

そう言つて、普通の顔をして水槽に目をやった。

「それって・・・どんな付き合い？」

「どんなって・・・別に「付き合つて」って言われて、なんて断つていいか

わかんなくて、いつの間にか付き合うことになつたけど、

俺、別に好きじゃなかったし・・・一応は映画とか帰りに一緒に帰ったりしたけど、なんだかつまなくて「別れよう」って・・・

「・

「わっ・・・最低だな・・・それ・・・」

「だつて初めてだもの、わからないじゃん」

そう言つてハルはそれほど気にしていない顔をして

「じゃ、次行こう！」と手をひいて歩いた。

(まだハルのこと好きなんだあ・・・あの子・・・)

そんなことを思いながら一緒に歩いていった。

学生の頃つて一緒に帰れるだけでドキドキして、

毎晩その人のこと考えるだけで胸が痛くなるのに・・・

きつと苦い思い出なんだろうなあ・・・

まだ好きな相手のキスシーンなんか見ちゃつたら

きつと今日は最悪なクリスマスになつただろうなあ・・・

そんなことを考えながら、目の前で澄ましているハルを見ていた。

外に出ると雪がチラついていた。

「寒いなあ・・・」

ハルの息が白くフワツと舞い、後ろを歩く私の手を掴み

腰に回して自分のダウンのポケットに入れた。

「歩きずらい・・・」

笑いながら二人でノロノロと吊り橋を渡りイルミネーションを見ていた。

その格好はちょうどバイクに乗る時のような格好で、

「この格好久しぶりだね」そんなことを言いながら橋から続く階段を危なかしい格好で笑いながら降りて行った。

ちょうど階段を降りると、さっきの6人組に会い

そんな二人を見て誠君が笑いながら手を振った。

また彼女の視線が気になった。

黙ってハルのことを見た後に、それとは違うちょっと鋭い視線で私を見る彼女にちょっとうろたえた。

子供相手に怯む自分が少し情けなくなつたが、どことなく優越感にも近いような気分にもなっていた。

(大人げないな・・・私・・・)

二人で誠君に手を振り、まだ時間が早いので周りにあるお土産屋を見てまわった。

店内に流れるクリスマスソングに気持ちがあわわくしながら二人であれこれと小物を見たり、ぬいぐるみを見ていた。

「じゃ、家に帰ろうか。せっかくなにか用意してくれたみたいだしさ」

「そうだね。プレゼントもあるから、家に着いたらね」

家に着いてからハルに初めてのクリスマスプレゼントを渡した。ハルがいつもつけている時計がちょっと古く安っぽいと思っただので、ダイバーズウォッチのちょっと高価な物をあげた。

「うわっ！いいの？これ高くない。かつこいー」と大騒ぎし、

ハルのプレゼントをあけると小さな指輪が2つ入っていた。

一つは普通の可愛いらしい、よくあるリングだったが、

もう一つはちょっと変わった黒とシルバーのストライプだった。

そのストライプのほうをジックリ見ていると、

「それね。中に象の毛が入ってるんだよ。幸せの象徴なんだって。俺的にはそっちのほうがいいと思ったけど、安くてさ。

だから急遽、まともな値段のもプラスしたの。どっち好き？」

「こっち・・・」そう言ってストライプのほうを見せた。

「やっぱりね。華はそっちって言うと思った」

そう言って左の薬指にそれをつけてくれた。

ちよっと大きく指につけてもクルクルと回った。

それをネックレスのチェーンに通し、もう一つのほうを指にした。

「来年はもっというヤツやるよ。楽しみにしてて」

そう言ってハルはニコニコと手に時計をした。

また一瞬だけ手首の傷が見えた・・・
胸に小さな痛みがズキンと走った。

家に誰もいないことで、その日はハルに抱かれることも
人の気配を感じる事無く、気分は嬉しかった。

もうすっかり慣れたハルは初めての時のことを感じさせる事無く
スムーズに体を触る手は相変わらず優しくかった。

人がいないから安心したのか、

ハルが入ってきた時に、いつもと違い体がジーンと痺れた。
動く度にどンドン変な気分になり、ハルの腕をキュツと掴んだ。

「ハル・・・」

「どうした？」

息をちよつとあげて、そう聞くハルになんて言えばいいか
わからず、そのまま小さく声が漏れた。

「わ・・・からないけど・・・変になっちゃう・・・」

「変になっちゃえばいいじゃん・・・」

そう言つてニッコリ笑うハルの顔を

見ながら呼吸がどんどん苦しくなつていった・・・
それを見てハルが強く動く度に声が漏れた・・・

ギユツと目を瞑つてハルの肩にしがみつき指先に力を入れた・・・

「華・・・いき・・・そう？」動く度に声を詰まらせ聞くハルに
小さく頷きクツ・・・と唇を噛んで体が宙に浮いたように感じた。

「ハア……」

大きく息を吐き力が抜け、
どうしてみんながセツクスを喜んでするのかわかったような気がした。

ハルも力が抜け顔の隣にポフツ・と頭を落とした。
お互いちよつと息があがったまま何も言わずに黙っていた。

「なんだか華じゃない人みたいに見えた……」

まだ息が整っていないハルの言葉を虚ろな顔をして聞いていた。
グツタリと体の力が抜け、体の神経すべてが敏感になったように
ピリピリとするような感覚だった。

「わかんないけど……すっげえ綺麗に見えた……」
そう言つてハルはポクとした顔をした。

きつと相手がハルだったから、こうなれたのかもしれない。
ハルといるようになって自分の気持ちの変化や体の変化が嬉しかった。

「ハルとやらなんでもできるような気がするなあ」

「え……。なんでもって?」

「いろいろんなこと」

小さくウインクすると、ハルは少しだけ顔を赤らめた。

大人に見えたり、子供に見えたり……

ハルを見ているだけで幸せな気持ちになれた。

写真だけの結婚式

少しずつ暖かい日が続き、大きな道路の雪が消え
またハルは早い時間になるとバイクに乗ってGSに顔を出すようにな
った。

誠君も無事に大学に受かり安心した日が続いた。
もう学校に行かなくていい誠君は、なにを思ったのか
ハルと同じ型のバイクを買い、ハルほどでは無いがたまに二人で洗
車をしていた。

「誠君もバイク好きだったんだ？知らなかった」

二人で並んで拭いている側に行き、その姿を見ていた。
後ろから見るとそっくりな二人にスタッフはみんな笑っていた。

「兄貴、オヤジに車買ってもらったんだぞ。ズルくね？」

かろうじてバイクは自分で買ったようだが、車の免許を取った
誠君は手ごろな車を買ってもらったようだった。

「ハルも来年買ってもらえばいいじゃない？」

ふくれているハルに言うと、

「いいよ。俺は来年、どーせ華と地方に行くし、車は華があるじゃ
ん。」

俺はバイク持っていくから。あ、兄貴は彼女いないから
どっちも無いと大変だもんね」

それを言いたいが為に話を出したようなことを言っていた。
ハルの言い方に力チンときた誠君と二人であーだこーだと口喧嘩を
していた。

「兄貴、寮に入るんだろ。いつ行くの？」

「あゝ3月の末くらいかな。でも車で1時間くらいだし、
すぐ帰ってこれるんだけどなあ・・・」

誠君も家を出ちゃうんだ・・・来年になったら山崎さんも寂しいだ
ろうなあ・・・

そんなことを考えながら二人の喧嘩を聞いていた。

「華さん、夏休みまでにチヨクチヨク帰ってくるから、

ハルに内緒でデートしようね。なんたって俺、大学生だから」

「そんなこと言って、サークルだなんだって女の子いっぱい作って
悪さするんじゃないのお？女癖悪いらしいし」

そう言ってハルと二人で笑った。

「お前、人のことなんて言ってるんだよ・・・」

舌うちをしながら誠君がハルを睨み文句を言っていた。

今年はハルも受験生ということもあり、バイトも4月の末で
辞めることになっていた。

私は専門学校だから、なんの問題も無く入れるが、

ハルは受験があるので、失敗すると一年空いてしまうので

そこそこ勉強しなきゃならない！ということ、そう決めたらしい。

「あ。そうだ、来週の日曜にバイト先に来てくれない？」

「どうして？」と聞くと薄ら笑いをしながら「内緒」と言い、
なにも言わずにバイクを磨いていた。

「なに？バイクング食べ放題とかあるの。俺もいい？」

暇なのか誠君もそう言いだし、

「兄貴は来るなよ・・・」とまた喧嘩が始まった。

結局「仕方ねーなあ・・・でも来るともつと俺のことが羨ましくなるぞ？」

と変に余裕な顔をするハルに返って誠君は興味を持ち、
その日は誠君と二人でハルのバイト先に行くことになった。

当日、誠君を迎えに行く

「じゃ、俺のバイクで行こうよ！」そう言って誠君が鍵を持って部屋から下りてきた。

「あ・・・いいよ。私の車でいい？」

「え〜 いいじゃん。俺で行こうよ〜」

「いいってばー！車にしょー」

「バイクにしょってー」

そのやり取りを見て、山崎さんが笑いながら外に來た。

「誠・・・華ちゃんはハルのバイクにしか乗らないんだってぞ。

この前ハルが自慢してただろ？諦めて車で行けって〜」
そう言って言い辛いことを言ってくれた。

ハルとそんな約束をした。

誠君には悪いな・・・と思ったけれど自分でもハル以外の人の後ろには乗りたくなかった。

「あゝあ。せつかくバイクに乗れると思ったのに・・・
じゃ、俺の車にしよう？ならいいでしょ？」

さすがにそこまでは断れないので誠君の車でハルのバイト先に行った。

妙に人が沢山いる・・・けどそれは結婚式では無く
若い女の子達がワイワイとしていた。

「お！あの子可愛い」そう言いながら誠君がキョロキョロしていた。

ハルを探して辺りを見渡すと、ちょっと奥のほうで
誠君と似たような顔をしながらデレ～としてハルが立っていた。

「そんな顔見に来てって言ったの？」横に行き並んでいるのに
しばらくハルは気がつかずに前を見ていた。

「わっ・・・いつから居た？なに、いつもの顔じゃん」
そう言いながら慌てて顔を引き締めた。

「で。何？このいっぱいのデレ～とする元は」
「だからしてないってばー」

近くに書いてある看板を見ると

<ウェディングドレス試着会>>と書いてあった。

「へえ・・・そんなのするんだ？」

「どうやら、試着会を餌に結婚式をする人を集めるイベントらしいから。」

中には真剣に式を決めようとしているカップルもいるが、

ほとんどはまだ結婚もしそうも無い若い子達がドレスを着てみたくて集まったような感じだった。

「で、これがなにか？」

「いや、着てみたいかなって・・・写真も撮ってくれらんだよ？」

（嬉しくないの？）と言う顔でハルが言った。

「え・・・いいよ。別に着なくても」

それほど興味が無かったので、そうは言ったがガツカリするハルの顔を
見て、ちよつと可哀相になった。

「せつかくだから着てみたら？タダだしさ」

誠君もそんなハルの顔を見て笑いながら言った。

「ん。じゃあそうする」と言うとハルは「いいのあるからさ！」と
言い

一押しというドレスの所に引張って行った。

若い時しか着れないなあ・・・というようなミニスカートだった。

誠君も暇だったのか、女の子を見ていたのか、あちこちと見て回り
「俺はこれがいいと思うな」とまた二人で口喧嘩を始めた。

式場の係の人に

「俺の彼女。着てみてもいい？」とハルがちよつと年配の女の人に

言うつと、その人は笑いながら「仕方無いわね〜」と言って
フィッティングルームに案内してくれた。

軽く髪もセットしてくれて、アクセサリーまで本格的につけて
化粧までされた。

なんだか大げさな感じになったが、一応は完成した。

「わ・・・なんだか派手〜　こんなんだっけな？」
自分の見たことが無い格好にちよつと戸惑った。

係の人は出来上がった私を見て、

「ん〜　やっぱり若いうちは何着ても可愛いわね」
そう言うてくれたので、ちよつとテンションがあがった。

「ハル君〜。彼女できたわよ〜」

呼ばれてハルと誠君が撮影所に入ってきた。

「わ・・・　凄いいじゃん！本物みたい！」と言うハルと
「孫にも衣装・・・」と言う誠君の対照的な意見だった。

「じゃあ、写真撮るからそっちに行つてね」
係の人に言われたところに歩いて言った。
やっぱりハイヒールは苦手だった・・・

その格好を見て、「またバンソウコウいる？」とハルが笑いながら
横を歩いてきた。

「これって一人で撮らないとダメなのかな？」

「え、一人って・・・どの子と撮りたいの？」

「馬鹿じゃないの・・・どーせならハルと撮りたいに決まってるじゃない！」

「えっ・・・だって俺、制服だよ？」

ハルの制服はウェイターということもあり、白のシャツに黒の蝶ネクタイ

だから、そんなに可笑しい格好でも無かった。

「いいじゃない？それで」強引に手を引っ張りカメラマンの人に

「一緒に撮っていいですか？」と聞くと

さつきから側にハルがいてスタッフと知っていたのか

「ああ。いいよ」と軽く返事してくれた。

緊張するハルに誠君が目の前で変な顔をして笑わせようとしたが、全然笑わず、カメラマンの人も「もつとどうにかならない？」と笑うほどだった。

「あの夜より緊張してるね？」小声で言うと、

「そんなことねーよ」と言いながらも額に汗をかいていた。

「じゃあ、俺と一緒に撮るわ。ハルどけ！」と誠君が笑いながら隣に来ると「いや、大丈夫！」と言って少しだけ柔らかい表情になった。

やっとのことで一枚撮ってもらい、

「もう一枚撮る？なんならキスシーンとか」そう冷やかすカメラマンに

「いいです！いいです！」とハルは慌てていた。

周りのドレスを着た子達もそんなハルを見て笑っていた。

「じゃ、もう一枚お願いします！」そう言ってハルの頬にキスをした。

タイミングよくその瞬間をカメラに収めてくれ、

「はい。ばっちり撮れたよ！」とカメラマンが笑顔でOKを出した。

緊張しすぎてへ口へ口したハルを見て、誠君は大爆笑していた。

「うるせーな。あの場に立ってみるよ！」そう怒りながら慌ててハルは自分の持ち場に戻って行った。

その後、普通の服に着替え誠君の側に行った。

「あと何年かしたら、本当にあの姿が見れるのかなあ〜」

「どうだろ？ハルが嫌って言わなきゃね」

撮影も終わり、忙しそうにしているハルに「家で待っている」と伝え誠君と二人で会場を後にした。

そのままハルの家で帰りを待とうとしたが、誠君がせっかくだからどこかにドライブに行こうというので、少しだけ付き合うことにした。

「どこがいい？行きたい所ある」

そう聞かれたが、この周辺はほとんどハルと行ったことがある所ば

かりで
今ひとつ思いつかなかった。

「じゃ〜 一番最初にハルとデートしたのってどこ？」
そう聞かれて夜景が見えるその場所を教えた。

「へ〜 アイツこんな所知ってたんだ？ 今度彼女できたら
ここに連れてきて俺が見つけたことにしよう〜」
そう言つて誠君はハルに内緒ね！と笑っていた。

なにげなく見た大きな木に二人で書いた落書きを見つ
け「なにこれ？」と笑っていた。

「ん？この落書き消えてしまわないように、毎年一度はここ
に来て、残しておこうねってハルが書いたの」
そう答えながら、まだ彫ったばかりの白い落書きを触った。

「華さんって変わってるよね。ハルのどこがそんなにいいの？
普通のガキじゃん。わっかんね〜」

「ハルのさ・・・手首見たんだ・・・」

そう言つと誠君が黙つて顔を見た。

「ハルが生きていてくれて本当に良かったと思つた・・・
もう絶対悲しい思いはさせたくないって・・・
自分にできることなら、なんでもしてあげたいなって思つてる。
たぶん私のほうがハルのこと好きだと思つよ？」

そう言つて誠君の顔を見て笑つた。

「華さんに会ってハルすごく変わったと思うよ。前はあんまり家でも話とかしなかったしね。オヤジもお袋も本当に喜んでる。ちよつと俺は悔しいけどね」

「誠君だってモテるでしょ？その性格じゃ大学ですぐにいっぱい彼女できちやうと思うよ」

そう言いながら二人で一番高い所に歩いて行った。

「オヤジも俺に先に紹介してくれたらよかったのに・・・でもまあ・・・あんなに幸せそうなキスシーンまで見せられたら仕方無いか？水族館で舌入れてたでしょ」

「ばつかじゃないの？そんなことする訳ないでしょ！」
そう言っつて誠君の背中を叩いた。

「ハルのことよろしくね。きっと華さんと離れたら灰になると思うから。」

今度は逆の手切っちゃうよ・・・」
そう誠君は笑ったが、その言葉にドキツとして顔を見た。

「あ・・・嘘。ごめん、ちよつと不謹慎だった。ごめん・・・」

「ううん。大丈夫。そんなことさせないから。それに、ハルがいなくなったら」

私も一緒に死ぬって言ったもん。それでも切るなら一緒に切っちゃうもん」

「俺がいなくなった後、オヤジやお袋もよろしくね。」

たまに帰ってくるけど、寂しいだろうから一緒に居てあげてね」

長男らしいこと言うな・・・そう思いながら誠君を見ていた。
髪型をもっと短くすれば本当にハルにそっくりなその顔を見ながら
（こんなに似てるのに、どうしてハルじゃなきゃダメなんだろう？）
そんなことを考えながら、車に乗った。

「安心して行ってね。みんなのことちゃんと見てるから。

たまにはちゃんと顔見せてあげなきゃダメよ？

ハルだつてきつと寂しいだろうから・・・」

「俺さ・・・ハルが学校で嫌なめにあってるなんて全然知らなくて
さ、

なんたるなあ・・・転校生つてだけで目立つじゃん。
アイツつて俺と違ってあんまりヘラヘラしないしさ。

人見知りすんだよな。だから格好つけてるとか思われたんだろな。
何度が殴られたような傷とかあつても、転んだとか、プロレスだとか
嘘言つていてさ。プロレスとか全然興味無いのに・・・

あの日・・・ハルのやつ朝、具合悪いとか言つてさ、
オヤジも仕事で、その当時お袋も仕事しててさ、

俺が学校サボつて彼女を家に連れ込んで、

そしたら風呂場でさ・・・本当にハルが死んじゃうかと思つて
俺、どうしていいかわからなくて。あーゆー時つて女のほうが

しっかりしてるな。俺、その子の指示で119とか手首にタオル
巻いたりさ・・・その子、今年から看護学校行つたわ。

やっぱ素質あつたんだなあ〜　すぐ別れちゃったけどね」

そう言つてこつちを向いたが、私は外を見るフリをして涙を隠して
いた。

止まらない涙が誠君にバレて慌てて誠君は
「ごめん。泣かすつもりじゃないかったんだ。ごめんって！」と何
度も謝った。

「誠君の女癖の悪さに感謝しないとダメだね・・・」
そう言つて涙を拭いた。

「ちょっと、そんな言い方しないでよ。そんなに女癖悪くない俺・
・・・
つたくハルの野郎・・・」文句を言う誠君を見て少し笑った。

「ハルはもう嫌なこといっぱい経験したから、これからはきつと
楽しいことしかないよ。私の分まであげる。ハルになにかする人は
私が殴っちゃう！ボクシングでも習おうかな？」

「習わなくても大丈夫だよ。怒ったら華さん怖そうなもの」
そう言つてエンジンをかけ車をバツクした。

（もう！）と背中を叩くと「ほらね？すっげえ痛いもの」と
大げさに痛がり笑った。

「もうこんな時間だね。ハル帰つてきちゃうね」

「あ、本当だ。じゃあハルにはホテル行つてきたつて言うわ」

「女癖悪いから本当に信じちゃうかもよ」

二人でクスクス笑いながら家に戻った。

玄関の前にハルのバイクがあり、家の中に入るとハルが慌てて走っ
てきた。

「華！大丈夫だった！」

「なにが？」ハルの慌てた顔を見て驚いて聞いた。

「兄貴になにかされなかつた？」誠君をチラッと見ながら言うハルに可笑しくて二人で笑った。

「お前な・・・帰っていきなりそれかよ・・・俺どれだけ信用無いのよ？」

弟の彼女に手出すほど落ちぶれてないから・・・」

呆れた顔をして誠君が答えた。

「だって携帯かけても出ないし、華の携帯も出ないしさー」

車に鍵をかけたから安心してバックを置いていったので電話に気がつかなかつた。

誠君は部屋に携帯を忘れていってたらしく、ハルは下から二階に電話をかけていたようだった。

「大丈夫。ハルのこと大好きって言ったの」
そう言つて「ね？」と誠君に言った。

「そうそう。全然俺には興味無いんだってさ」
そう言つてリビングに入って行った。

そのままハルと部屋に入り、二人でいた時にした話を教えてあげた。

「誠君がいなくなったら山崎さんとお母さんのことよろしくねってハルがすっかりしなきゃダメだよ？」

「そっか・・・で、どこ行ってきたの？兄貴と」

「ん？別にその辺ちょっとドライブしただけ。やっぱりハルのバイクのほうが楽しいかなあ・・・」

夜景の場所を教えるというとハルは「ええー」と言うと思って内緒にしておいた。

「じゃあ来週の休みは久しぶりにバイクでどこか行こうか？
ちよつと遠出してみよ」

「うん！」

そして二人で来週の計画を立てながら地図を見た。
横で笑うハルの顔を見ながら、一緒にいれてよかったと
今日の話聞いてまた強く思った・・・

嫌な予感の前兆

誠君が寮に入る前日の土曜日。

「今日さ、兄貴が明日いなくなるから、みんなで食事しようってことになったんだけどさ、来れるよね？」
バイクを洗いに来てハルがそう聞いた。

「明日なんだ・・・うん。行く」そう答えて、仕事を続けた。

「後さ、この前の写真できたよ。すっげえ俺、変な顔」
自分でそう言いながらゲラゲラ笑っていた。

「そうなんだ？じゃあ後から見せてね」
すっかり忘れていたドレスの写真を楽しみにした。

6時頃にハルの家に行き、誠君にブランド物のシャツをプレゼントした。

「うっわ。これ高いんじゃないのー　いいの？」

「そんなに高くないよ。大学行ってお洒落しないと彼女できないよ？」
そう言っって喜ぶ誠君を見ていた。

「あ！ケーキ頼んだんだよ　取りに行くの忘れてた」
山崎さんの声に「じゃあ、私行ってきます」と席を立つと、
「あ。いいよ。俺行くから」とハルが席を立った。

「じゃあ、一緒に行こうか？」そう言って行こうとすると、
「寒いからいいって。俺がパツとバイクで行くから。華は家にいな
よ。」

あ、これ言ってた写真ね」と袋に入った写真を渡してくれた。

写真を見たい気持ちのほうが先に立ち、ケーキ屋はすぐ近くだし
バイクで二人乗りで持つてくるより、ハル一人のほうが早いと思い、
「じゃあ、寒いから気をつけてね」と見送った。

まだハルしか見ていない写真を袋から出すと
さすがプロが撮っただけある、写りのいい写真だった。
ちよつと化粧が濃いと感じたが、山崎さんもお母さんも大絶賛だっ
た。

「ハルの顔見れよ。すっげえ笑える」

隣で一緒に見ていた誠くんが笑いながら指差した。

下にもう一枚重なっている写真を見ると、サービスで撮ってくれた
キスをしている写真だった。

その写真のハルは片目を瞑って、ちよつと私のほうを見て
微笑んでいるとてもいい顔で写っていた。

「うわ〜 この写真いいわね〜 来年の年賀状にしようかしら？」
お母さんが嬉しそうに写真を手にとり見ていた。

「いや、それはちよつと・・・」と言うと山崎さんも

「いや、これはいいわ。ハルもこんな顔するんだなあ・・・」

笑いながらその写真を見てお母さんと本格的に年賀状にする話をしていた。

(そんなの送っても送られた人に私が誰よ? って思われる・・・)

そんなことを思いながら、その写真を見ていた。

「これ焼きまわしできるよね? 俺にも送ってよ」
笑いながら誠君まで言っていた。

「なんの為に?」

「いやぁ・・・うちの弟夫婦って言うよ」

自分で言うのもなんだけれど、本当にその写真は良い写真だった。私はそれほどハッキリと顔は写っていないけれど、十分微笑んで写っているのがわかった。

なにかの雑誌の切り抜きと言ってでもいいくらいのデキだった。みんなで「これ引き伸ばして玄関に!」とか「リビングに!」など大げさに話をして、その写真を絶賛した。

しばらくみんなで話をしていたが、

「ハル・・・遅いですね? どうしたんだろ?」と、いくら待っても戻ってこないハルのことが気になり携帯に電話を試してみた。

しばらく呼び出し音が鳴り、知らない声の人が電話に出た。

「あれ? 山崎春彦さんの携帯じゃないですか?」

ちよっと年配の人の声が聞こえた。

「あ、あの今、救急車の中で……」
「えっ……」

「あのですね。山崎春彦さんが事故にあわれて今、搬送の最中でその言葉に足の力が抜けてその場に崩れた。」

「華さん！どうしたの！」慌てて誠君が電話を代わり話をした。

「はい。はい。弟は大丈夫なんですね？はい。わかりました。
じゃあ今から行きます。はい。はい。ありがとうございます」

＜大丈夫＞そう聞いて誠君の顔を急いで見た。

「生きてるつてば！転倒して足やっただみたい……
後ろで「いてえ〜」って元気な声聞こえたから。」

市立病院だつてさ。ちよつと行ってくるわ」慌てて誠君が上着を着た。

「じゃ、たいしたこと無いみたいだから華さんで行くわ。」

着いたら電話するから」そう山崎さんに言うと
お酒を飲んでいた顔を青くして「本当か？」と聞いていた。

お母さんも真つ青な顔をしていたが、足だけだと聞いて
「誠、じゃあすぐ電話ちょうだい」と言い、へなへなと座った。

「大丈夫だつてば。死にそうな奴はあんな声ださねーよ。
後ろでギヤーギヤー騒いで車の人に

「骨折はしてませんから！」って怒られてる声したから
そう笑いながら「華さんいこー！」と言った。

座り込んでいた私にその声をかけたが、もう涙がボロボロとこぼれていた。

「ハル・・・ほん・・・とうに・・・う・・・だいじょう・・・ぶ・・・なの？」

「大丈夫だってばー 早くいこ！あんなに騒いでいたら迷惑だし 早く行かないと追い出されるよ？」

そう言つて座り込んだ私を立たせて肩を抱きながら歩いた。

立ち上がりはしたが、声をあげてワンワン泣く私に山崎さんが「俺が行くわ」と言い、それを聞いて、

「私が・・・行きます・・・うっ・・・ぐっ・・・」とまだ泣きながら答えた。

車に乗ってから祈るような気持ちで手を堅く組み、心臓が痛くなるほど鼓動が早く、まだ涙が出ていた。

「華さん・・・大丈夫だってば。俺が保障するからー」

少し笑いながら言う誠君に、「うん・・・」と頷き黙っていた。

病院につき走つて中に入ると、救急診察室にハルの声が聞こえた。

「まじで折れてない？すつげえ痛いんだけどー」

その声のするほうに行くと、包帯で足をグルグル巻きにしたハルがいた。

その瞬間、安心して涙がこぼれその場に座り込んだ。

「あ。華・・・って、、なに？大丈夫だってば。

泣くなつて。酔っ払いの兄ちゃんが友達と遊び半分で道路に押しあつて悪ふざけしててさー。

酔ってるから本当に飛び出してきて、それ避けたら転んじゃつても草の所だったからバイクは大丈夫みたい。もし傷ついてたら全額保障してくれるってさ」

自分の怪我よりもバイクが大丈夫ということを優先して説明していた。

あまりに泣くので、看護師さんが隣に来て

「かすり傷程度ですから。今日もう帰れますから。大丈夫ですよ？」と、声をかけテッシュをくれた。

「ダメじゃない！彼女泣かせたら」とハルに言いハルは「は〜い」とニコニコ笑っていた。

ハルの側に行つてもまだ涙が止まらず、

「ごめんつて。なんでも無いから。な？」と頭を触った。

そのままハルに肩を貸しながら待合室に行くとちよつと顔の赤い若い人がいた。

「いや〜、本当にすいませんでした。ちよつとふざけて・・・」

少しヘラヘラしたように、平謝りをしながらこっちを見てその人が歩いてきた。

その声を聞いてその人の前に立ち、その笑っている顔を思い切り叩いた。

「なにがちよつとふざけてなのよ！なにかあつたらどうするの！

ハルが・・ハルが死んだらどうするの！」

泣きながら、その人に喰ってかかり、顔を叩いた後も何度も、その人の肩や胸を叩いた。

ポロポロと涙をこぼし最初ほどは力が入っていなかったが、悪ふざけをして、ハルをこんな目にあわせ笑っていたその人が許せなかった。

「ちょ、華さん！なんにもそこまで・・」

慌てて誠君が間に入り、私を止めハルのほうに連れて行った。

「いや、華！本当にたいしたこと無いんだってば！」

ハルも慌てて私の体を押さえた。

叩かれた人は真面目な顔をして

「本当に申し訳ありませんでした」と深々と頭を下げた。

また自分の言ったくハルが死ぬと言言葉に涙が溢れ泣いていた。

その後、その人と誠君がなにやら話しをし、私とハルは車の中で誠君を待っていた。

ハルが気まずそうに「ごめんな？本当に大丈夫だから？」と声をかけてきた。

まだ鼻をグスグスさせながら、「うん・・・」と頷いたが、まだ体が冷たくなっているような感じがした。

誠君が話し終わり、「明日、オヤジに行ってもらえばいいから」と

ハルに話ながら家に向った。

家に着き、誠君がハルに肩を貸しながらリビングに入り、事故の事情を説明していた。

山崎さんは「いやぁ・・・ビックリした・・・」と言って大きく息を吐き、

お母さんもハルに「痛い？」と聞いていた。

ハルと誠君は顔を見合わせながら、こつちを向き

「でも一番痛かったのあの人もな？」と二人で笑い出した。

目を真つ赤にしてハルの隣に座って、また泣きそうになりながらハルの足を見ていた。

「オヤジ・・・華、相手の人を引つ叩いたんだぞ？」とニヤリとしてハルが山崎さんに話、誠君が「そうそう。すげえ怒ってた」と笑っていた。

「あの華ちゃん見たら、ハルが死んでもおかしく無いと思ったくらい
らい

「ここでも大泣きしてたんだぞ？」

山崎さんも一緒になって3人でこつちを見ながら笑いを堪えた顔をした。

まったくハルが死ぬ>と言う言葉に涙が溢れてポロポロと涙がこぼれた。

「てゆうか、あの人は友達で、飛び出した人はまだ警察なのかなあ
」

ハルの言葉に驚いて顔を見た。

「だって言う前に殴りかかるから…… まあ、あの人も同罪だ
けどね」

誠君が苦笑いをしながら、

「こりゃハルがもし死んだら、華さんも死ぬな……」
そう言っただけだ。

「じゃ、ケーキ無いけどまあいいか」

そう言いながら山崎さんが一安心してビールを注いだ。

ハルがさっきの写真をテーブルの上から取り、キスをした写真を見て

「これ、すつげえ良くない？」と私に見せた。

「ん……」と小さく頷いて写真を受け取った。

「ごめんな。心配かけて」そう言われてまた目に涙が溢れた。

「こんなにかすり傷で泣いてくれる人いないぞ？」

山崎さんが笑いながらこつちを見た。

「さ、華ちゃんもこつち来て座りな」と言われテーブルについたが、
あまりにもテンションが下がりすぎて、もう何を見ても泣きそうだ
った。

「華さんて……やっぱり怒らせると怖いね。当たってた……」
「ん。こんなに泣く人だと思わなかった……」

ハルと誠君の言葉に山崎さんとお母さんが「プツ」と吹き出しながらこつちを見た。

「はぁ・・・」と息を吐き、「もう疲れた・・・」と一言呟きちよつとだけ

安心してみんなの顔を見て照れ笑いをした。

目がいつまでも熱く、鼻がグズグズして

いままで生きてきてこんなに泣いたことは無かった。

せつかく誠君が最後だと言うのに、散々な一日だった。

ハルを部屋まで誠君と連れていき、

「ごめんね。明日行くなって日に・・・」と言うと、

「いや？仕方無いよ。まあ、ゆっくり寝ろよ。ハル」

そう言うて誠君は部屋に戻って行った。

「足・・・痛い？」

「いや。もう大丈夫。それより華に泣かれるほうが痛い」
少しだけ困った顔をして笑い私の頭を触った。

「ありがと・・・これくらいの傷であんなに泣いてくれて」
申し訳ない顔をして言った。

ハルのせいじゃないと分かっているけど、もしもと思うとまた泣きそうになった。

「もうダメなのかと思った・・・ハルがいなくなるって思ったたら・・・

耐えられない……」

ベツトに座ったハルに抱きついて泣き出した。

「もう心配かけないから。そんなに泣かないで。

絶対、華を一人にしたりしないから。な？ありがと……」

どこか涙を出すスイッチが壊れたように、その日は泣きっぱなしだった。

本当はもうバイクに乗ってほしくなかった。

けど、バイクが大好きなのも知っている。

それをダメと言うにはハルが可哀相だとも知っている。

それ以来、ハルがGSに来るまでの短い距離でも心配で仕方無かった。

今回のようにハルのせいじゃなく、他人のせいで事故に繋がる。

それを痛いほど知り、ハルがバイクで家に帰る間も気が気じゃ無かった。

前みたいにハルに迎えに来てもらうことすら、心配で仕方無かった。けれど、どうせ事故に合うなら一緒に良かった。

二人で乗っている時はそれほど気にならず、

ハルが一人の時は「着いたよ」と連絡が来るまでずーと手を堅く組み祈っていた。

もしもあの流れ星の時に戻れるならば、

(バイクに乗っている時、ハルが事故にあいませんように)と祈るのに…… そんなことを何回も考えた。

それほど今回の軽い事故は私の中に大きな傷跡になった。

そしてハルの中には、

（自分が死んだらこれほど泣いてくれる人がいた・・・）と大きくインプットされたとちよつと嬉しそうに笑った。

それでも心の底でハルが自分の前から消えてしまふ不安はどンドン大きくなった。

それを思うだけで心配で胸が痛くなった・・・

それほど深刻に考えることでも無いのかもしれないが、あれ以来、ハルが一人でバイクに乗る時には

見るからに心配そうな顔になり、そんな私の顔を見てハルはいつも同じ台詞を言った。

「大丈夫だって。そんなこと言ったら世界中にどれだけの人がバイクに乗ってると思う？車の事故のほつが多いだろ？」

もう泣かせることしないから」

二人を繋げてくれたバイクなのに、それを見るとどうしても不安でいっぱいになった・・・

転職

4月も末になると道端に少しだけあった黒い雪も完全に解け暖かい日が続いた。

少し遅い桜が満開になった頃。

ハルは18歳になった・・・

ある土曜日。

洗車をするハルを見ながらボンヤリしているとカウンターの下からヒョッコリと

誠君が顔を出して「わっ！」と驚かせた。

「うっわ！ビックリした！・・・あれ？今日はどうしたの」

一ヶ月ぶりくらいに見る誠君は特に変わった所は無く

「華さんに会いにきたの。元気だった？」と調子のいいことを言うて笑った。

「まだ彼女できてないな？暇で帰ってきたんでしょ」

「まーね。あのさ、ちょっと相談あるんだけどさ・・・

今日終わったらうちに来れるかな？」

「あ・・・うん。いいよ。じゃあ一度帰ってから行くね。

誠君の顔見たら山崎さんもお母さんも喜ぶね」

誠君はバイクを拭くハルの後ろにソッと近づき、また同じように

「わっ！」と驚かせ慌てるハルを見てゲラゲラ笑っていた。
「なんだよ！」と怒りながらもハルはすぐ笑顔になり
誠君と楽しく話しをしながらバイクを磨いていた。

その日、仕事が終わりに簡単に用意をしてハルの家に行った。
もう最近じゃ玄関に入ると、「邪魔しまーす」と言い
そのままリビングに顔を出すような慣れた感じになっていた。

山崎さんもすっかり娘のように迎えてくれて、
ハルが部屋にいてもお母さんと3人でリビングで話をしていたりと
そんな感じの付き合いになっていた。

リビングで誠君が「あ。待ってたんだ」と言い、誠君の話聞いた。

「あのさ、俺の知り合いの親がやっている英会話の教室があつてさ、
そこで補助の人探してるんだつて。で、いい人いない？つて

聞かれたんだけどさ。華さんダメかな？条件すごくいいんだよ。
今の所よりも楽だと思っただよねえ……」

条件は本当によかった。

月、水、金の3日間は朝10時から出勤で、2時まで。

その後ちよつと休み時間があり夜7時から9時半までの6時間半。
火、木は9時から3時までの6時間。土日は休みだと言っていた。
それで給料は今よりも断然よかった。

「今の仕事より楽でしょ？土日休みならもつとゆつくりできるしさ。
ハルももうバイト終わりだし、これから勉強に付き合っただけでやれる
し、

どうかなつてさ」

「そつかあ……でも難しいんじゃない？」

人になにかを教えるということをし、いままでしたことが無かったの
でさすがに不安だった。

「補助だから、先生は別にいるんだよ。それに日常会話だし
その辺は華さんペラペラなんでしょ。」

なら全然問題無いよ。一度話聞いてみない？」

確かに小学校の頃から何度も母がお世話になった

海外の友達の家と一緒にいき、夏休みや冬休みを過ごしたりと会話
には全然困らなかつた。

母は「英語はこれからは大事だから」と小学生の低学年の時点で
私はほぼ日常会話には困らない程度になっていた。

その話を聞いて山崎さんは

「まあ……華ちゃんがいなくなるのは寂しいけど、今後のことを
考えるなら少しでもお金があつたほうがいいし、
後1年ならそれも悪くないかもね……」とこの話に賛成した。

そこにハルが来て、

「もう……なんで真つ直ぐリビングなのさ。来たの知らなかつた
じゃん」

と隣に座り、「で？なんの話」と話に入ってきた。

誠君から内容を聞き、

「ええ〜華いないの？それはそれでつまんねーなあ……
けど、土日休みのちよつといいかなあ……」

ハルもその話にそれほど悪い印象では無かった。

「じゃ、話は早いほうがいいよ。今からそこ行ってみない？
教室は休みだけど、先生って人はそこに住んでいるんだ。
ちようど友達も帰ってきてるし、どう？」

「でも、、いきなりバイト辞めるって言うのもなあ・・・」

それほどバイトのことを重要には考えていなかったが、
やはりちよつと自信が無いものあった。

けど、ハルもその話に「俺もいくー」と言いだし話くらいなら
聞いてみてもいいかと、3人でそこに行くことにした。

「よ！言ってた人、連れてきたぞ」

そう言って誠君の友達に紹介され挨拶をした。

「こんばんは。新藤と申します」頭を下げ挨拶をして
3人でリビングに通された。先生という彼の親に会いきなり
英語で話し掛けられ、ちよつと驚きながら会話をした。

いまの仕事のこと、休日はなにをしているの？など
簡単に聞かれ、それなりに返した。

（どつちが彼氏？）とその先生であるお母さんに聞かれ、
ハルを見て（彼がそうです）と答えた。

ハルは自分のことを言われたことに、なんとなく気がつき

ニコニコと挨拶をしていた。

「問題無いわね。あっちに住んでいたの？」

「いいえ。何度か夏休みとかに長期で行ったりしましたが、元々母が住んでいたんで・・・」

「うちは一般の人がメインだから、それほど難しいことは無いと思うし、進藤さんさえよければお願いしたいのだけど」

驚くほどアツサリとOKされた・・・

先生である加藤さんと二人で日本語で話したり英語で話したりしていたので、ハルと誠くと加藤さんの息子は終始二人の間をキョロキョロと見ている間に話は終わった。

「じゃあ・・・今のバイトもすぐに辞める訳にはいかないのので、月、水、金の夜の部だけ先に来てもいいですか？

それでできそうなら本格的に・・・っていうのはダメですか？」

「あ。それがいいわね。こっちもそのほうが安心だし」

あっさりと話が決まり、次の月曜から顔を出してみることになった。あまりにも簡単に話しが決まり、帰りの車の中では

「やっぱり取柄があると違うな」とハルと誠君は二人でブツブツと話をしていた。

家に戻り山崎さんがその話を聞き、

「じゃあ6月くらいからは、華ちゃんGSにいらなくなるかもなあ・・・

・と

ほんの少し寂しそうな顔をした。

「でもその分ハルの勉強に付き合うからいいじゃないですか！
まだできるかどうか分らないし。ナマリがあるからダメって
言われるかもしれませんが？」とみんなで笑っていた。

少しでもハルと一緒にいられる時間が増えるのは嬉しかった。
そして次の週から週に3回、英会話の教室に顔を出し
2週間を過ぎた頃に「正式にお願いしたい」と言われ、GSの所長
に退職願いを出した。

どちらにしる来年の3月初めまでには辞めると伝えていたので、
ちよつと残念そうな顔をされたが、
「でも華ちゃんの都合もあるものね？」と納得してくれた。

6月の15日までGSで働き、翌週から英会話教室に本格的に
お世話になることで話は決まった。

そう決まるとハルはGSでバイクを洗いながら

「ここに華がいなかったら、こうして付き合うことも無かったし
華がオヤジに会うことも無かったんだな」と

やっぱり今後、洗車に来て私居ないことを寂しがった。

「けど、そうなれば誠君は仕事紹介してくれることも無かったし、
結局ここに居たんじゃない？」と堂堂巡りな話をして笑った。

5月も半ばになる頃、ハルの修学旅行の話で家は持ちきりになって
いた。

飛行機で沖縄に行くか、韓国に行くかを選択できると聞いて

自分とは違う海外というコースに「いいな」と羨ましくなった。

「華はどこ行つたの？」

「私の時は沖縄だった……選択無かったもの」

「沖縄もいいよな」でも海外も行きたいし……

でも海外ならもう決めないとダメなんだよな

パスポートの関係でもう締め切り近いんだよな。どっちがいいかな」

そう聞かれたが、どっちもよくて二人で迷っていた。

「海外は今度二人で行こうか。英語がペラペラの人が一緒のほうが

俺も緊張しないしさ。どう？来年の俺の卒業の時に

どこか行かない？今からオヤジに頼んでさ！」

「今、グアムとかなら安いし、いいかも？ハルの大学受験が合格

したらいい？って聞けばきつとOKくれるよ。そうしようか」

すっかり自分達の旅行の話で盛り上がり修学旅行の話はすぐに消えてしまった。

気分が盛り上がったまま、みんなで夕食を食べている時、

ハルが山崎さんにその話をすると、

「そうだなあ……まあ合格してからだな」と

もうその顔は「いいよ」と言わんばかりの顔で笑っていた。

「じゃあ絶対合格してもらわなきゃ！」そう言ってハルに発破をかけハルもヤル気になっていた。

すべてが上手くいっていた・・・
毎日が楽しくいつも笑顔だけで時間が過ぎていき
私の毎日はハルで始まり、ハルで終わった。

GSを辞める日に、ハルは修学旅行に行き、どこことなく
物足りない週末を過ごしていた。

それでもスタツフはみんな

「けどハル君と来るんでしょ？またね」と結構アツサリしたものだ
った。

(まあね・・・ハルは最近、毎日来てるしなあ・・・)

そう思うとあまり悲しい気持ちでは無かった。

最後にGSでTVを見ていた山崎さんに、

「じゃ、今日で終わりなんで。今後はまた家で会いましょうね」
と言って座っている山崎さんの隣に座った。

「ああ・・・そうだね。でも来年にはハルも華ちゃんも居なくなるの
かあ・・・」

一気にポケチャいそうだなあ・・・」

そう言いながらちょっと寂しそうな顔をした。

「けど、それほど遠くないし、誠君も同じ地域だから3人で
一緒に帰ってきますよ。もしかしたら誠君の彼女も4人で
一気に賑やかですよ」

「そうだなあ・・・それもまたいいか」

そう言いながら二人で来年の話をして笑っていた。

「いまごろハル、泣いてるかもなあ〜 こんなに長い間、華ちゃんと離れたこと無いんじゃないか。電話来てる？」

「ええ。メールも電話も。普段の倍きてますよ」

「うちには電話一本こないぞ？やっぱり男はダメだな。彼女ができたならそっちはかりで」

それでも山崎さんはハルが元気で楽しく旅行をしてると聞き、安心して「じゃ、ハルが戻った日にまたね」と帰って行った。

いつもハルを待つ窓辺に座り、

「今ごろ楽しく遊んでいるんだろうなあ・・・」
そんなことを考えながら外を見ていた。

遠くからバイクの音が聞こえた・・・

ハルとはちよつと違うマフラーの音に反応せず
そのまま外を見ながら音楽を聞いていた。

そのバイクは家の前に止まり、こつちを見上げていた。

その格好がハルにそっくりで、ちよつと驚いて窓辺に立ち上がりその姿を見ていた。

その人は軽く手を振り目の所をあげた。

「ハル？どうしてここにいるんだろっ」

そう思い急いで外に行くと、それは誠君だった。

「すごく似てる〜ビックリした」

「ハル、修学旅行なんだってね。華さん暇なくな〜って思ってた。ちよつと遊びに来たんだ。暇？」

メットを被り、目の所だけを見るには、本当にハルが話をしているように感じるほど誠君はハルにそっくりだった。

「うん。暇・・・ハルがいないとつままない」

「じゃ、どこかいく？ハルいないからちよつとくらいなら後ろに乗ってくれないかな〜って」

そう言つて後ろのシートを見ながらニコツと笑った。

「誠君。うちに入らない？一緒にDVD見ようよ。」

さつき暇だと思つて借りてきたの。まだ見てないんだ」

やっぱりハルのバイク以外は乗りたくなかった。

けど、それを言つとなんとなく誠君に悪いと思ひ、咄嗟にそう言つた。

誠君なら部屋にあげてもいいと思つたし、危険は感じなかった。

「えっ・・・うっそ・・・いいの？」ビックリした目でそう言う誠君に

「うん。誠君なら安心なもの」そう言つて「いこ？」と誘つた。

そのまま部屋に続く階段を上がつていくと、妹とすれ違った。

妹は誠君を見て、普通に「あ。こんばんは〜」と言つて下に降りて行つた。

「ねえ？蘭〜 ハルのお兄さん。誠君」そう言つて気がつかなかっ

た妹に紹介した。

「ええー！」慌てて側に走ってきてジツクリ顔を見た。

「あ・・・そう言われれば・・・ ちょっと違つかも？でも違和感無いね」

そう言って頭を下げ挨拶をして降りて行った。

ふふふつと笑いながら部屋に誠君を通した。

「適当に座ってて。今、お茶持ってくるから」そう言っただけで部屋を後にして

お茶を入れていると蘭が、

「ねえ・・・どうしてお兄さんが遊びに来てるの？いいの？ハル君怒らないの？」と聞いてきた。

「ん？大丈夫じゃない。別に隠す必要無いから、

ハルにあとから電話するし。だっただけお兄さんだよ」

そう言っただけお茶を持って部屋に行った。

誠君は落ち着いた感じでベットの端に座り、適当に本を見ていた。

珈琲を手渡し、見ている本に目をやると専門学校で勉強する

内容の参考書をパラパラと見ていた。

「どう？20歳で学生になる気分は」

嫌味を言いながらニヤツとして内容を見ていた。

「そうだなあ・・・歳誤魔化しちゃうかな？」

笑いながらTVのスイッチを入れDVDを再生した。

「あ。これ見ようと思ってたんだ。ちょうど良かったよ」
そう言って誠君も黙ってTVの画面を見ていた。

なにも言っていないのに誠君が座った場所はいつもハルが座る所だった。

それもあり、まったく気にしないでいつものように足の上に自然と入りそのままTVを見ていた。

「あっ！ごめん・・・ つい癖で・・・」

その姿勢に気がつき慌てて笑って誤魔化し誠君から離れた。

「俺も・・・今、すっげえビックリした」

「ごめん！ごめん！つい癖になってるんだよね。どこに座ってもいつもこの姿勢だから・・・」

そう言いながら笑う私を見ながら誠君は声を出して笑っていた。

ちよつと離れた場所に座り、そのまま映画を見ているといつもの時間通りにハルから電話が入った。

「あ。ハルだ・・・」

電話にでようとすると、誠君はちよつと慌てながらこつちを向き、

「ハルには内緒にして。また俺が誘いに来たって言うとな変に誤解するから」

そう言っただちよつと困った顔をした。

「でも・・・隠すほうが変でしょ？偶然なんだもの。それに妹が今度ハルに会ったら言うよ。きつと」

「じゃあ妹にも口止めしておいて。アイツ結構メンタル弱いし、気にすると思っんだ・・・」

メンタルが弱いと聞き、それもそうだなと思いハルの電話の間、誠君がいることを言わずに電話を切った。

「もう帰りたいてさ」

「本当にガキだな。ちょっとくらい離れてもいいじゃんね？」

そう言っつて二人でハルのことを考えながら笑った。

「華さんさ。今までにハルのこと嫌だなぁって思ったことある？」

映画のエンドロールが流れる時にそう聞かれた。

「ううん。無いよ？ただ・・・バイクには本当は乗って欲しくないかな。」

どうしてもあの日のことが頭に残って、怖くて仕方無い時があるんだよね・・・」またそのことを考え顔が曇った。

「具体的にハルのどこがそんなに好きなの？」

「具体的かぁ……どっつて無いかな」

「え……無いの？」

「特別ドコつて所が無いってこと！だつて全部だもん。
なにかも可愛くて仕方無いって感じかな！」

「ふうん……。華さんならもつと年上でお金があつて格好の良い
奴だつて

沢山選べるんじゃない？なんか勿体ねえ」

「別にそんなの関係無いよ。私はハルからお金じゃ買えないモノを
貰つてるもん」

「どんなモノ？」

「モノつて言うか……。私ね、こんなに人のこと好きになれるん
だなつて

ハルに会つて初めて思ったの。ただハルが笑ってくれるだけで嬉
しいの。

いままでそんな気持ちになつたこと無いもの。これってお金じゃ
買えないでしょ？」

そう言つてDVDを取り出しケースに戻した。

誠君は（ふうん）と言いながら少し呆れた顔をして笑っていた。

誠君を外まで送り、「じゃ、またね」と手を振った。

「うん。今日はいきなりごめんね」とエンジンをかけ、チラッとこちを見た。

「ハルになりたいなって、さっき本当に思ったよ。」

そしたら今もさよならのキスくらい、してくれるのにね」

そう言つて目の所をパタツと閉め、軽く手を振って帰って行った。

黙つてそれを見送りながら、

（ハルならあのカーブで必ず2回、わざとブレーキを踏むのにな・・・）

そう思いながら誠君が見えなくなるのを見ていた。

この時の私は誠君の気持ちなんて全然考えていなかった。

ただ「ハルのお兄さん」それ以上でもそれ以下でも無かった・・・

湖での思い出

7月になり、どんどん暑くなってきた。

GSの時ならば日焼けを気にして大変なのに、室内の仕事になると全然そんな心配が無いことに、安心しながら仕事をした。

休みが増えたことと、時間が短い日があることでハルと一緒にいる時間は前よりとても増えた。

私も専門学校での参考書を開き、ハルと一緒にその時間を利用しながら勉強をした。かなり難しいことばかりだったが、それでも少しずつ頭に入れていった。

来週にはハルは夏休みになり夏期講習とか行かないの？と聞いたが「そんなの行かなくても楽勝」と余裕な返答が返ってきた。

TVでは雨竜町という所の「ひまわり畑」の話題が流れていた。東京ドームの4個分の敷地に一面咲くひまわりの話が流れ一緒にニュースを見て「いいね」と言っていた。

「じゃあさ、近いうち行かない？」

「そうだね。夏休みになったら行くか？」

車でだいたい5時間くらいのその距離に、ハルとの長距離は久しぶりだと感じていた。

「じゃ、バイクでいこ？なんだかそれくらいの長さ走ってみたいし」
そうハルが言い出したが、ちよつと遠いので反対した。

「いいじゃん。俺、あんまりバイクで長距離走ったこと無いんだっ
て」と

連日「うん」と言うまでハルは言い続けた。

山崎さんに「どう思います？」と助けを求めると

「まあ・・・昼間だしね。いいんじゃない？」と軽い返事が返って
きて渋々OKをした。

ハルより一足早く誠君が夏休みになり帰省した。

ちよつと日焼けをし、「勉強しないで遊んでいたな」と
みんなで冷やかして笑っていた。

誠君が帰ってきたこともあり、翌週の休みにみんなで海に行った。

お母さんは「泳げないから」とシャツのままだったが、

山崎さんは張り切って、水着になり

散々ハルと誠君に「腹・・・キツイよな」と笑われていた。

せつかくだからと新しい水着を買って行ったのに、

ハルに「派手すぎ！」と言われ、終始体にバスタオルを巻かれた。

そんなハルを見て「お前本当に小さいな」と誠君がからかっていた。

水着こそ派手だけど、全然泳げない私にハルは大笑いをして

その日は一日水泳のレッスンを受けた。

けど、水に顔をつけるのが嫌で結局は泳げないまままで終わってしま
った。

ハルは誠君が私の側に来て、チラチラと水着姿を見るのを
怒り、「見るなよ！」といつまでも誠君の近くで

「シツ！シツ！」と犬でも追っ払うかのような仕草をしていた。そんなハルと誠君を見て、山崎さんとお母さんは嬉しそうに二人を見ていた。

ジューズを飲みながら山崎さんとお母さんと並んでパラソルの下に入り、目の前で下手くそなビーチバレーをする兄弟を見ていた。

「やっぱり似てるね。誠君の背があと5センチくらい小さくて、髪が短かったらハルになるね」そう言いながら山崎さんに笑いかけた。

「そうだなあ・・・でも華ちゃんはハルがいいんだろ？」
ビールを飲みながら山崎さんがニコニコして聞いた。

「うん・・・誠君は一人でなんでもできそうだから。友達も簡単に作れるし、彼女だつてすぐできるけど、なーんだかハルは不器用だし。側にいてあげないと寂しそうな顔するから。だからハルがいいかな」

「華ちゃん・・・ハルのこと全部知ってるんだって？
その、、昔のこと・・・」ちよつと言いづらそうな顔をした。

「なんでも知ってますよ？けど、それもふくめてハルだから。でも大丈夫。もうそんなこと絶対させないから。約束したの・・・ずーと一緒つて。だからこれからもいつでも家族の邪魔しちやいますよ？」

そう言つて笑うと後ろでお母さんがちよつとだけ涙を拭いたような気がした。

「そつか・・・もう結婚写真もあるしな。いつそのこと一緒に住んじゃえば

いいのに。な、母さん？」そう言ってお母さんを見て笑った。

「ねー」とそれだけ言ってお母さんはトイレに行ってしまった。鼻が真っ赤になっていた。

「嫁と姑の戦いは無さそうでしたね」と二人で笑っていた。

ビーチバレーはどっちも下手くそで勝負にならず、

「私も入れて！」とハルの側に走っていくと、

「華はTシャツ着てこいよ！」とハルが文句を言っただけでまた誠君の目を気にして大騒ぎをしていた。

夕方までみんなで遊び、バーベキューをしたり花火をしたり・・・家族の一員になったように楽しい一日を過ごした。

それからの毎日も、

ハルにくっついてGSに顔を出し、バイクを洗ったり、仕事が終わる日にはハルの勉強を見たりと

早回しのように時間は過ぎて行った。

ひまわりを見に行こうと言っていた前日。

ハルとちよつと遠く離れた湖にバイクで遊びに行った。

天気良く、写真を沢山撮りいつまでも遊んでいた。

夕方になり、

「もう明日のこともあるし、少し早めに帰ろうか」

そう言っつて帰り支度を始めた。

「華・・・帰りさ、ホテル行かない？」

突然そんなことを言うハルに「ええ！どうしたの？」と思わず聞いた。

「いや、なんかちょっと行ってみたいなって・・・」

いつもとは違い、全然照れる様子も無くそう言った。なんとなくその感じがちょっと気になった。

「ハル、具合悪いの？どつかで休みたいってこと？」

「ううん。そんなことない。ただ行ってみたいな〜って」

「うん・・・いいよ」そう言っつてバイクに乗り、湖の近くのホテルに入った。

初めてのラブホテルにハルは喜んでいた。

(さっきのは気のせいだったのかなあ・・・)

そんなことを思いながら、喜んで有線などをいじっているハルを見ていた。

「なんかさ、こんな所つてあの星見た日以来だな」

ベットに入っつてからハルが体を寄せそう言った。

「そうだね。誰にも気兼ね無いね」そう言っつて笑った。

「俺はいつでも気兼ねしてないけどね？いざ始めちゃったら、

そんなの気にしてらんねーじゃん」そう言いながら唇を重ねた。

「ハル、キス上手になっつたね」

「先生が いいもの」

終わってからハルは枕もとにあるスイッチをパチパチといじり一つのスイッチをONにすると天井にプラネタリウムのようなほんの少しの星が映った。

「お？なんかいい感じ」

そう言って上を向いて、それを見た。
一緒に寄り添いながらその星を見て、あの日のことを思い出していた。

そして心の中で「バイクに乗る時、ハルが無事でありますように」と流れてもいない星を見て願ってみた。

「やっぱり変だなあ・・・」

「どうしたの？」

「なんだかヤツた気がしない・・・」

「はあ？なにそれ」

「朝からそんな感じしてさ。なんだろ？俺・・・」そう言って天井を見上げていた。

そのままスルツと布団の中に潜り、ハルの足の間に体を滑りこませた。

「えっ！わわ・・・ちょっ、ちょっと、華！」

最初は驚いていたハルだったけれど、しばらくすると静かに髪を撫でる手の感触が頭にあった。ゆっくりと布団をめくり、ハルの視線を感じた。

「いやだった？」

「いやな訳ないでしょ……」

苦笑いをしたハルの顔を見てまた布団の中に体を戻した。

息があがりゆっくりと腰を動かすハルの動きに合わせて漏れる吐息に嬉しい気持ちになった。

(ハルが喜ぶなら……なんでもできる……)

ハルがいったのを感じ布団の中から「ふう……」と顔を出した。

「結構……大胆だよ……華……」

「嫌いになっちゃった？」

「いや、もっと好きになった。全部好きだよ……」

そのままハルの胸に顔をつけていた。

しばらくして、クルツと体の向きをかえ、また首筋にキスをして足の間
の間に
体を入れてきた。

「えっ！まだするの？」ちょっと驚いた顔で聞くと、
「ダメ？あと一回！」そう言ってハルはニヤツと笑った。

「どうしちゃったの？」

「いや・・・なんだろ？自分でもわかんないんだけど・・・
あ！でもゴムないや・・・」

枕元のコンドームが一つしか無く、二人とも持っていないかった。

「うわあ・・・残念・・・」そう言って胸にガツクリと顔を落とす
た。

けれど、こんなハルを見たことが無く、なんとなく気になった。

「そのままきて・・・」そう言ってハルの首に手をまわした。

「え・・・マズくない？」ちょっと心配そうな顔をしたが、

「うっん。いいの、そのまま・・・」そう言って唇を重ねた。

普通なら絶対自分もそんなことは言わないけれど、
なんとなくその日はそう口から言葉が出た。

もしも妊娠なんてしたら大変なことなのに、その時は
そんなことを考えることも無く、そのままのハルを受け入れた。

あんなに薄いモノなのに、着けているのと着けていないのでは感
覚が全然違った。

ハルもそう感じたのか、いままでお互い一番激しかったような気
がした。

「華・・・ありがとう・・・」

イク時にそう言ったハルの顔を見ながら自分も頭が白くなっていった・・・

その時のハルの顔がいつまでも頭に残った・・・

お互い別れる時に、「もう満足した？」そう聞くと、

「うん。ばっちり！なんだったんだろな？もうデキない訳じゃないのに」

そう言っ二人でクスクスと笑った。

「じゃ、明日9時に迎えに来るから、用意しといて」

「うん。わかった。じゃ、明日ね」

ハルはバイクに跨ったままメットを脱ぎ、ゆっくりとキスをした。

「これで子供とかデキちゃったりして」

そう言っメットを被りバイクをUターンして手を振り帰った。

いつものようにカーブで2回ブレーキを踏み、ハルのバイクがカーブに消えて行った。

やっぱり変な気がして仕方無かった・・・

家に着いたとメールが来ても、その変な気持ちは消えず

(ハルの変だな・・・ていうのが移ったのかな？)

そう思いながら、その日は眠りについた。

次の日、家でハルが来るのを待っていた。
たぶん長距離になるからと、暑いのに長袖を持ったり、
日焼け対策をしたりと朝から忙しく用意をしていた。

「少し早くでようか？」そう言われたので、その日は休みなのに
朝の7時頃から起きて用意をした。

お弁当やお茶を用意し、カメラやシートや・・・
イロイロな物をリュックに入れてハルとの時間に備えた。

「9時には行くよ」そう言われて8時30分にはいつもの
窓辺に座り、ハルが来るのを待っていた。

「今日は暑くなりそうだなあ・・・」そう思いながら晴れた空を見
ていた。

まだ空気はそれほど暑くは感じず、
きつと綺麗に広がるひまわり畑を想像して楽しみにしていた。

時計が9時を指し、もうハルが来ると思いながらボンヤリと外を見
ていた。

ハルはいつも時間に正確だった。

耳を澄ませハルのバイクの音を聞き取ろうとしたが、

一向にその気配が無かった。

(今日は遅刻かなあ・・・)そう思いながら椅子に座り外を見た。

「華・・・」

ハルの声が聞こえ、窓の下を見た。
けれどどこにもハルの姿は無かった。

(あれ?いま聞こえたのに……)

キョロキョロと窓から体を出し
辺りを見渡したが、やっぱりハルの姿は無かった。

9時半になっても10時になってもハルは来なく、
携帯にかけてみたが電源が入っていないと言われた。

「ん……珍しいなあ……」そう思いつつも窓辺に座り黙って
待っていた。

ふと……嫌な予感がした。

この前の事故のことが頭に過ぎり心臓がドキドキし始めた。
きっとそんなことを言えばまたハルは「本当に心配性だよな?」と
笑う。

けど、時計を見ると10時半を過ぎていて、
こんなに遅れて連絡が来ないことに、だんだん怖くなり
自分から電話をすることすらできなくなった。

そんな時、遠くからバイクの音が聞こえた。
動揺をしていたので、いつものようにマフラーの音を
正確に確認すること無く、家を飛び出した。

玄関の前に止まった姿を見てホッとした。

けれど、どこか違うような気がして側に行くとそれは誠君だった。嫌な予感的中したかのように鼓動が早くなり立っていることができなくなりそうなくらい体がどんどん冷たくなってきた。

「華さん、後ろに乗って・・・」誠君がそれだけ言い、メットも外さず、バイクを降りることなく黙っていた。

「ハルが来るから・・・」

「早く!!」

大きな声で言われた瞬間、体の血液が止まったような気がした。

そのまま家に駆け込み自分の車のキーを取り車まで走った。

「華さん!!」

誠君の言葉にも耳をかさずに急いで車に乗り込みエンジンをかけようとしたが、手が振るえてキーが鍵穴に入らずいつまでもガチガチと鍵穴の周辺にキーを挿していた。

誠君がバイクを止め、「俺が運転する・・・」そう言って急いで運転席から降ろされ、助手席のドアを開けた。

「ハルは？どうしてこないの！ねえ!!」

そう聞いても誠君はなにも言わずに私の体を助手席に押し込め、急いで自分が運転席に乗り車を動かした。

「ハルになにかあったの？誠君！教えてよ！」

誠君は何も言わず黙って運転をした。

体が震えて止まらなかった。

けど、不思議と涙が出なかった。こんなに不安な気持ちなのにただ体だけがガタガタと震え、誠君の顔を黙って見ていた。

そして気づいてしまった・・・

誠君の目が真っ赤で少し潤んでいることに。

信号が赤になり車が停まった時、ソツと右手を誠君が握り口を開いた。

「ハル・・・トラックと正面衝突した・・・」と・・・

覚めない夢

誠君の言葉を聞いた瞬間、体にベールがかかったようにすべての音が聞こえ辛くなった……

なにも言えずただ黙って、車に乗って正面を向いていた。指先が冷たく、血が全部抜けたくらい寒気がして体の振るえが大きくなった。

病院に車を止め、誠君が運転席から降りても、そのまま動くことができず黙って助手席に座ったままだった。足元にハルが落としたポップコーンがひとつ目に入った。

助手席のドアを開け、「華さん、大丈夫？」と声をかけられたが、やっぱり聞き取り辛かった。

フツと顔をあげ、誠君を見ると薄っすらと目に涙が溜まっているのが見えた。

そのまま手を引かれ病院の中に入ると、山崎さんとお母さんが椅子に座っていた。お母さんは泣き崩れ、山崎さんは黙って下を向いていた。

お母さんが私を見て、泣きながら抱きついてきたが、その感覚すら薄っすらとしたもので、何も言わずに黙っていた。広い休日のロビーにはお母さんの鳴き声だけが響いた。

「ハル……どこですか？」

自分の声すらどれくらいの大きさなのか、さっぱりわからず

(きつとこれは夢なんだなあ・・・縁起の悪い夢だな)
そう思いながら山崎さんに抱きかかえられるお母さんをボンヤリと
見ていた。

誠君に手を引かれ、近くの椅子に座らされたが、
やっぱり座った感覚も毛布を一枚敷いたように鈍い感じがした。

この前あんなに大泣きをした私が涙も流さないのを
見て誠君は黙って肩を抱いた。

しばらくその場に座っていたが、白衣を着た人と山崎さんが
なにやら話し、場所を移動して行った。

「華さん・・・立てる？」そう誠君に言われ、肩を抱かれたまま歩
いて行った。

病室の一室から2人の看護師さんが出てきた。
お母さんはそのドアの前で泣いていた。

「華さん・・・無理に入らなくていいから。ここにいる？」
誠君の曇った声になにも答えずドアを開けた。

ハルがそこに横になっていて普通に眠ったような顔をしていた。
静かに顔を触ると、ひんやりとした冷たさが指に染みだした。

「ハル？早く行かないと・・・暗くなっちゃうよ・・・」

その言葉に自分の声がハッキリ聞こえた。

「ハル・・・ねえ、起きてよ」

そう呼んでもハルは黙って眠っているだけだった。

ハルの顔がグラツと歪んだように感じ、

(あ・・・起きたのかなあ・・・)

そう思った瞬間、もう記憶が無かった。

目を明けると知らない部屋にいた。

誰かが手を握っている感じがしてその手を動かすと隣に誠君がいた。

「ハルは？」起き上がってそう言うのと、

誠君は何も答えず黙ってゆっくりと私のことを抱きしめたまま動か
なかつた。

何があつたのか、どうして誠君が何も言わずに私のことを
抱きしめているのかも頭がボンヤリしてわからなかつた。

「ねえ・・・ハルは？」

「もう家にいるよ・・・」

その言葉に体を動かさず、ベットから出ようとしたが
誠君は黙って動けないように抱きしめたままだった。

「誠君。放してくれないと・・・ハルに会えない。それにこんな
見たらハルにまた怒られるよ？」

静かに体を放し「大丈夫？」と聞かれた。

「うん。大丈夫」と普通の声で答えベットを出た。
廊下に出るとそのまま向かえのハルの部屋に入っていったが、そこにハルはいなく、振り返って「どこ？」と聞いた。

「下・・・上には運べないんだ」そう言われて下に行った。
リビングに行くのと知らない人達が数人いた。
山崎さんがこつちを見て悲しい顔をしていた。

奥に布団が敷いてあるのを見て、側に歩いていくとそこにハルが寝ていた。

隣に座り、黙って顔を触った。やっぱりヒンヤリとしていた。
両手で顔を触り、黙って顔を見つめていた・・・

手を触るとやっぱり冷たく、時計が外されていたので、
手首の傷が大きく見えた。自分の腕にしていた皮ひもの
ブレスを外し、ハルの手首に巻きつけ傷を隠した。

それを見て、後ろで誠君が鼻をすすった音が聞こえた。

「ハル・・・もう起きよう?」

その声に周りのみんなが泣き出したのに気がつき
見渡すとみんな下を向いて泣いていた。

外はもう暗く、大げさな花がいくつも枕元にあっただが、
本当にハルが死んだとはどうしても思えなかった。

ハルの手に「はあ・・・」と息をかけ暖かくなかないか暖めていた。

手に唇をつけても冷たいままだった……

それでも涙が出ず、ただ黙っていつまでも手に息をかけていた。何度息をかけても暖かくならない手を顔につけその体温で手を温めようとずっと顔につけていた。

顔が冷たくなっても、何度も何度も右の頬、左の頬と場所を変え暖めた。

その姿を後ろで見ていた誠君が、

「華さん……もう二階にいこ……」と言って手を引っ張った。

その言葉を無視して、それでもずっとそこでそうしていた。けど、強く力を入れ、誠君が引っ張り立ちあげられた。

「華さん。しっかりして。もうわかっただろ？」

肩を掴まれそう揺すられたが、また感覚が鈍くなった。

「側にいないとハルが起きた時、心配するじゃない」

「いい加減にしなよ！華さん！」

誠君の大きい声にもやはり声が

曇っているように聞こえて、耳がおかしくなったように感じた。

（だからこれはやっぱり夢なんだよ……きつとそうだ……）

そう思いながら誠君に連れていかれた。

「オヤジ……二階にいるから」

誠君の部屋に入ろうとしたが、ハルの部屋のノブを掴んだ。それを見て誠君は黙ってハルの部屋に入ってくれた。

壁のドレスの写真を黙って見ていた。

相変わらず片目を瞑り笑っているハルがそこにはいた。

その横で嬉しそうな顔でハルにキスをする自分を見て

「この写真・・・やっぱりいいね」と誠君を見た。

誠君は何も言わずに黙って、また抱きしめた。

ハルの部屋で誠君に抱きしめられるのはちよつと違和感があった。

けど、そのまま黙って誠君の胸に顔を埋めていた・・・

「私、もう帰らなきゃ・・・」

「えっ？どうして」

「だってハルが来るもの・・・」

体を放し黙って顔を覗きこみ、

「華さん・・・ハル、いたよね？さっき下にいたよね」そう言って心配

そつな顔をされたが、ただボクとその顔を見ていた。

「寝てるだけだから。きつと疲れたんだよ・・・」

昨日・・・ハル、何度してもした気がしないって。

だから疲れてるんだよ。もう少し寝かせてあげる・・・」

自分で何を言っているのか分からなくなっていた。

ただ・・・ハルは寝ているだけ。

それ以上考えることを頭が拒否していた。

そのままハルの家を出て、自分の車に乗ろうとすると黙って誠君が助手席に座った。

「どっしたの？」

「今の華さん一人にできないよ・・・」
そう言われて何も答えずに車を出した。

「明日の葬式・・・出られる？」

そう誠君に言われても何も答えずに黙って運転をした。
家に着き、誠君も部屋に入り黙っていた。
窓際の椅子に座り、ただボンヤリと外を見た。

「さつき誠君が来たとき、いつもならハルってすぐわかるのに、
わからなかった。ハルに怒られちゃうね」

ただ窓から外を見てそう言った。
なにも言わずに誠君は黙ってベットの端に座りこっちを見ていた。

「もう帰っても大丈夫だよ？明日になったらハル来るから。
だから大丈夫。待ってるって伝えてね」そう言っ外を見ていた。
それでも誠君は黙ってこっちを見ていた。

何時間も黙って外を見ていた。
そんな私を誠君も見えていた。

空が明るくなつた頃、誠君が口を開き、
「華さん・・・行かないの？」そう聞かれた。

「ハルが来るまで待つてる……」
そう言つてまた黙つて外を見ていた。

下に人の気配がして、誰かが起きたのだと思つた。
それを聞きつけて誠君が下に降りて行き、しばらくしてから
玄関のドアが開いた。

その日はなにも動かず、ただ黙つて椅子に座り外を見ていた。
いつハルが来てわかるように耳を澄ませていた。
何度かお母さんが部屋を覗きにきて、テーブルに何か食べるモノを
置いていったが、触る事無く黙つて座っていた。

少しだけ喉が渴き、リュックに入れたポットからお茶を一口飲んだ。
氷を入れたはずのポットのお茶はもう温くなっていた。

その日の夕方、バイクの音が聞こえたがハルの音じゃないので
そのままそこに座っていた。
少し遠くでエンジンが切れる音がして、誠君が来た。

部屋に入り、昨日と同じ形で座っている私に
「華さん……寝てないの？」と小さい声で聞いた。

ちよつとだけ振り向き、また前を向いた。

後ろに来て肩を抱き、ベットに連れて行かれ横にされた。

「少し寝たほうがいい……」

そう言った誠君の手を握り黙って顔を見た。
隣に横になり、布団をかけてくれ、誠君の肩に顔を寄せ少しだけ目を瞑った。

まだ涙は出なかった……

少しずつあれが本当のことだったのかもな……
そんなことを考えたが、やっぱり信じられなくて、その考えを振り払った。

「明日も来ないの？」

「ハルが来るまで待つ……」
そう言っただけ目を閉じた。

翌日、また朝方に誠君が家を出て行った。
枕に残った臭いがハルとは違った。

写真たてに入っただけいつものドレスの写真を見ながら、
ただハルは遅れてくる……そう思いながらいつまでも写真の
笑ったハルを見ていた。

「本当にイイ顔して笑ってるな……」

あの日のことを考えながら、写真を見ていた。

女の子を見て「デレ」とした顔をしていたな……とか
ドレス姿を見て「本物みたい！」と褒めてくれたな……とか
そんなことを考えながらいつまでも写真を見ていた。

そこにお父さんが入ってきて、写真を見る私に

「もうすぐ出棺だぞ。行かないのか？」と聞いてきた。

「なに言ってるの？もうすぐハルが来るんだから……」
そう言って黙って写真を見ていた。

後ろで蘭が泣きながらお父さんの手を引っ張り、部屋の外に出した。

（みんな何言ってるんだろ……）

そう無理に思い込んで、黙って写真を見た。

その日の夕方、誠君が来ても私は何も言わずにまた黙って外を見ていた。

そんな私を見て、

「華さん……」と声をかけたが振り向かない私にそれ以上声をかけずに黙っていた。

「誠君…… 毎日疲れちゃうでしょ…… いいよ。帰ってそれだけ言って黙っていた。」

「疲れてないよ。俺のことはいいから。華さんなにか食べた？」

「ちゃんと寝なきゃダメだよ？」

そう言われたが、何も答えず黙っていた。

結局、それから数日、私はその状態で過ごした。

あの日以来……ハルの家には行かず、その後ハルがどうなったのか

一切知らずに毎日を過ごした。

仕事も誠君が上手く言ってくれたらしい。

もうどうでもよかった。それでも眠ったようなハルしか見ていない私には

ハルが死んだとは思えず、それでも来てくれるとも思えず、
なにもできないまま、明るくなれば窓際に行き、暗くなればベット
に行く……

そんな感じで一週間が過ぎた……

その間、一日だって忘れずに誠君は来てくれた。

だんだん誠君がハルに見えてきた……

認めない

あの日から何日経ったのだろう……

いつになっても現われないハルを延々と待ち、時間だけが何事も無かったように過ぎていった……

こうして窓辺に座り続けて、ハルは本当に来てくれるのかな……段々と同じ風景ばかりを見続けている自分の中でそんなことを思うようになっていた。

けどそれ以上は考えることをしなかった。

それ以上は……ハルの死を認めることになるから。

(嫌なことがあるとここに来るんだ……)

そんなハルの言葉が急に頭の中に浮びあの夜景の場所を思い出した。急いで車のキーを持ち玄関に向った。

(きっとハルはそこにいる……)

そんな私をなにか変なことをするかと思ったのか、お母さんが引きとめた。

「華！どこ行くの！」

久しぶりにまともに見たお母さんの目は真っ赤だった。

「ちよつと・・・出てくる・・・だけ・・・」

「いいから！まだ家にいなさい！」

「なんでもないから。すぐ帰ってくるから」

腕を痛いくらい捕まれ、お母さんは私の腕を離さなかった。心配してくれているのは分かっていたが、

ハルに会うことを止められているかのような行動に

私はヒステリーになりながら振りほどこうと必死になった。

そこに誠君が来て、玄関にいる私を見て驚いた顔をした。

「誠君！この子どこか行ってくて・・・まだこんな感じなのに・・・」

腕を掴む力を緩めず、でも声は涙声になりながら誠君に助けを求めるように

お母さんは言った。

「だから、すぐ帰ってくるから！離して！ハルが・ハルが待つてるから！」

それを見て誠君が

「俺と一緒にいきますから。大丈夫です」

そう言っ母の手を解き、私の手を引いて外に出た。

「どこ行くところとしたの？」

「夜景のところ・・・」そう答えて顔を見た。

「俺、運転するから・・・」

そう言ってキーを受け取り運転をした。

黙っ外を見て、なにも話さないまま夜景の場所についた。

ハルを探すようにあちこちを見たが、誰もいなかった。

そんな姿を見て誠君は黙っ後ろをついてきた。

落書きの木を見て、白かつた痕が少し黒ずんでいるのを、近くにあつた石でもう一度強くなぞつた。

「はる・はな」

そう書いた字をゆっくりと手で触つた・・・
急に体の力が抜けてその場にしゃがみこんだ。

「ハル……」膝が折れたようにガクンと下についた。

これを書いた時は、すぐ隣で笑っていたのに……
「下手な字」といって馬鹿にしていたのに……

けれど涙はどうしても出てこなかった。

そんな私のことを少し離れた後ろから誠君は黙って見ていた。

「華さんのとこ行くこうとしてたんだよ……」

相手、居眠り運転だったんだ。ハル……避けきれなかったんだろっな。

朝、「今日は華とひまわり見てくる！」って元気に出たんだ」

誠君は静かに消えるような声で言った。

いつまでも、いつまでも、その落書きを触っていた。

ただハルはどこかに行ってるだけなんだ。
もうすぐ帰ってくるんだ。

「華さん……。ハルは死んだんだよ？」

子供に言うように優しい口調で私に話しかける誠君の声を聞きながら落書きを見つめていた。

「ハル……死んでも連れて行ってくれるって約束したの。」

ハルがいらないなら生きていても仕方無いから……」

何度も声を詰まらせながら、誰に言う訳でもないのに呟いた。

「そんなことハルが思うわけ無いだろ？ハルのぶんまで生きてないとかダメだろ？ハルのこと忘れるまで俺がちゃんと側にいてあげるから。」

だからそんなこと言わないで」

そう誠君が言ってくれたけど、誠君は誠君で、ハルはハルだ・・・忘れることなんてできないし、代わりにもしならない・・・いまにも泣きそうな自分を必死で押さえた。泣くとハルの死を認めることになる。唇を堅く噛み、手にグツと力をいれ握った。

「華さん。もう行こう」

小雨が降ってきたのを感じ、誠君が手を引いた。誠君は自分の家に私を連れて行った。

山崎さんもお母さんも誰もいなく、シーンとした部屋にいままで感じなかった線香の臭いが充満していた。最後にハルが寝かされていた部屋に誠君が手を引いて行った。

真新しい仏壇があり、たくさんのお菓子やジュースが山のように積んであった。きつと骨が入っているだろう箱が目に入った。けど、私の記憶には眠るハルしか無いので、こんな小さい箱には到底収まりきれない・・・きつとこれは飾っているだけだ・・・まだ心の底で現実を拒否していた。

仏壇にはハルの写真が飾ってあった。

その写真は最初に撮ったほうのドレスの写真のハルの部分を

切り抜いたものだった。

「ハルが一番、幸せなときの写真がいいだろ……ってそれにしたんだ」

(本当に死んじゃったのかなあ……)

そんなことを思いながらいつまでも、その緊張してちょっと変な顔をしたハルの写真を見ていた。

「どーせなら……映りの良いほうの写真にすればいいのに……」
ポツリとそう言った。

「ん……あれのほうがいいと思ったけど、華さんの顔切れないだろって。」

まさか一緒にする訳にいかないし……」

「一緒にいいよ。もうすぐ一緒になるから……」

「華さん。いい加減にすれよ！絶対そんなことすんなよ！

そんなことしても意味無いよ。ハルはもう死んだんだぞ。

華さんは生きてるんだから。頼むからそんなこと言わないでくれよ」

そう言って黙って写真を見ている私を後ろから抱きしめた。

薄っすらとハルが死んだことを認める自分と、ただ居ないだけだと思っ自分がいた。きつとハルが火葬場に連れていかれるのを見たのなら、もっとそれは現実になるのだからうけれど・・・

なにも見えていない私にはその肝心な部分が抜けているのでいまひとつ現実を受け止めることができず、でも・・・
（もう逢えないのかなあ・・・）と漠然とした気持ちはどこかにあった。

「ハルの部屋・・・行っていい？」抱きしめられたまま誠君に聞いた。

「もう行かないほうがいいんじゃない？辛くなるだけだよ・・・」

「ううん。行きたいの。お願い・・・」

スルツと誠君の腕が放れ、そのまま二階に上がって行った。

ドアを開けるとハルの臭いがした。

ベットの上に脱ぎ捨てられたままのパジャマを見て、
今にもハルが戻ってくるような気持ちになり綺麗にたたんだ。

枕元に二人で笑っている写真があった。

（これ、なんの時のだっけなあ・・・）そう思いながら見ていた。

「華さん。ちょっといいかな・・・」

そう言つて写真を見ている私の手を引き、また誠君が車に乗った。

「どこ行くの？」そう聞いても誠君はなににも答えなかった。

そのまま誠君は真つ直ぐ私を家に送り、

「ちよつと待つてて。すぐ戻るから・・・」そう言つて玄関を出て行つた。

その姿を黙つて見ながら、何も言わずにまた階段を上がり自分の部屋に行つた。まだ足元にはあの日のリュックが転がっていた。

中のモノを出し、無表情でお弁当を捨てポットを洗つた。

「誠君に感謝しなさいよ。彼だつて辛いんだから・・・」

その後ろで言うお母さんの声にも何も答えず黙つてキッチンに立っていた。

(ハルの好きなものばかり作つたのになあ・・・)

そんなことを考えながらお弁当箱を洗つた。

もっとハルの部屋に居たかつたのに・・・

自分でなにがどうなっているのかが、わからなくなっていた。

ハルに会いたいのには逢えない……こんなこといままでも一度も無かったのに。

部屋に戻りベットに体を投げ出しボンヤリと天井を見上げた。何を考えても行き着く所はハルのことばかりだった。

ドアが開く音に目をあけた。

知らない間に眠っていた……ふと目をあげるとそこにハルがいた。慌てて体を起こし「ハル……」と眩き側に行った。

黙って顔を見るハルの手を握るとちゃんと暖かった。

そのまま抱きつき、ハルの暖かさを体で感じ

「よかった……変な夢見てた……ハルがいなくなった夢。

すごく長い間見てて、、本当なのかと思った……」

そう言いながらいつまでもハルの胸で泣いていた。

「華さん……夢じゃないよ。これが現実なんだ」

その声に顔をあげ黙ってハルを見た。

それはハルじゃなく、ハルと同じ髪型にした誠君だった。

静かに体を離し、「ごめんね……」と言い窓際の椅子にまた座り外を見ていた。

「これで、もう死ぬなんて言わない？俺のことハルだって

そう思ってもいいから……」

そう言っただけで後ろに立ち肩に手を乗せた。

一瞬でも誠君をハルと間違えたことを心の中でハルに謝った。

「家に黙っているのが気が滅入るからさ。ちょっと外出しようよ？
元気になるまで俺、一緒にいるから。」

時間が経てば自然と元気になるから……」

そう言っただけ私を立たせ、車に乗せた。

さっきの涙はやっと逢えたことへの涙だ。

ハルが死んだと認めた訳じゃない。自分の中で変に言い訳をした。

隣をチラッと見ると横顔は私でも間違っくらいだと思った。

（本当は嘘をついてハルなんじゃないのかな？）

ソツと顔に手をやった。ちょっとこっちを見たが誠君は
そのまま黙って前を向いた。

（ハル……）

そう心の中で呟き黙って顔を触っていた。

この前とは違う暖かい顔だった。

海の駐車場に車を止め、誠君が黙ってこっちを見ていた。

そのまま黙って顔を触りながら目を見ていた。

（目は似ているなあ……どこが違うんだろう……）

それでも目の前にハルがいる気分になれた。

やっぱりハルかも……

静かに顔を近づけ唇を重ねた。

(ハル・・・)

そのキスはハルより上手だった。
ちよつとそれが可笑しくてクスツと笑った。

「なに？」不思議そうな顔をして誠君が聞いた。

「ううん。ハルより上手だなんて・・・もつと下手じゃないとハルにはなれないよ・・・」

そんな私を見ながら、誠君は寂しい顔をしながら聞いた。

「居なくなつてもう相手に触れられないのと、すぐ目の前にいてどうしても触れられないのとは、どっちが辛いと思う？」

「どっちも辛いね・・・けど、私はハルに触れられないのが一番辛い・・・ハルじゃないとダメなの・・・ハルがいいの」
そう言つて誠君の顔から手を放した。

「俺、ずっとハルが羨ましかった。華さんにこんなに好きになつてもらつてるハルのことが・・・あの3月の事故の時に本当にそう思った。俺が死にそうになつてこんなに泣いてくれる人なんかいないと思った。いつもハルに優しい華さん見て、変わるものなら変わりたいつてずつと思つていた」

誠君の顔を見たが、どう答えていいかわからず黙つていた。

「俺じゃダメなのかな・・・顔だつて似てるだろ？背だつて、声だつて、華さんのこと好きだつてことも。あと何が足りない？」

(でも誠君はハルじゃない・・・)

「ハルはいつも、、真つ直ぐだったの。私が好きになる分、同じくらい好きになってくれた。私達の好きってレベルはいつも同じだったの・・・でも、誠君は違う。」

私、誠君のこと好きになる自信無いもの・・・」

そう言つて黙つて前を向いた。

「どんなに努力してもダメ？今から少しずつでもいいから・・・」
そう言つて静かに手を握った。

その手の暖かさに、あまり何も感じなかった。

これは誠君・・・そう思うだけでやっぱりハルではなかった。

「俺が先に会つてたら違ったのかな？」

「わからない・・・でもいつの間にか頭の中にはハルがいたの。それに、誠君みたいに器用じゃないでしょ？」

そんなところにもきつと惹かれたんだと思う。それがハルだから・・・」

「もう・・・ハルは死んだんだ。いくら思ってもハルは戻らないんだよ？」

そんな奴のこといつまで思うの？」少し怒った口調で言った。

「どうだろ・・・私の周りにはハルがいっぱいいるの。」

たぶん忘れるなんてできない。忘れたくないし。

もう誰も好きにならなくていい・・・思い出だけでもいい」

そう言っても内心は絶対ハルが来てくれると信じて疑わなかった。あんなに強く約束したから・・・

「嫌って言っても連れてくよ」ハルはちゃんとそう言った。

私のことを全部好きって言ってくれた・・・

私がハルのことずっと好きでいれば絶対来てくれると思った。

「忘れるまで俺がいる。絶対側を離れない。いない奴になんか負ける訳ないだろ？ハルだって自分の知らない人より

俺のほうが安心すると思うし。オヤジやお袋だって華さんが

また家に来てくれたら喜ぶと思うから。だから、、ハルのこと早く忘れてよ・・・」

きつと誠君に「ハルが迎えに来てくれるの・・・」そう言っても信じてくれないだろう・・・

でも絶対にハルは来てくれる。そう思いながら海を見ていた。

初めて明るい所でデートをした海を見て、

その日のことを思い出していた。

あの日、緊張をしながら砂浜を歩いたこと・・・
お互い家のことやいろんなことを始めて話したこと・・・
そして花火をした顔を見て心から（可愛いなあ・・・）と
思い、ハルのことを好きになったこと・・・

やっぱり心の中にハルがいつぱいいた・・・

最後のハルの気持ち

毎日がボンヤリと過ぎている。

これが本当の現実の時間なのか、それとも夢なのか、

「お姉ちゃん！今日は天気がいいね」

窓を開け空気の入替えをしながら妹に声をかけられても、

私はどこを見る訳でも無いままボウ・とした顔をして焦点が合っていない。

相変わらず誠君は毎日、毎日、少しの時間を見つけては顔を出してくれていた。

私はどうしても仕事に行くことができず、仕事場に電話をしてできれば辞めさせてほしいとお願いした。

けれど息子から事情を聞いていた先生は、

「時間が解決するから、それまではゆっくりしていい」と言ってくれた。

でも、そんな優しさが自分には重く負担になった。

私はどうすることも無く、ただ窓辺にいるかベットにいるか・・・そんな毎日だった。

髪を切った誠君を見て、妹の蘭が心配そうな顔をした。

「お姉ちゃん……ちよつといい？」

いまだまともに家族とすら話をしない私に妹は毎日元気づけてくれるのに、

それに答えられない自分がいる。

「誠さん見ると、返って辛いんじゃない？あそこまで似てたらそう言つて黙つてハルの写真を見ながら立つていた。」

「そんなことないよ……あれは誠君だもの。私には全然違う人に見えるから。ハルには見えない……」

「そう……でも、毎日、毎日良い人だね」

「うん……」

そう言葉を交わし蘭は部屋を出ていった。

空に大きな満月が輝き、

久しぶりに見たような気持ちになり黙つて見ていた。

部屋の電気を消し、天体望遠鏡を窓辺に持ってきて覗いてみた。

最後にハルが倍率をあわせてくれたままだったので星が綺麗に見え、そのまま何時間も角度を変えいつまでも望遠鏡を覗いていた。

けれど……やっぱり一人で見ていても楽しくは無かった。

隣で馬鹿みたいに「すげー」と言ってくれる人がいないと
なんだかつまらない・・・そう思い、望遠鏡を片し
力が抜けたようにベットに倒れこんだ。

(いったいいつになったら楽になるんだろう・・・)

もしも、このままハルが来てくれなかったら

私は一人いつまで待てばいいのだろう)

起きている時は窓辺でハルを待ち、夜は夢に出てきてほしかった。
けれど、ハルは一度も夢にすら出てきてはくれなかった。

そんなある日。

里実と亜矢が家に来てくれた。

まるで生気の無い顔の私を見て、二人とも言葉を失い
ただ黙って目の前に座っていた。

もつと心配をかけないように振る舞いたい所だったが、
それもできず、なんとか弱く笑い、

「大丈夫だから・・・」そう口から言葉を発することが精一杯だっ
た。

「ごめん・・・」

私のそんな顔を見て、亜矢が堪えきれずに泣きだし部屋を飛び出し
ていった。

「華・・・。また来るから」

亜矢を追い里実も複雑な顔をして部屋から出て行った。

こんな時にかける言葉なんかたかが知れている。
誰が側にいてくれても、今の寂しさを埋めることはできなかった。

そんな二人の顔を見たり、妹の顔を見たり、お父さん、お母さん、
誠君の顔を見ているうちに、一日、また一日と
ハルが死んだことを受け入れてしまいそうな自分がいた。

本当はもうとつくの昔に自分で納得しているのに・・・
こんな風にいつまでも家に閉じこもっていても
なに一つ変わらないことも知っているのに、力が出ず
同じ行動を繰り返していた。

気がつかない間に季節が少し秋になり
開け放した窓に入る風がほんの少し冷たくなってきていた。

ふと・・・
(誠君つてもう夏休み終わってるんじゃないのかな?)
そんなことを思った。

その日の夕方、雨が降り窓を開けることができなくて、TVをつけ
た。
全然、内容なんか見ていないのに黙って画面を見ていた。
いつもの場所に座っていたが、やはり後ろにハルの足が無く
ちよっと背中が涼しいと感じた。

TVの下の台にあるゲームが目に入り、引っ張り出してスイッチを

入れた。

<前のデータを使う>のボタンを押すとセーブされたデータがパーと画面に広がった。

<haru& amp; hana>と書いたセーブデータを押し、久しぶりにゲームを試してみた。

馬鹿みたいに主人公にハルの名前をつけ、その彼女にハナとつけていた。

画面の中のハルとハナは喧嘩をしながらも、仲良く冒険を続けていた。

ハルはこの主人公の彼女の服装が派手だと言い、

「俺ならこんな格好させて歩かせない！」と文句を言っていたのを思い出した。

(きっと最後はハッピーエンドなんだろうなあ・・・)

そう思いながらボタンを押し、ゲームを続けた。

本当はもっと進んでいたこのゲームは付き合った時に私が先に初めていて、もう少して終わる所まで行っていたのに、

主人公に好きなアーティストの名前をつけていて、その彼女の名前をやはりハナにしていた。

主人公が「ハナ」と呼び、その彼女が自分と違う名前を呼んでのキスシーンを見ていて、

「これはダメだな。俺の名前にしてやる！」ハルが強引にデータを消し、

二人でワーワーと喧嘩をした。

「責任持って俺が最後まで手伝うからいいじゃん！」

ハルに押されてデーターを全部消したのに・・・
まだ全然進んでない・・・

途中でどこに行けばいいか忘れてしまい、ウロウロとフィールドを歩いたが

なんだか目が疲れて、そこまででセーブをした。

また椅子に座り、黙って雨があたる窓を見ていた。

空が鉛色になっていてとても重く見えた。

5時少し前になり、階段をあがる音に誠君が来たと感じた。

ハルとは違う、ちよつと軽い感じの昇り方にもう

頭の中には誠君の階段の音がインプットされていた。

「誠君。夏休み終わってるんじゃないの？どうして毎日

ここに來ているの」

いつも黙って外を見ているだけの私がふいに話しかけたことに、
誠君がちよつと驚きながら顔を見た。

「あ・・・俺、寮出たんだ。こっちから通ってる。

オヤジはいいけど、お袋はちよつとまいつているから・・・」

「そうなんだ・・・」

そう言つてまた外を見ていた。

窓の横から見える緑色だった葉っぱが少しだけ黄色くなっていた。

もうどれくらいの時間、こうして外を見ているんだろう。

いつになったらハルは来るんだろう。

「華さん。ちょっとうち行ってみない？オヤジもお袋も華さんの顔見たら喜ぶだろうし。もうしばらく会ってないだろ」

もうしばらく会っていない……

あんなに毎日会っていたの……、自分のお父さんに会わない日があっても山崎さんの顔は見ていたのに……

そう思うとちょっとだけ会いたくなつた。

そしてハルの部屋にも行きたくなくなつた。

「うん……ちょっと行ってみようかな」

そう言つて椅子から立ちあがり、薄いカーディガンを羽織つた。いつの間にか暗くなると、半そでだけでは寒いと感じる季節になっていた。

「うん。そうしよ。俺、電話しておくよ」

嬉しそうに山崎さんに電話をして「今から行くから！」と誠君が元気に電話を切つた。

家に着き、玄関に入るとハルの靴が一足も無いことに気がついた。心の底で（こつやつてどんどん現実を知っていくんだな……）そう思いながらリビングに入った。

あの病院で会つた日以来二人の顔を久しぶりに見た。

お母さんは私の顔を見た途端、涙を隠して奥の部屋に入つていつてしまった。

山崎さんは精一杯、笑顔で来てくれたことを喜んでくれた。

本当は泣きたいんだろうな・・・そう思いながらもほんの少しだけ私も頑張って笑顔を出そうと思っていたけど、あまり上手く笑えていなかった。

部屋から出てこないお母さんを誠君が迎えに行きやつとお母さんが出てきた。

「華ちゃん、こんばんは」

真っ赤な目をして言うお母さんに少しだけ頭を下げ目線を外した。自分も同じようになってしまいそうだったから・・・

部屋が妙にしんみりしていた。

食事の用意を久しぶりに手伝うと言ってお母さんの横に並んだ。お互い頑張つてできるだけ笑顔でその場を切り抜けた。昔と同じことをしているのに、もう何年もそこに居なかったと思うくらい懐かしい気持ちになっていた。

ダイニングに座る時、自然とハルのいた場所の隣に椅子を自然に運び座った。

私の隣の席だけが空いていた。

「華さん。ここに座りなよ」誠君がハルの場所を目で指した。

「ううん。いいの。ここがいい・・・」そう言って黙って座った。

またみんながシンミリとした感じがしたが、どうしてもそれはできなかった。

「いいから。ここに座りなよ」さっきより強い口調で誠君が言った。

それでも動かず「そこは・・・ハルの場所だから・・・」そう言っただけで黙った。

いきなり誠君が山崎さんとお母さんに向って

「俺ね。華さんと付き合うことにしたから。だからこれからはいつも華さんが来るから。前となにも変わらないからさ。

また楽しくみんなで食事できるね」そう言っただけで無理に笑った。

「そんなこと・・・できないよ・・・」

「大丈夫だよ。すぐに俺のこと好きになるって！」

俺のほうは何倍もモテるんだから。すぐに俺の良さがわかるよ。

な、オヤジ！」そう言ってみんなの視線を無視して食事を始めた。

話を振られた山崎さんも何も言えず、ただ誠君を黙って見ていた。

お母さんも・・・

TVの音だけが部屋に響き、番組の笑い声が妙に大きく聞こえた。

誠君を好きになることはできない・・・

たぶん人間が全員同じ顔かたちでも私はハルのことを探し出せる。

それくらいハルが好きだった。自分も不器用だから他に誰かを好きになることはできない……

「あ。お父さんのビールもう無いわね。ちょっと買ってくるわね」

あまりの変な空気にお母さんが言い出し、

「あ。じゃあ私、車出しますね」と席を立った。

「いいよ！俺が行くから。華さんはまだ出て歩かないほうがいいよ。じゃ、母さん、たまに俺と行く？」そう言ってお母さんと誠君は出て行った。

山崎さんと二人で黙ってテーブルについたまま目の前の残り少ないビールの泡を見ていた。

山崎さんがグラスを持って立ち上がり、仏壇の前に歩いて行った。それを黙ってみながら、その先にあるハルの写真を見ていた。

山崎さんは仏壇のハルの写真に向って、

「どうするよ？ハル……誠が華ちゃん好きだったさ。

ボケくとそんなとこにいたら取られちゃうぞ？いいのか」

少しシンミリした口調で写真のハルに話しかけていた。

「あの、山崎さん……それは無いです。私、きつと無理だから。誠君のこと、ハルみたいには好きになれません」

山崎さんは席に戻り、

「華ちゃん・・・誠ね。昔から華ちゃんのこと好きなんだろうなってずっと思ってたんだ。たぶん心配で察も出たんだと思うし。すぐには無理でも、誠と一緒に居てあげることできないかな？ アイツも本当はすごくまいってるんだよ・・・
あーやって一人で空元気な顔してるけど。
誰よりも葬式の時、泣いていたんだ・・・」

そんな事言われても・・・
そう思いながらただ黙っていた。

「あゝあ。ハルはちゃんと男になって死ねたのかなあゝ」

突然、独り言のように山崎さんがTVを見て呟いた。

チラッと目が合い、あまりの空気を読みきれていない山崎さんが可笑しくてちよっとお互い笑った。

「それはもう・・・完璧に」そう言っただけ笑った。

「そっか・・・それはよかった。男として悔いが残るからね。

一番好きな女に男にしてもらってハルは幸せ者だな」

そう言っただけのビールを一気に飲んだ。

「本当に一番好きな女になれていたんですね・・・私」

目に涙が滲んできた。

「ああ。そうだと思うよ」「いつもの軽い感じで山崎さんが答えた。

「私のこと・・・死ぬ時、一瞬でも考えてくれたかな・・・ハル・・・」

知らないうちに涙がボロボロ出ていた。

「華ちゃんのことしか浮ばなかったんじゃないかな・・・」

その言葉を聞いて、初めて声を出して泣いた。

やっとハルが死んだということを深く胸に刻み、いつまでも泣いた。
このまま泣きすぎて死んでもいいと思うくらいに・・・

最後の贈り物

季節は冬になり、もう雪が降り積もり窓から見る景色は真っ白になっていた。

もう窓辺で待つていてもバイクの音は聞こえない・・・
そう思いながらカレンダーを見た。

12月23日。

ハルが死んだ8月7日から4ヶ月以上経っていた。

ハルが迎えにきてくれることだけを毎日考えていた。
それがどんな風かは分からないけれど、必ずきて来てくれる・・・

約束したもの・・・

あれから誠君に山崎さんの家に数回連れて行かれた。
けれど、あくまでハルの家に来た。そう思いながら行っていた。

やはり私にとってあの家は誠君の家では無く、ハルの家だった。
行く度に、時間があれば私はハルの部屋に入った。

ハルの部屋はあの日のままになっていた、
逆にそれが（いつか帰ってくるのかも）と変に期待をすることもあった。

誠君はあんな風に言ったが、付き合つという感じでは無かった。数回、なにかの時に顔を近づけキスをしようとする誠君に顔を背け、その行為を拒んだ。

その仕草を見て誠君は無理にそうすることをしなかった。

(やっぱりハルじゃないと嫌だ……)

その思いが強く、たかがキスと思ってもどうしても嫌だった。

「まだ忘れることできない？」そう何度も聞かれても「忘れるつもりは無い」とだけ言った。

忘れてしまうとハルが来てくれない……そう思った。

24日の夕方、一人で水族館に行った。

去年と同じく少しだけ雪がチラつきあの日のように気温が低く感じた。

車を降り「ハア〜」と息を吐くと大きな煙のように白く広がり消えた。

周りは去年のようにカップルばかりだったが、全然気にならなかった。

ハルが好きな絵画の前で黙ってそれを見ていた。

後ろに何組ものカップルが通りすぎてもただ黙ってそれを見て
去年ののハルの言葉を思い出していた。

そこにはハルの思い出がいっぱいあった。

なんとなくハルと一緒に来ているような気分になり

一人ということあまり感じないで、どっどん中を進んで行った。

外でビンゴ大会のイベントが始まり、館中にはまったく人がいなくな
った。

ガランとした通路の両面に魚達の水槽が延々と続き
独り占めして歩くには勿体ないほど贅沢に感じた。

きつと今、ハルがいたら（キスするチャンスだ！）と言って
喜んで体を引き寄せるだろうな・・・

ここに来てもどうにもならないのに・・・

けど、（来年も、再来年も、ずっとここにこよう？）そう言ったハ
ルの

言葉に黙って家にいることができなかった。

昼間に誠君から誘いの電話が来たのに、私は理由をつけてせっかくの

誘いを断った。

イヴの夜は絶対ここに来ようと決めていたから……

海底トンネルの前に来て入り口で黙って、その長いトンネルを見ていた。

去年は怖くて通れなかったそのトンネルをゆっくりと

歩きながら見た。上を通る鮫も横にいきなり来るエイにも

怖いと感ずることが無く、止まりながらそこを歩いた。

ハルとキスをした場所に止まり黙ってそこから水槽の中を見ていた。頬に数滴涙がつたい目が熱くなった。

きつと人が見たら変な女だと思っただろうな……

クリスマスに一人で水族館に来て、一人で魚見て泣いて……

そう思っても自然に涙が流れて仕方無かった。

滲んだ目で見たガラスに私の後ろに立つハルが見えた。

瞬間的に胸が踊り、慌てて振り返ると……そこには誠君が立っていた。

「やっぱりここだと思ったんだ」そう言ってニッコリと笑った。

「ん……」そう言ってまた前を向いた。

一瞬、やっと迎えに来てくれたんだと思ったのに……

「去年ここであんなに激しいキスシーン見て、……あの後へこんだんだよね」せっかくのクリスマスなのにさ」

誠君は隣に立ち水槽の中を見た。

「誠くんさ・・・私のこと好きだったの？」

「言ったじゃない」前からずっとそんなこと

照れもせず言う所がハルじゃなく誠君だなあ・・・と思った。

「ハルの奴もしつこいよな。いい加減に頭の中から消えてくれてもいいのになあ」

ガラスをコンコンと叩きながら寄ってこない魚に文句を言っていた。

「消えないよ。どれだけ待っても私の中からハルは消えない。だから早く違う人見つけたほうがいいよ？時間の無駄になっちゃうよ」

「俺もしつこいからさ。俺の中からも華さん消えないもん。たぶん俺のほうが勝つと思うな」

自信ありげに言う誠君に思わずクスツと笑った。

「やっと普通に笑ってくれたような気がするよ。ね？前は笑えなかったでしょ？少しずつでいいからそうやって笑ってよ。きつと前みたいにいつもニコニコできるようになれるから」

そんな誠君の優しさが痛かった。

そんなに思ってくれても、自分は誠君を好きという気持ちで

見られないと思うと申し訳無くなった。

「なんだか申し訳ないな。なにもお返しできないや・・・」

「じゃあ・・・ここでキスしてくれる？それでチャラにしてあげる」

「無理言わないで。私にとって誠君はハルのお兄さんなんだから、お兄さんとそんなことできないよ」

そのまま水槽をいつまでも見ていた。

「じゃあ・・・今だけ俺をハルだと思って、去年と同じようにキスしてよ。」

薄目で見て。そっくりだから」

そう言っつて自分のほうを向かせた。

「ね？いまここに居るのは山崎春彦！問題無いだろ？」

せつかくのクリスマスなのに、それも断ったのに、、、、
そして自分をハルだと思っつていいと言っつ誠君に涙が出た。

「どうしてそんなに、、優しくするの？」

「見てられないんだよ・・・あの日以来・・・華さんが・・・」

そのままゆっくりと誠君に顔を近づけキスをした。

ハルとは思わず、申し訳無い気持ちも少しでも返せたらと思っつ、
誠君と知っつてキスをした。

ハルより上手なそのキスは自然な感じに大人のキスだと感じた。その間、何組ものカップルが横を通りすぎても、黙っていた。どれくらいの間、そうしていたのかわからないほど長いキスをして誠君がゆっくり離れた。

「やっぱりハルだって……そう思ってた？」

「うん。今のは誠君だって思ってた」そう言って歩き出した。

少し後ろを誠君が歩きながら、螺旋状にあがる階段を昇り出口に向かって歩いた。

「華さん……俺、どうすればいいんだろな……」

その言葉に足を止め誠君を見た。困った顔をしながら、どう答えていいかわからなかった。

その横を親子連れが歩いて行った。

両親に手を引かれた3歳くらいの子とまだ生まれて数ヶ月の小さい赤ちゃんをお父さんが抱いていた。

それをボンヤリ見ながら（幸せそうだなあ……）と見ていた。

ふと頭の中にあることを思い出した。

「誠君！ハルがいなくなつて……4ヶ月くらいだよね？」

「う……うん。たぶんそのくらい……」

「私、太った？」

「はあ？なに言い出すの？全然変わらないよ。むしろ痩せたじゃん」
黙ってお腹を触りながら「嘘だあ・・・」と呟いた。
「なにが？」不思議そうな顔で私の顔を見ていた。

「もしかしたら・・・赤ちゃんできたかも！」
嬉しそうな顔で言う私に誠君は逆に険しい顔をした。

「嘘だろ？その、、妊娠するようなこと、、したの」

「えっ・・・うん。だって、無いもの。ハルが居なくなってから
一度も来てないもの。きっとそうだよ。わー！どうしよう！」
喜んで誠君に抱きついた。

「ちょ、、明日病院いこ？はつきりした訳じゃないじゃん」
「うん。行ってみる！」

不安よりお腹の中にハルの子供がいるかも知れないことのほうが
大きく私は嬉しくて笑顔になっていた。

あの最後に会った日以来、生理がきていなかった。

いままで全然そんなことも考えていなかったし、それ所じゃ無かつ
た。

嬉しいがる私を尻目に誠君は心配した顔をした。

「もし、できてたら産む気？だって・・・大変じゃない」

「産まない訳無いじゃない！」

「華さん。ちょっと落ち着いてよ・・・」

不安そうな誠君とは逆に大喜びで寒いはずの雪の中を笑顔で歩いた。

「華さん。俺、できてても産まないほうがいいと思うな・・・」

暗い顔をして誠君が言った。

「どうして？」

「良い訳無いだろ？父親もいないし、それに華さんだって大変だよ。まだ20歳なんだよ？これから楽しいこと

沢山あるじゃない。死んだ奴の子供なんて・・・」

「大変でもいい。ハルが最後に残してくれたものなら・・・」

真面目な顔で誠君を見た。

「とりあえず・・・明日病院にいこ？俺、一緒に行くから」

そう言つて誠君からの「よかったね」という言葉は一言も聞けないまま、イブの夜は過ぎた・・・

翌日、私は祈る思いで病院に行った。

自分でも4ヶ月も生理が止まるなんてことは一度も無かったから絶対妊娠していると信じていた。

あの最後にハルと交わした言葉も

「これで子供できちゃたりして・・・」そうハルは最後に言った。
絶対最後のメッセージなんだと信じて疑わなかった。

(だから迎えに来ないんだ。きつとそうだ！)

そう勝手に考え、いままで独りで泣いたことを自分で慰めた。

隣で運転する誠君は一度も笑わず、終始怖い顔をして病院まで行った。

けれど誠君のそんな怖い顔も全然気にならず、浮かれていた。

病院のロビーで誠君は緊張した顔で座っていた。

「こんな所に二人でいたら、絶対誠君とだと勘違いしちゃうね？」

そう言うのと、なんとも言えない顔をしてこっちを見た。

「俺の子供だっというなら・・・そりゃ笑顔のひとつも出るけどね」
そう言っただけでまた怖い顔のまま前を見た。

名前を呼ばれ、簡単な内診をしそのまま診察室に通された。

先生がなにやらカルテを見ながら、

「ふん・・・」と考え、いつ「おめでたです」と言うか
ドキドキして口が開くのを待った。

「最近、生活に大きな変化はありましたか？」

そう眼鏡をかけた50代くらいの先生は言った。

「え？それは・・・どんな意味で？あの、妊娠してますよね？」

もつ5ヶ月とかそのくらいなんですよね？」少し早口で急ぎたて

た。

「妊娠はしてませんね。なにか精神的ショックとか食事をとらないとか

そんなことありませんでしたか？

きっとホルモンのバランスが崩れたんでしょうね・・・

排卵がちゃんとなっていないですね。お薬出しておきますから・・・

」

その言葉に体がどこまでも落ち込む感じがした。

最後の望みも絶たれた気分になり、吐き気すらした。

そのまま頭を下げたのか言葉を発したのかもわからず診察室を出て、ロビーに戻った。

慌てて側に来た誠君の顔すら見ず、黙って椅子に座り、放心状態のようにボーとして黙っていた。

その顔を見て、誠君は逆にちよつと安心した顔をした。

「できてなかったんでしょ？」

「ん・・・」と小さく頷いて涙がポロポロとこぼれた。

「そつか・・・」それだけ言い、隣で頭を撫で肩を抱いた。

どンドン零れる涙に周りの目をちよつと気にしながら

誠君がハンカチを貸してくれた。

拭いても拭いても溢れる涙にどうしようもなかった・・・

夜景の場所に行き、車の中から黙ってまだ明るい町並みを見ていた。

大きなフンワリした雪がどんどん落ちてきて、
それほど気温は下がっていなかった。

車から降り、落書きを触りながら

「ハル・・・迎えにも来てくれないし・・・最後に子供すらくれない
んだね・・・」

そう言いながら黙っていつまでもちよつと黒くなった落書きを触っ
た。

スツと後ろに誠君が来て、肩を押されて座らされた。

そしてハルがいつもしていたように自分も後ろに座り
足の間に私を入れ、黙っていた。

「いつもこうして座っていたんでしょ？」

そう言っただけで軽く後ろから抱きしめた。

その手に顔をつけ黙って落ちる雪を見ていた。

手を出して手のひらに雪をのせ、すぐ消える雪を見ていた。

「ハルと、、、そんな関係だったんだ？てつきりキスだけだと
思ってた・・・」

後ろからポツリと言う誠君の声になにも答えず黙っていた。

「できてなくて・・・俺は正直嬉しいよ。そりゃハルの子だって
言うのは嬉しいけど、華さんが産むっていうのは嫌だな。」

けど、昨日、もしデキていたら俺が父親になろうかかって
そう思ってたんだ。だからちよつとさっき父親の気分だった」

そのまま少し誠君に寄りかかり大きく息を吐いた……
ゆっくり髪を触り、少し後ろを向いた私と誠君は
ふんわりとした雪がどんどん降り積もる中、キスをした。

お互いの頭がどんどん白くなるのも気にせず
長いキスを……

心の中でそこまで思ってくれた誠君に「ありがとう」と
呟きながら……

夢の中で・・・

雪が溶け始める頃、誠君は私のことを「華」と呼ぶようになった。それでも、私は「誠君」といつまでも君をつけたまま呼び続けた。誠君の前ではハルがいなくなった日よりは話すようにはなったがそれでも私の中でハルが消えることは無かった。

そんなある日。私は待ち望んだハルの夢を見た・・・・・・・・

真っ白ななにも無い場所でハルは笑っていた。
夢か現実かわからないまま、私はハルに抱きついた。
そこにはしっかりとハルの感触があった。
声を出すと消えてしまうのではないかと怖くて声が出せず
ただハルの顔を見ていた。

「元気だった？」ハルの声を聞いて涙が溢れ

「元気な訳無いじゃない！」と胸を叩いた。

「俺のこと忘れられない？」

「忘れる訳無い！絶対そんなことできない！」

涙で声が震えながら言った。

「そっか。ありがと。てつきり忘れちゃったかと思っただよ」

そう言っつて頭を撫でた。その感触もしつかりあった。

「迎えに来てくれたんだよね？一緒にに行けるよね？

ハルの側がいい！もう離れたくない！」

そう言っつてハルの体をしつかり掴んだ。

「でも、俺のここ来たら、みんな泣いちゃうよ？

華のこと好きな人がみんな……」

「誰が泣いてもいい。ハルと居れるなら、それだけでいい。

もう一人にしないで。お願いだから……」

「弱っちゃうなあ……華に泣かれると」

抱きしめながら言うハルの声を聞きながら泣いていた。

「約束したじゃない！絶対連れていくつて！

嫌っつて言っつても連れていくつて！だから連れて行っつて。

そうしてくれないなら自分から死ぬ！ハルがいないことのほうが何倍も怖い。毎朝、起きてまたハルがいない一日を

考えるだけで辛い。お願いだから……」

「そっか……じゃあ、もう少しだけ兄貴の側にいてあげて。

ちゃんと兄貴と向き合っつてあげてよ。俺、ずっと兄貴が

華のこと好きだっつて知っつてたんだ。生きていたら絶対ダメっつて

言うけど、もう俺こんなだからさ。少しは兄貴孝行してやりた
いし。ダメ？」

そんなことを言うハルを泣きながら黙って見た。

「俺も華に側にいて欲しいよ・・・」

あの日、いけなくてごめん。いっぱい泣かしちゃったな」

「私もハルの側にいたい・・・ずっと待ってた。

毎日ハルのこと考えていた。ハルじゃないとダメなの。

ハルがいいの。お願いだから・・・」

「じゃあ夏にしよ。あの約束の日。必ず迎えに行く。

それまで兄貴のことちゃんと見てあげて。

少しは兄貴にも良いおもいさせてやりたいじゃん。

約束の日の前日、もう一回来る。な？ならいいだろ？」

そう言っただけ抱きついてた感覚が消えた・・・

目を明けると枕が物凄く濡れていて、目が熱かった。

けれど手の感触も触った頭の感触もあった。

夢だけど夢じゃない・・・

そのまま何も手につかず、黙っていつまでも布団の中で
ハルのことを考えていた。

いつハルの元に行くことになってもいいと、私は専門学校に行くことを辞めた。

そんな話、きつと人に言えば馬鹿げた話と笑われるが、私はこれは絶対本当のことだと思った。

8月7日。きつと私はハルの側に行ける……
そうハッキリした目標ができて、その日からなんとなく私は変わった。

話をあまりしない毎日だったのに、前と変わらずにみんなと言葉を交わした。

それを見て、みんなは「元気になったんだな」と安心した。

誠君に対してもハルが言ったように、ちゃんと向き合い、誠君がどこかに行こうと言っても、その言葉に従った。

ハルと付き合っていた時のように、誠君のことを大事にしてあげようと思った。

けど、あくまでそれはハルが言ったから……
その気持ちは変わらなかった。

ハルの夢を見たことは誰にも言わなかった。

きつと信じてもらえないから……

4月になり、ハルの誕生日が過ぎた。

(ハルも19歳なんだな。私が初めて会った時の歳になった……

そして、、、きつと生きていたら大学生になって二人で学校に通っていたんだろっな・・・)

桜が咲いた暖かい日にそう思った。

仕事も復帰して前と変わらない毎日を過ごした。

もう馬鹿みたいに窓辺に座ってハルを待つことはしなかった。約束の日のことだけを考えて・・・毎日それだけを考えた。

そんなある日。

誠君がせっかく桜が満開だから花見に行こうと誘ってきた。

それをOKして休みの日に家で待っていた。

遠くからマフラーの音がして家の前に止まった。

「もう俺のバイクに乗ってくれる？」

そう言われたが、やっぱりそれだけはできなかった。

俯いて何も言わず黙っている私に、

「そっか。じゃあ仕方無いね。華の車で行こうか？」

優しく言い、バイクを降りた。

「ごめんね・・・」そう呟き車に乗った。

「いいよ。そのうち乗ってもいいなって思ったら、その時は乗って。いつまでも待つから・・・」

その言葉が体に染みだ。

けど、やっぱり乗ることができなかった……
乗ってしまうとハルとの約束が壊れてしまうような気持ちになった。

誠君は前にも増して優しく、大事にしてくれた。

それにたいしてどう答えればいいのか困るほど優しくしてくれた。
桜の木の下を歩き、気持ちのいい風が体を通り抜けた。

そんな時でも私が思うのは

(ハルと見た桜も綺麗だったな……) そんなことだった。

「誠君もしもね…… 誰か好きな人ができたら、

私のことなんか考えないで、すぐにその人捕まえてね？」

誠君には幸せになってほしいから……」

私の顔を見て、ちょっと寂しそうな顔をしながら、

「華とは幸せになれないのかな？」と聞いた。

「私は……ハルじゃないと幸せにはなれないの。」

他の誰かじゃダメなんだ……ごめんね」

「もうハルはいないんだ、……いつまでそんなこと言ってるんだよ。
ハルだっていつまでも、華が自分のことしか考えていないって知
ったら

きっと辛いんじゃないかな。きっと幸せになって欲しいって思っ
てるよ」

「そんなこと無い・・・」

「そんなことあるよ！いつまで夢みたいなこと言ってるんだよ！」

「夢なんかじゃない！私が死んだら、、、

ハルに忘れて欲しくない！ずっと好きでいて欲しいもの！

他の人なんか好きになって欲しくない！そんなの絶対嫌っ！

ハルには、、ハルには、、私だけなんだもの・・・」

泣きながら言う私に誠君は慌ててハンカチを手渡した。

「ハルには、、私だけなの・・・。私にもハルだけなの・・・」

「ごめん、、言い過ぎた・・・」

しばらく近くのベンチに座り、やっと泣きやんだ私に誠君は苦笑いをした。

「参ったな・・・もう」

「ごめんね・・・」

「いや。華らしいよ・・・」

諦めた顔をして立ち上がり、

「さ、行こー！」と手を差し出した。

「もうすぐ華の誕生日だね。去年はどうしたの？」
そう聞かれて、去年のことを思い出した。

ハルがバイクで足の事故を起こしてすぐだったので、
バイクに乗らせることが怖くて、車でドライブをした。
ちよつと高いイタリアンレストランに行き、ハルが

「俺が出すよ!」「いいよ!私が出すから!」と
小声で喧嘩したことを思い出し、ちよつと笑った。

「なに?楽しい思い出?」そう聞かれて、
「どうかな?」と笑い返した。

帰りに山崎さんの家に行き、今日行ってきた花見のことを
誠君が嬉しそうに話した。山崎さんもお母さんも嬉しそうに
その話を聞き、食卓は前のように少しだけ賑やかになった。
ふと誠君が奥の部屋を見て、足早に仏壇の写真を伏せた。

「どうしたの?」

「あの写真を仏壇に飾るのやめてくれないか……」

その言葉にお母さんが小さい声で「ごめんね」と言った。
なんのことかわからず仏壇の側に行き、今伏せた写真を見ると
そこにはキスをしたドレスの写真があった。

心の中で

(夏になれば、これで十分なのにな……)

そう思いながら、その時は誠君がしたように写真を伏せた。そして仏壇の違うハルの写真にニコツと笑い掛けた。
(あと4ヶ月・・・) そう思いながら嬉しい気持ちになった。

私は残りの日を考え、やり残したことを一つずつ消化していった。ゲームが途中なのを思い出し、誠君に会わない日はそのゲームを終わらせることに夢中になった。

まるで子供のようにゲームをする姿を見て、蘭は安心したようなちよつと馬鹿にしたような顔をして、部屋に来た時に私の後ろでそれを見ていた。

「蘭。欲しい服あったら、アンタにあげるね。どれでもいいよ」
そう言いながらTVの画面を見つめた。

「え？何言ってるの。珍しい」そう言ってる裏があるかと思われこれと「何か頼みたいの？」と詮索した。

「何もないよ。ただハルのことがあった時、蘭にも迷惑かけたなつて、」

そう思ってた・・・。「そう言ってるゲームを続けていた。

「お姉ちゃん・・・誠君と付き合ってるんだよね？」

「うん・・・付き合ってるっていうか・・・」

なんて言うか・・・でもやっぱりハルとは違うかなあ・・・
私が好きなのはハルだから・・・」

そう言っただけ全滅しそうな自分のパーティーを回復した。

「好きじゃないの？誠君のこと」

「嫌いじゃないけど・・・あまり好きになっちゃダメなの。
誠君が辛くなるから・・・」

きつと蘭には理解できないだろうな・・・と思いながらも
それしか言うことが出来なかった。

蘭が部屋に戻った後、私は少しずつ着ないであろう、
秋物と冬物の蘭が好きそうな服を衣装ケースに入れ
後から取り出しやすいように整理をした。

4月が終わり、、、5月になり、、、少し陽射しが強くなったと
感じたその日、私は21歳になった。

中身はまったく変わらないのに、歳だけは黙っていてもとるもの
なんだなあ・・・そう思いながら鏡を覗き化粧をしていた。

その日、誠君が連れて行きたい所があると言うので、
誠君の車で出かけることにした。

「どこ行くの？」

「いや、どこって決めてないんだ。華とはまだそれほど沢山の所に
行ったこと無いし。どこでもいい。華の誕生日に一緒にいたかつ
たんだ」

そう言って嬉しそうに笑った。

「そうだね。誠君とはあまり出かけたこと無かったものね……」
その顔を見てちよつと笑いながら答えた。

「これからずっと一緒にいるから、もうどこも行くところ無い！
って文句言うほど沢山いろんな所行こう。時間は沢山あるから」

（後3ヶ月しかないのにな…… それまでどれくらいの所に
行けるかな……）誠君の横顔を見ながら思った。

映画に行き、海に行き、買い物をし、偶然あのハルと最後に来た
湖に誠君は車を停めた。

やっぱり兄弟だなあ……遊びに行くセンスが似てるのかな……
そんなことを思いながら、湖の近くに行き、小さい魚が泳ぐのを
黙って見ていた。

「今日はいっぱいいろんな所に行けたな〜 楽しかった？」
小さい岩に立ちながら、体を伸ばして聞いた。

「うん。ありがと。楽しかった」

魚に小石を投げ、パツと散るのがおもしろくて何度も小石を投げな
から

誠君にそう答えた。

去年も私はそうやって小石を投げ、ハルに
「可哀相だからやめろよ〜」と言われ怒られて止めた。

「あ。誠君、これできる？」

側にあつた手ごろな石を持ち湖に向かって投げた。

1・2・3と石が跳ね4回目で沈んだ。

「ね？凄いでしょ？私、センスあると思わない」ニッコリして誠君を見た。

「俺のほうが上手いよ」そう言って誠君もやってみたが、どうしても3回目で石は沈んでしまい、「下手くそ」と笑った。

「おかしいなあ・・・」小声で文句を言いながら何度も誠君は挑戦したが、やっぱりそれ以上、石が跳ねることは無かった。

「無理！無理！ハルも3回だったもん。やっぱり兄弟だね」

隣で余裕な顔をしてまた石を投げた。

水面を跳ねるように飛び5回目で石は沈み「うわ！記録更新！」と言って喜んだ。

「ハルともこうして遊んだの？」石を投げながら誠君が聞いた。

「うん。去年、最後に逢った時、ここに来たの・・・」

それが最後だった。ここでこうして遊んだのが・・・」

拾った石で手に泥がついていたのを払いながら答えた。

誠君が黙ってこっちを見て、「ここに？」と驚いた顔をした。

「そう。ここに。今、誠君が立っている場所にハルがいた・・・」

私もここにいた。そして同じように笑っていた……」

黙って湖を見ながら去年の最後の日のことを思い浮かべながらそう呟いた。

誠君はそれからなにも言わずに黙って同じ方向を見ながらいつまでも湖を見ていた。

「ハル、どんな気持ちでここにいたんだろうな……」

自分が次の日消えちゃうことなんか考えていなかったらうな」
その場にしゃがみこんで誠君は言った。

その姿を見ながら、その日のハルのことを考えていた。
そして帰ったらその日に撮った写真を見てみよう……
ハルのデジカメにきつとその写真が残っている……
すっかりそんなこと忘れていた……

「俺も今日が最後だったらどうしよう？」

黙ったままの私がちょっと暗い顔になったのを見て、
笑いながらそんな冗談を言った。

「それは無いんじゃない？だって誠君、朝からすっごくくしいって
思ってる？」

「は？なにそれ」

いきなりそんなことを言う私に

不思議そうな、ちょっと可笑しいような顔で聞いた。

「ハルね、帰りにどうしてもホテルに行きたいって言ったの。いままでそんなこと言ったこと無いのに。朝からしたくて仕方無いって。」

その日は何度してもした気がしないって。きつとなにか感じてたのかなぁ・・・」

「それでホテル行ったの？その、何度もしたの？」

「うん。そうした。ハルがそうしたいって言うならと思って・・・」

そんなこと誠君に言わなくてよかったな・・・

ちょっと反省してその場を歩き出した。

後ろを着いて来てポツリと誠君が言った。

「俺だって、ずっと華とそうしたいって思ってる。」

けど、華が嫌ならそんなことしないほうが良いって思って

今まで我慢してるんだよ。そんなこと聞きたくないよ・・・

たとえ相手が弟でも・・・」

後ろから聞こえる声が怒っているのか、普通の顔をしているのかわからなかったが、やっぱりちょっとだけ悪かったと思った。

「帰り行ってみる？ホテルに・・・」

「え・・・マジで？」

誠君が目を大きくした。
その顔はハルにそっくりだった。

「うん・・・私、誠君のこと好きよ？誠君ならいい・・・
そう思ってくれるならいいよ・・・」

そう言つてその驚いた顔に笑い掛けた。

きっとハルは許してくれる。もうすぐずっと一緒にいられるから。
誠君のこと好きとは言つたけれど、ハルのことを好きだと思つ気持
ちの

ほうが何倍も大きいことをハルはわかってくれる・・・
恩返しのもりで誠君に抱かれるくらい、ハルは気にしないと思つ
た。

部屋に入り上着を脱ぐと、すぐに誠君は後ろに立ち服を優しく脱が
せた。
さすが女慣れしている行動だと思つた。

下着だけの姿になり、ゆつくりと体を触る誠君の手の動きが
やっぱりハルとは全然違つた。

「ハルのことだからオロオロして何も
してないって思つてたけど・・・しつかりしてんな。アイツ・・・」

薄暗い部屋の中で見る誠君はハルに見えた。

自然と頭の中で今、私に触れているのは誠君では無くハルだと思つ

て抱かれていた。

(ハル……)

優しく頬に手をあて、微笑む顔もハルに見えた。
ハルがいなくなってから初めて抱かれる感触に、忘れていた時間が戻った。

最後に触れたハルの顔は氷のように冷たかった……
ソツと誠君の顔に触れ暖かさが指に染み込んだ。

「華……」

ゾクツとするくらいハルと同じ声に思わず涙が溢れてきた。

(逢いたかった……)

首に手を回しギュツと抱きついた。

「華……本当にいいの。ハルのこと忘れられる？」

その言葉に頭の中が現実が変わった。

「ハルのことは忘れない・・・忘れたくない・・・」

「俺、ハルだと思ってされるのはやっぱり嫌なんだ・・・
今、そう思ってただろ？」

「そんなこと、、、」

「顔見たら分かるよ・・・
俺の前でそんな顔しないもの。ハルを見ている時の顔してた・・・
もしも耳元で「ハル・・・」って切なそうな声なんか聞かされたら
まじで泣けてくる・・・」

真面目な顔でそう言う誠君に、やっぱりこんな所に来てもいいと
言った自分が馬鹿だと思った。

義理でそんなことしても誠君は喜んだりしない・・・

「ごめんなさい・・・」

「いいんだ。触れられないって思ってた華をこんなに触れられた
ことで、俺、満足してるから」

少し火照った体が急に冷えた・・・
お互いそのままベットに横になり体をくっつけたまま
互いの暖かさだけを感じていた。

「ハルって上手だった？」

笑いながらそう聞く誠君に少し顔を上にして横顔を見た。

「アイツ初めてだったんでしょ？大丈夫だった？」

「ちよつと失敗したけどね？」

二人でクスクスと笑い、ハルの失敗を笑った。

「俺さ、こんなに手を出さないことなんて無いんだぞ。

いつもは1ヶ月以内には落としたのに・・・

なんだか華は調子狂っちゃうんだよなあ・・・」

「でしょうね。だってすごく慣れてるもの」

「そのうち・・・俺だけの事考えて抱かれてくれるかな・・・」

そう言った誠君の言葉に「うん」と言うことができなかつた。

本当はもう誠君と二人で会わないほうが良いと思つた。

これ以上思い出を作ると消えてしまう自分はいいが、

その後の誠君のことを考えると、これまで自分が辛かつた想いと
同じだけ悲しみを味わうかもしれない誠君が心配になつた。

「そうなれたら・・・いいかな」

「ん。きつとそうさせる。これじゃ生殺しだよ・・・」

肩に寄せていた私の頭に自分の頭を勢いよくぶつけた。

「いたつ・・・」頭を押さえて笑つたが、自分が今日した

酷いことに心が病んで仕方無かつた。

家に戻り、久しぶりに窓辺に座り、あの夢のことを考えた。

(きつとハルは来てくれる・・・けど、もしあれが
自分がハルに逢いたくて仕方が無くて見た幻覚なら・・・
約束の日にハルが来てくれなかったら・・・
その時は誠君に気持ちが無きつ動いていくのだろうか・・・)

そんなことを考えながら黙って少ししか見えない星空を見ていた。

去年の手帳を出して、小さくなりがあつたかを書いた
スケジュール帳を見た。

そこには「ハルと食事・誕生日」とハートマークがついていた。

ハルに抱かれた日を、まだ去年はハートマークをつけていた
子供のような自分の筆跡を見て

(馬鹿だったなあ・・・)と少し恥ずかしくなった。

ページをどんどんめくると延々とハートマークがつき、

それは6月くらいまで続いていた。

たぶん途中で馬鹿らしくてやめたのだろうが、

小さな出来事があった日記は8月7日以降は白紙になっていた。

ハル・・・あれは夢じゃないよね・・・
きつと迎えにきてくれるよね・・・

そう呟いた時に

空にひとつだけ流れ星が見えた・・・

それを見て「うん。そうだよ」とハルが言ってくれたような気がし

た。

もう誠君に変なことは言わないでおこう。

そう心に決め、またキツチリと気持ちに線を引いた。

自分の本当に好きな人はハルだけだと心に誓った……

その日の夜、私は何枚ものハルへの手紙を書いた。

いままでそんなことしたこと無いのに、何枚も何枚も、

ハルがこんなことをした時、どう思ったとか、

私がこうしたのに、ハルはこうしてくれなかった……とか

たぶん普通の人が見たら頭がおかしくなったと思うくらい

私は普通にハルが存在して、今書いた手紙を明日にでも

見てくれるような気持ちで書いてみたり、

ハルが死んでからどうしようと思ったとか、一枚一枚がバラバラな内容ばかりになっていた。

不安な気持ちがそこにはあった。

<最後に私のこと少しでも考えてくれた？>

そう書いて、その瞬間のハルを思い浮かべた。

きつと怖かっただろうな……痛かったのかな……

そう思うだけで涙が溢れ、やり場の無い悲しみが広がった。

もしも神様がいるのなら、どうしてそこまでハルのことを嫌うんだろうと憎らしくて仕方無かった。

あんなに良い子だったのに、私に素敵な思い出ばかりくれたのに、もっと先に連れていっても良いような悪い人はこの世に沢山いるに

……

そう考えれば考えるほど、この理不尽なハルの死をいつまでも悔やんだ。

また明日、目が腫れちゃうな・・・そう思いながら
写真たての笑顔のハルを見て「またハルのせいだ・・・」と呟いた。

そして、今ハルは何をしているんだろう・・・形は見えなくてもいつも側にいてくれたりはしないのだろうかと部屋の中をグルリと見渡した。

けど、なにも感じなかった。

(結構、冷たいのかもな・・・)

そう思いながらベットに入った。

その日、ハルに宛てた手紙は20枚以上だった。

もしも幽霊でもハルがいたのなら、

「こんなに好きって思われて嬉しいでしょ？」ときつと

朝までその手紙を全部見るまで帰さないのに・・・

そう思いながら目を閉じた。

21歳の誕生日の日。私はなにもいらないから

毎日ハルの夢を見させてください・・・と嫌いな神様をお願いして眠りについた。

けど、嫌っているせいかやっぱりハルは夢に出てきてくれなかった。

8月6日の夜までは・・・

みんなへの別れ

季節が移り変わり、暖かい日から暑いと感じる日が多くなってきた。その時間の流れに私の気持ちはどんどんと膨らんでいった。

カレンダーの一日、一日に夜、眠る前にバツ印をつけ

8月7日に大きく赤い丸をつけ、前日に星形の印をつけた。

「ねえ・・・お姉ちゃんこの丸印なに？」

「ハルの一周忌」

「そっか・・・もうすぐ一年になるんだね。ハル君が死んでから・・・」

そう呟きながらフレームの中のドレスの写真を見ていた。

「誠君はこの写真嫌がらないの？」

「ん・・・なにも言わない」

「もう、誠君の写真にしてあげなよ。可哀相だよ・・・」

「いいの。そのほうが誠君にもいいことだから・・・」

また訳のわからないことだと思いつつも、そう蘭に言い黙ってフレームを続けた。

カレンダーは丸印が見える8月になり、
私は終わらないゲームを連日、まるで小学生のようにやり続けた。

あの5月の出来事から、私はできるだけ誠君と遠出を
することを避け、近場かお互いの家か・・・
そんな風にこれ以上思い出を作ることを減らした。

それでも二人で家にいる時、自然と足の間座る私を誠君は喜び、
「二人でいると甘えてくれるから、家のほうがいいな」と笑って
くれた。

後ろに感じる温かさとソツクリな声に時々、私はハルを感じた。
悪いと思いつつも、自分でもこつしていることが嬉しいと思っ
ていた。

後ろから呼びかけられる「華」と言う声を聞くと、
まるで振り返るとハルが笑ってくれるような錯覚を何度も起こした。

「俺にも手紙とか欲しいな」 愛の言葉連発の！

誠君は少し悔しそうな顔をしてハルに宛てて書いた手紙の束を横目
で見ている。

「いいじゃない。いつも側にいるでしょ？」

「まあ・・・そうだけども。まったくハルもいつになったら
消えるのかな」 ここから

頭の上にアゴを乗せガクガクと動かし「痛いー」とふざけあつていた。

「一周忌はでられる？」そう聞かれ、ちよつと間があいた後に「うん・・・」と答えた。

「俺、ちゃんとその場に華がいて、ハルがもういなくなつて一年経つたつて、その目できちんと確認してほしんだ。そうすれば、もっと気持ちが楽になる・・・そう思つてる」

複雑な気持ちのまま、誠君の言葉を聞いていた。

ハルはその日のいつ迎えに来てくれるんだろう・・・私はその場に出席しないといけないのだろうか・・・そんなことを考えながら、黙つてTVを見たフリをした。

翌日、仕事が終わると誠君が家に来て、

「祭り行かない？」と誘われた。

「もうそんな時期なんだね。うん、いいよ」

2年ぶりに夜店を見に行った。

去年ハルは、

「もういいや。あの時は華をなんとか誘いたくて言つたけど、別に祭りなんてどうでもよかつたんだ」と二人で家にいてゲームをしていた。

私も2年前のあのお祭りの日、ただハルといたくて誘いをOKした。

まだ顔を見れば少し照れてしまってくるの仲だった二人を思い出した。

誠君と並んで夜店を見ながら歩いた。

相変わらず人の波が激しく、それでも私はハルの時のように誠君の手を掴むことをしなかった。

少し人が少なくなった空間で、誠君が一人の人と立ち止まって話を始めた。その人に軽く会釈をして違うほうを見ていた。

イチゴ飴の出店に足を運び、2つ買い懐かしい気持ちで安っぽい袋に入れてくれた飴を受け取った。

誠君の隣に戻ると、その人の連れの人が無言でこっちを見ていた。視線が気になりその人の顔を見ると、佐野さんだった。

「あ。お久しぶりです」そう笑顔で言ったが、彼女は相変わらず無愛想な顔をした。

隣にいる誠君をじつと見て、またこっちに視線をやった。今の誠君はあの時のハルよりはまた少し髪が伸びていた。誠君が友達と話しこむのを見て、

「あつちの裏にベンチがあるの。そこにいていい？」と聞いた。

「ああ、いいよ。もう少し話していいかな？久しぶりなんだ」そう答える誠君に「うん。ごゆっくり・・・」と言って

佐野さんに「あつちに行かない？」と誘った。

佐野さんの彼氏も「あ。じゃあそうして」と言い、二人で裏の、ハルと座ったベンチに座った。

「ハル君のお兄さんと付き合ってるんですか？」
ちよつと怒った顔をして佐野さんが聞いた。

「うーん・・・よくわからないかな。はい、これ食べない？」
袋から飴を出して渡した。

ムスツとしながら飴を受け取り、横で「美味しいよ？」と言う私を見ながら袋を開けて口に入れた。

「ハルの中学の時ってどんな感じだったの？」
飴を口に入れ、片方の頬をふくらませながら聞いた。

「そんなこと聞いてどうするんですか？」

「ん？どうだったのかな？って。ちよつと思っただけ」
そう笑いながら口の中で飴をクルクル回した。

「ハル君に似てるから付き合ってるんですか？」

「顔は似てるけど、全然違うじゃない。私はハルが好きなんだもん。誰も変わりにはならないもん」

「まだハル君のこと好きなんですネ・・・」
そう言い彼女は黙ってこつちを見ていた。

「そつだよ？ずつと好き。一生ハルしか好きにならないの。変かな？」

そう笑うと、彼女はやつと少しだけ笑ってくれた。

「スキーの時、ハル君が言った意味がちょっとわかりました」

そう言つて一昨年冬に同級生だけで行ったスキーの時の話を教えてくれた。

「私、ずっと好きだったんです。私のことハル君が好きじゃないってわかつてたけど、どうしても好きだったんです。

けど、お互いぎこちないままで別れちゃつて、
久しぶりに逢ったらもう華さんが隣にいて・・・
それにハル君、全然違う顔してた。

スキーの時にもう一度私のこと見てくれないかっつて言つたけれど、
「アイツは俺がいないと死んじゃうんだよ」つて。

すごく自慢げに言つてました。俺の一番大事な人つて・・・
「俺はどこに行つてもアイツ連れて行くんだ・・・」つて・・・

ハルの言葉が嬉しかった。照れ屋なハルがそんなことを他人に言つてくれていたと思うと、憎らしかった佐野さんと今日ここで話のできたことも（ま。いっか）と心から思えた。

「そうなの。ハルがいないとダメなんだ。私ね、もうすぐハルの所にいけるような気がするの」

そんなことを口走る私を佐野さんはちょっと変な人を見る目で黙っていた。

「別に、自殺とかしないよ？大丈夫。そんな顔しないでよー」

そう言つて笑つと、慌てて少しだけ笑つた。

「華、ごめんな。もういいよ」後ろから誠君が声をかけてきた。

「あ。うん。じゃ、行こうか」

ピョン！とベンチから立ち上がり佐野さんの顔を見た。

「ハルのこと好きになってくれてありがとう。それじゃ元気だね。彼氏と仲良くしてね。さよなら」そう言つて手を振つた。

「じゃ、さよなら・・・」佐野さんと彼氏は笑顔で手を振っていた。

「アノ子、昔ハルと付き合つてたつて知つてた？」

「うん。知ってるよ」

「そつか。なに話してたの？元カノと？」

「ん？別に」と笑つた。

その日、懐かしい夜店にあの日のことを思い出しながらまた隣にハルがいる気分で歩いた。

あの日・・・初めて名前を呼び捨てにもらったな・・・そんな小さな思い出にも顔が少し弛んだ。

そして家に帰り、またカレンダーにバツ印をひとつつけ、残りの4日間を見て（もうすぐだ・・・）そう思いながら急いでゲームの続きを始めた。

なかなか終わらないゲームに内心焦りながら翌日の休みを延々とTVの前で過ごした。

誠君の前では<ハルとハナ>を見せるのは悪いと思い、誠君が来ると急いでゲームをやめた。

それもあり、せっかく進んだのにセーブできないまま途中で切断することもあり、進まないゲームを延々とやっていた。

まだやり残したことがあるのに、なぜかこれを終わらせないといけない気持ちになっていた。

丸一日かけ、その日の夜中にやっとゲームが終わった。

やっぱり最後はハッピーエンドだった。

一度は消えた主人公ハルはまたハナの前に現われ、二人で楽しそうに寄り添い画面が暗くなった。

物凄い達成感を味わい、すべてのセーブデータを消した。

ハルに書いた手紙もベランダに出て一枚ずつ灰皿に入れ燃やした。

去年のスケジュール帳も、後々家の人が見て、悲しい気持ちにならないように破って燃やした。

その日、夜中まで自分の痕跡を一生懸命に消すことに没頭した。けれどハルとの写真だけはそのままにしておいた。

最後のあの湖の写真をデジカメからプリントアウトして、アルバムに貼り付けた。

そこに写るハルの顔はどれも良い表情をし、翌日のことなどまったく感じていない顔に見えた。

ただ・・・私が最後に撮った写真だけは

どことなく寂しそうな顔をしているように感じた。

その写真の隣に、二人で一番いい顔で写っている写真を貼った。

写真の整理をして、気持ちが悪く感じたら落着いて行った。

部屋に飾った写真も全部剥がし、ひとつのアルバムにまとめた。

部屋の真ん中には一枚だけ、あのドレスのキスの写真だけを
残し、それをいつまでも眺めていた。

一つの箱にハルとの記念の品を全部入れて、部屋の奥にしまった。
体にはハルから貰った指輪と、首には大きかったリングをチェーンに
通したネックレスと、そして誕生日に貰ったピアスをつけ、
ハルが一番好きだった洋服を準備して、すべての用意ができた。

どんな形で迎えに来てくれるのかは想像もつかなかったが、
まるでサプライズパーティーを待つような気分になっていた。
そして、星型の日付の前日の空白をバツで埋めた。

明日の夜……ハルの夢が見られる。

そう思うだけで胸がドキドキしていた。

遠足の前日より緊張しながら、なんとか眠りについた。

翌日、里実と亜矢に連絡して少し早い夕飯を食べに行った。

「ここは私が払うから！」

「えっ……どうしたの？」返って亜矢に怪しまれた。

「いいよー もうみんな社会人なんだしき。やっと華も元気に
なってくれたんだから、ここは私達がおごるって！」

里実に背中を叩かれた。

「ううん。いいの、すっごく心配かけちゃったしさ。

じゃあ、今度おごってくれる？いつでもいいからさ」

無理矢理にレシートを奪いお金を払った。

「もう、じゃあ次ね。いつにする？」

そんな亜矢の顔を見て静かにゆっくりと抱きついた。

「ちよ、どうしたの？そんな趣味ないから」

笑いながら抱きつく私に大袈裟な言い方をした後、

背中をポンと叩き、「華、辛かったね・・・」と言ってくれた。

涙が出そうだったが頑張って笑顔のまま里実にも抱きついた。

「二人が友達で本当によかった・・・」

「なに？もういなくなる訳でもないのにー 気持ちわるーい」

「そうそう！華らしくも無い」

二人の笑顔を胸に焼き付けるように顔を見た。

「華・・・どうしたの？」

「ううん！久しぶりに二人の顔見たら安心した」

「いつでも顔が見たいなら電話しなよ！すぐに飛んで行ってあげるから！」

「うん……」

「どうしてそんな淋しそうな顔するのよー！華は笑ってない！」

「うん……」

頑張っていたのに、二人の優しい言葉を聞いて涙が出た。

「華……」

「どうしたの？」

「なんでもない！じゃ……元気でね」

（ありがとう……亜矢……里実……）

二人の視線を感じていたけれど、もうそれ以上は振り返ることができなかつた。

顔を見ないで二人が立っていた方向に手を振り急いで車を出した。

寂しい気持ちが出てきたが、それでもやっぱり私にはハルが必要だった。

家に帰り、窓辺に座り亜矢と里実との楽しかった日のことを思い出していた。

よく高校で脱走をして怒られたよなとか、授業サボって遊んだなとかほとんどが悪いことばかりだったが、そんなことを考えながらちよ

つと笑っていた。

まだ時間は7時を過ぎたばかりだった。

下に降りて行き、珍しくお父さんのお酌をしてあげた。

「なんだよ・・・気持ち悪い・・・」と言いながらも結構嬉しそうな顔をして

笑っていた。そんな私を見て、お母さんも蘭も一緒になって

「お小遣い欲しいの？」と馬鹿にして笑った。

「お父さん。あんまりお酒のんじゃダメだよ。体に気をつけてね」
お酌をしながら言う言葉ではないが、そう言ってお父さんの顔を見て、微笑んだ。

「ん？そうだなあ〜 華も蘭も結婚するまでは死ねないからなあ」
そう言いながらTVを見ていた。

「お母さんもね。あんまり食べ過ぎると、格好悪いよ？」

「なによ。あんだだつて今にそうなるんだから！」
そう言いながら目の前の果物を立て続けに食べていた。

そこに誠君から電話が入り、明日の時間を教えてくれた。

「もしよかったら、今からちょっと会えないかな？」

「うん。わかった。じゃ、用意してから行くね」

用意をし部屋を出る時、もうこの部屋に戻ることが無いような気分になった。

(ハルが感じていた不思議な感覚はこんな感じなのかなあ・・・)
そう思うほど、部屋の中にモヤがかかったように見え自分の部屋を
見渡した。

やっぱりさつきとは違う、なんともいえないような気持ちになった。

階段を下りる前に蘭の部屋に顔を出した。

「私、明日のことがあるから、今日ハルの家に泊まろうと
思っんだ。蘭、後のことはよろしくね」そう言って蘭の顔を見た。

「へ？よろしくってどんな意味」不思議そうな顔をしながら
聞かれたが、どう答えていいかわからず、「うーん。ま、そんなとこ
と

笑いながら蘭の顔を見ていた。

「なに？ジロジロ人の顔見て」怪しんだ顔をする蘭に、
「蘭が妹でよかったな・・・ってさ。そう思っただけ。じゃ、行く
ね」

不思議そうな顔をする蘭に笑いながら部屋のドアを閉めた。

(お父さんとお母さんのこと・・・大事にしてね)

ドアの前で蘭に呟いた・・・

玄関を出て中にいる家族にへと頭を深くさげた。

(ごめんね。やっぱりハルの側にいたい・・・)

長年育った家を見つめ歩き出した。

その日は車を出さずに歩いてハルの家まで行った。

歩いてハルの家までの道をゆっくりと見たくなり、

大きなカーブも二人で止まった信号も、小さな思い出を浮かべながら歩いた。

途中で誠君から電話がきた。

「華？どうした。まだ来ないの」

「今日は歩いていきたいなって・・・だから歩いて向ってるの。」

あと5分くらいだから心配しないで」

そう言って電話を切り、また一つずつ何かを見てはハルを思い出した。

家のすぐ近くに来ると誠君が向こうから歩いてきた。

「どうしたんだよ？珍しいな」

「うん。たまにいいかなってさ。今日、明日の準備もあるでしょ。」

泊まってもいいかな」

「えっ・・・俺の部屋？」ちょっとだけ目を輝かせた。

「違っつてばー今日はハルの部屋に泊めてもらおうかと思って。」

ダメかな？やっぱり・・・」

「んっ まっ、いつか。今日だけだぞ」とちょっと悔しそうな顔を

した。

「いろいろありがとうね・・・」

「うん。気にすんなよ。それで華が納得してくれるならいいよ」

その日、初めて泊まることに山崎さんは喜んでいつまでもリビングで話を続けた。

時間が11時を過ぎた頃、「じゃ、明日は10時からだから」と各自、部屋に入って行った。

ハルのドアから顔を出し、誠君に「じゃ、おやすみ」と言うと、

「夜中こっそり行っちゃうかもよ?」と悪戯っぽい顔をして笑った。

「今日は起こさないで。ゆっくり眠りたいから・・・」

「こんな目の前で行くなっていうのは酷じゃない?」情けない顔をする誠君に「じゃ、おやすみ」と言ってドアを閉めた。

電気がついていないハルの部屋で大きく息を吸うと、

一年も経つのに、まだ十分にハルの臭いがした。

「ハル・・・あとからね・・・」

そう言ってハルのベットに体を入れた。

久しぶりのハルのベットは懐かしい臭いでいっぱいだった・・・

一緒に

ベットに入り、ほんの数分で眠りについたような気がした。眠ったのか、まだ起きているのか分らないくらいにすぐに私はハルに逢えた。

ニツコリと微笑むハルに嬉しくて、その顔をいつまでも見ていた。この前のように泣いて抱きついたりはしない。

今日は約束の日だから……

先に話をすると思えてしまいそんなハルを見ながら、言葉を発してくれるのを待った。

「消えないよ。心配しないで……」優しく頬を触る手に安心した。

「もう連れて行ってくれるよね？」

「本当にいいの？後悔しない？」

「後悔なんかしない。ここで行かないって言ったほうが後悔するもの」

「俺も華がいないとやっぱり寂しいや……」

「悪い奴だな……俺って。生きてる彼女連れていくなんてな」

嬉しそうな、それでいて悲しそうな顔をするハルに抱きついた。

「ハルは約束守ってくれるだけだから……
全然悪くはないよ？無理に言ったの私だから」

「最後にさ、もうちょっとだけ兄貴のこと言っていていい？」

「いいよ。連れて行ってくれるなら」

「兄貴のバイクの後ろに一度だけ乗ってやってくれないか？
あと、手紙も。そうしないと兄貴きつと悔やむと思うんだ……」

その言葉に困りながら黙っていた。

「乗ってもいいの？ハル以外の人のバイクに……」

「うん。最後の大サービス！これが最初で最後」

ニコツと笑うハルに頷いた。

「じゃあ、私も一つだけお願いしていい？ハルばかりじゃ
ズルいもん」

「なに？俺でできること」

「誠君と一度だけ寝ていいかな……」

ハルはしばらくそのまま考えたような間が開いた後、

「一度だけだぞ」と少し怒った顔をした。

「うん。一度だけね。それもハルのこと考えないで、誠君のことだけ考えてそうしたいの……」

「ん。いいよ」

ハルは声のトーンを少し下げた。

その怒り方がやっぱり本物のハルだと感じた。

「明日、どうすればいいの」その漠然とした約束をハルに聞いた。

「兄貴のバイクでアノ交差点に行ってくれないか。

俺、そこで待ってるから。華が来るの待ってる……」

「うん。わかった。きつと行く。絶対いてね……約束だよ……」

「ああ。わかってる。絶対だ。華を連れていく……」

そのままハルに抱かれて暖かさを感じていた。

それは本当にハルだった。抱き方も手の回し方もハルだった。

「ハル……いまのハルはキスできるの？」

その問いにハルは指でクツと私の顔を上に向け、顔を近づけた。やっぱりハルの唇の感触がしつかりとあった。

(ハル……)

何度も何度も、あの初めてキスをした日の夜のように唇を重ねた。

「じゃ、そろそろ行くね。兄貴に手紙よろしくな。

あと、本当に一回だぞ？2回したら行かねえからな」

笑いながらハルはそう言つて目の前から消えた・・・

唇にハルの感触を残したまま、私は目を開けた。

時計を見ると夜中の2時を少し回ったくらいの時間だった・・・

ハルの勉強机に座り、私は誠君に手紙を書いた。

どう書けばいいのか少し悩んだが、ちよつと時間をかけながら感謝の言葉などを紙いっぱい書いた。

どこに置けばいいかを考えたが、あまり良い案が浮ばず、

机の上にあつたハルのバイク雑誌の上にそれを置き、壁に貼つたままのドレスの写真をその上に置いた。

二人で行つた水族館で買ったイルカの形のガラス細工を重しにして手紙が風で落ちないように置いた。

気持ちがどんどん軽くなっていった。

きつと自殺をしようと言う人はそんな気分なのかと思うくらい心の中も頭の中にもなに一つ思い残すことは無いくらい気持ちが軽くなった。

静かな家の中で、ソツとドアを開け、誠君の部屋に行った。

誠君は気持ち良さそうな寝息をたてて眠っていた。

隣に立ち、黙つて顔を見て感謝の気持ちでいっぱいになった。

きつと誠君がいなければ、もっと私は傷ついていた・・・

そう思うと何度「ありがとう」と言っても足りないと思った。

体を布団の中に滑り込ませ誠君の胸に顔を寄せた。

ちよっとピクツとしてから私に気がつき、

「どうした？眠れないのか」と少し驚いた声で言った。

「ううん。誠君とこうしたいな〜って・・・そう思ってたの」
そう言っって顔を触りながら唇を塞いだ。

黙ってそのキスを受けながら、「こうしたいって？」と聞いた。

「ちゃんと誠君のことだけ考えるから、抱いてほしいなって・・・
そう思っただの。だめかな」

「イク時「ハル〜」とか言わない？」笑いながら言う誠君に、
「いわない・・・絶対・・・」そう言っって自然と二人の唇が重なっ
た。

その時の気持ち感謝の気持ちなのか、それとも誠君を本当に
好きだったのかはわからない。

けど、ただ頭の中には（これは誠君だ・・・）そう思いながら
熱くなる体を感じていた。

下にいる山崎さん達に声が聞こえないように気をつけながら
それでいて、我慢することができない声を誠君は唇を塞ぎ
響かないようにしてくれた。

腰を掴む手に力が入り、大きく動く度にベットがギシギシと鳴った。

「どっちにしろ、この音でバレちゃうな」

「明日、バイクに乗せて欲しいの・・・いいかな」

一瞬動きが止まり「いいの？」と聞いた。

「うん。お願い。ハルの死んだ場所に連れて行って欲しいの・・・」

「ハルの・・・？」

しばらく黙った後に、「うん。わかった。じゃあ明日、法事の前にな」

そう言っただけ動きを早めた。

しながら言う話では無いと思ったが、どことなくハルに見られている気が

して、ハルのことを忘れてないことを知らせないと拗ねてしまうとちょっとだけ感じた。

「華・・・俺のこと好き？」息を荒げ苦しそうな声で聞く誠君に「すき・・・よ・・・」と頭が真っ白になりながら言った。

もうベットがどれだけ軋もうが、声を聞かれようがどうでもよかった。

こんなにも感じる自分がどこか壊れてしまったように体の芯から激しいものが流れ出す感じがした・・・

二人でほぼ同時にイッた時、私の口からは「誠・・・」ときちんと誠君の名前が零れた。

それを聞いて、「華・・・ありがとう」そう誠君は言ってくれた。

窓から入る風も温く、お互い汗でベタベタしていたが、

自然と気持ち悪いと感じる汗ではなかった。

何度も何度もキスをする誠君の腕枕で残り少ない朝までの時間を過ごした。

そのまま二人とも疲れて眠りにつき、朝、ノックの音で目が覚めた。

慌てる私とは対照的に

「ああ。今起きる。ドア開けないで〜」と余裕でいう誠君にドキドキしながら慌てて服を着た。

「大丈夫だって。もうバレてるよ」

「えっ・・・そうなの！」

「だって俺の部屋、オヤジの寝てる真上だもの。

きつと「あ〜ん」て声も聞こえてると思うな〜」

「もう！」と布団の上から誠君を叩き、急いでTシャツをかぶった。

「もう俺、あの声が耳から離れないよ・・・」そう言って頬にキスをした。

「でも、急いで忘れてね」とニッコリと笑うと不思議そうな顔をした。

ちょっと気まずい感じで下に降り、顔を洗って支度をした。

山崎さんとバッテリー合い、どんな顔をしていいか困ったが、どうやらわからなかったのか、寝ぼけた顔をして

「あ。おはよ〜 華ちゃん〜」と言い、歩いて行った。

それからハルの部屋に戻り、ハルが好きだった服に着替え、急いで誠君の部屋に戻り、「じゃ、ちよつとバイク乗ってこよう」と言った。

やっぱりハルの部屋を出る時も、玄関を出る時も、変な気分は変わらなかった。山崎さんとお母さんに

「じゃ、行ってきます」と言い、なにか言葉を残したかったが、どう伝えればいいか分らずに黙って顔を見た。

「どうしたの？華ちゃん」

「え・・・いや、なんでもありません。じゃあ・・・」

けど、目がどうしてもなにか感謝の言葉を伝えないといけないう気持ちで訴えていた。

誠君のバイクに乗る時、メットをしたままで山崎さんとお母さんを見つめた。

出発する寸前に「ありがとうございました」そう頭を下げた。ほんの一瞬だから聞き取れなかったかもしれないが・・・けど、それで自分は満足だった。

山崎さんにはハルと引き合わせてくれたことに感謝していた。お母さんには優しくしてもらい、ハルを産んでくれたことに感謝した。

久しぶりのバイクだった。体を拭きぬける風が懐かしかった。見慣れた道を見ながら、すべてに「さよなら」と心の中で呟いた。やっぱり死に対しての恐怖は感じられなかった。

どンドンバイクが進み、次の角を曲がって少し走ればハルの事故現場だった。

私はそこをハルが死んでから一度も訪れていなかった。怖くて見れなかったから……

角を曲がり、もうすぐその場所だ……
そう思った時、私の胸が苦しいくらいドキドキしていた……

誰かが置いたのかその場所に花束が見えた。

そして、そこにはハルが立っていた。

（やっとハルの側に行ける……）嬉しい気持ちでいっぱいになった。

突然、グラリとバイクが不安定な動きになった。

（えっ……）そう思った時、すぐ横の信号が赤なのにこっちに向
って

走ってくる一台の車が見えた。

まるでスローモーションのように、ゆっくりと時間が動いたように感じた。

バイクとぶつかる車の音を聞いたような……
聞こえなかったような……

ただその時、思ったのは

(ハル・・・誠君だけは助けて・・・)

そう心の中で強く思った・・・

誠君に回した手がフワツと外れ体が浮き、手が自由になりにか掴もうと手を伸ばした・・・

痛みはなにも感じず、世界が大きくグルグルと回る感じがした・・・ハルも最後はこんな感じだったのかなあ・・・

誠君、、大丈夫なのかなあ・・・そんなことを思いながら何も掴めていない自分の手だけが見えていた。

突然誰かにグツと手を掴まれ、その先を見た時・・・そこにはハルがいた。

(やっと側にいける・・・)

嬉しさしか無かった。

長かった心の痛みも、ハルが消えた悲しみも、なにもかもすべて消えた・・・

私が生きていた時の記憶はここまでだった・・・

最後の華の気持ち

微かな泣き声と、カチャカチャという器具の音に目が覚めた。目を明けるとそこには見たことが無い真っ白な天井が見えた。

(ここはどこだろう・・・)

周りを確かめようとした時、

首や頭、足や腰・・・すべての体の機能が痛み、あまりの痛さに顔が歪み自分の体じゃないと思うくらいだった。

「いつてえ・・・」

その声に慌てて誰かが顔を覗き込んだ。

それは目を真っ赤にした母さんの顔だった。

「誠!! 大丈夫？見える？お母さんの顔」

「あ・・・うん・・・ここは」

声を出す度に腹筋や首がズキンと大きく痛んだ。

「病院よ」

慌てながら手を握り、そう言う母さんの顔を見て状況が掴めずじまつた。

どうして俺はこんな所にいるんだろう？病院で・・・
少しずつ鈍っていた頭が動きだし、ぼやけていた目もハッキリして
きた。

「母さん・・・俺、事故ったのか」

その言葉に涙を流しながら小さく頷く母さんの顔を見て、

（あゝ また泣かせて悪いなあ・・・）そんなことを考えた。

「俺・・・独りじゃなかったよな？はな・・・華は？」

母さん！華どうした。大丈夫か」

痛い首を無理に動かしながら聞いた。

もう痛みより華のことが気になつて胸が痛くなり慌てた。

けれど無理に頭を動かしたことに吐き気がした。

けどく華>という言葉聞いた瞬間、母さんの姿が下に消え、

大きな泣き声が聞こえた。

まだそこまで首を動かすことができずに目だけはそこにいるはずで
あるう

母さんの方を見ているのに、体は痛くて動けなかった。

「なあ！泣いててもわからないだろ！華どうなんだよ！

母さん！なあ・・・教えてくれよ・・・」

そう言っても、それ以上答ええない母さんと、泣き声の大きさを

俺はもう華が今どうしているか、どうなっているか、

なんとなくわかったような気がしていた・・・

それでもハッキリと答ええない母さんに微かな望みを持っていた。

まだ華は生きている。きつと俺より重傷で寝ているだけだ。そう自分に言い聞かせ、壊れそうな心臓を我慢しながら母さんが泣き止むのを待った。

そこにドアが開く音が聞こえた。

目だけでそつちを見るとオヤジが入ってきた。

「オヤジ・・・華は？華どうしたんだよ。なあ」

一言、一言が首に響いて頭が痛くなるほどだった。

「お前、奇跡的だったな・・・軽い全身打撲だけですむなんてありえないって。どこも折れていないし、ちよつと今は痛いけど、2週間で退院できるってよ」

いつもの柔らかい表情のオヤジを見て、ちよつとだけ気持ちが悪く落ち着きながら次の言葉を待った。

「なにも・・・あの場所で同じことしなくてもいいのになあ・・・」

それだけ言っただけ俺のことを見ていた。

ただ、、ハルの時ですら人前で泣かなかったオヤジの目が真っ赤なのを見て、ゴクリとツバを飲んだ。自分の唾に耳がキーンとした痛みを感じた。

「オヤジ・・・それはいいけど、華は？華のこと教えてくれよ」

心臓がドクドクして喉から出そうなくらいだった。胸が膨れて息が苦しくなった。

「華ちゃんか・・・ハルのところ行った・・・」

そう言ったオヤジの目から頬に涙がつつた。

嘘だろ・・・さっきあんなに笑ってたのに・・・

昨日、あんなに俺の腕の中で眠っていたのに・・・

涙が込み上げ耳が痛くなり、そのまま体の力が抜けて
なにも考えられなくなった・・・

これは夢だよな？ハル・・・嘘だろ？連れて行ったりしないよな？
いつも俺には文句を言うけど、最後には「仕方ねえなあ・・・」って
俺の言うこと聞いてくれる自慢の弟だったのに・・・
俺が一番悲しむことする訳ないよな？

華だって昨日、俺のことちゃんと好きだって・・・
そう言ってくれたのに・・・

誰も話をしないその空間にきつと夢だと無理に思い込んだ。
けど、体を動かせば痛みが走る、誰も泣いている、
いつまでたっても覚めそうもないこの現実が本物なんだろうか。

自分で確かめようと無理に起き上がろうとしてたが、
到底無理な話で、余計なことをしたばかりしにムカムカしたものが
喉元をすぎ胃液なのかなんなのか、分らない物を吐いた。

頭が苦しいのか吐いたことが苦しいのか・・・

けれど興奮しているからと、なにか注射を打たれ記憶は消えた。消え行く意識の中、

(ああ・・・やっぱり夢だったか。よかった・・・)
そんなことを考えた。もうこんな夢はたくさんだった。

翌日、病室に事故の相手の親だという人が来た。

耳がボンヤリしてなにを言っているのか聞き取れなかった。

頭の中で華が「誠君、大丈夫？」と笑いかける声が聞こえていた。体は昨日より激しく痛みが走り、眠れないくらいだった。

痛み止めの注射でやっと和らぎ眠りにつけた・・・

現実を知るのか怖くて、目が覚めると「体が痛い」と大げさに訴え、すぐに眠れるように注射を打ってもらったが、睡眠薬を貰って飲んだ。

あまりに痛がるので2週間もすれば退院だと言っていたのに、それより5日も遅れて退院することになった。

当日、オヤジの車で家に向う途中、

「華の家・・・行ってもいいかな？」と聞いた。

「ああ。あちらの親御さんも見舞いに来るって行ったんだが、後から行くからと言って断ったんだ・・・」

「そうなんだ・・・」

「きつと誠が自分のせいだと思って落ち込んでるだろうって・・・だからあつちの親御さんが謝りたいって言ってな・・・入院してるお前にその話は辛いと思って退院まで待つてくれって言ったんだ・・・」

オヤジの言ってる意味がさっぱりわからなかった。

俺は華の家の人に殴られてもおかしくないと思っていた。

「お前が殺したんだ」と言われても当然だと思っていた。自分でもそうだと思ってるし・・・

なのに華の家の人謝りたいってなんだろう・・・

どちらにしても、信号無視の相手が悪い。でも自分があの場所を走らなければ・・・ずっとそう思っていた。

そんなことを考えながら車は華の家に向った。

「きつとお前も華ちゃんの顔見たら、もっと気持ちが晴れたかも
しれないのになあ・・・」

あんなに綺麗な死に顔はもう一生見れないだろうなあ・・・」

「顔、傷とか無かったのか？」

腹の真ん中辺りが冷たく重くなっていた。

「ああ。綺麗なもんだったぞお・・・笑ってるんだよ。

嬉しそうな顔で。それ見た時に思ったんだよ・・・

「あゝハルの野郎、、連れていったな」って・・・

華ちゃんの友達もそう言ってた。最後に会った時、

もう会えないようなこと言ってたって。それが気になったって・・・

あつちの親御さんもみんなそう言ってたんだよ。最後だって感じのこと

言って家出たって。部屋も綺麗に片付いてハルの写真が一枚だけ置いてあつたって。華ちゃん自分が死ぬの知ってたんだろっな」

それを聞いて、どこにぶつけていいか分らない怒りが込み上げた。俺は華にとって何も役に立っていなかったのかと思うと、華に直接聞きたかった。最後に俺に言った言葉は嘘だったのだろうか、

俺じゃやっぱりダメだったんだろっか……
怒りで胸がムカムカしてきた。

華の家に着き、沢山の花の中で笑っている写真を見て
涙がいつまでも込み上げた。

華の両親に土下座をして謝り、声にならない声で詫びた。
その姿を見て、母親は泣きながら頭をあげてくれと言ってくれた。

「誠君には感謝しか無いから。あの子は本当に自分の最後を知っていたと思うから。部屋を見たらすぐに分つたの」
泣いて逆に辛い思いをさせて申し訳無いと頭を下げた。

「華の部屋、行ってもいいですか？」

「どうぞ。何も無くてガランとしている感じがするけど……」

階段をあがりながら、まだそのドアを開けたら

「遅かったね」と笑う華がいそいそな気持ちでドアを開けた。

何枚も壁に貼っていたハルの写真が外されていた。

あれほど好きだったドレスの写真すら、部屋の真ん中のテーブルに

ポツンと一枚置かれ、誰がどう見てもちよつと違和感を確かに感じる部屋だった。

普段から部屋は綺麗にしていたが、やはりちよつと大げさなくらいなにもかもが綺麗になっていた。

テーブルの下にアルバムがあり、それを開くとそこには部屋に貼っていた写真と、見たことが無いあの湖でのハルとの写真があった。

嬉しそうな顔で笑うハルと華の顔が延々と続き、その二人の顔を見ていると、まるでハルが生きていた時、二人がふざけあっていた日を
思わせるようなくらいに気持ちになった。

(俺という時はこんな顔していなかったなあ・・・)

あらためて写真を見て、やはり俺ではダメだったんだと思ひ知らされたような気持ちになっていた。

俺の中にある華の思ひ出は笑顔よりも泣き顔と悲しい顔が多かったような気がする。

綺麗にベットメイクされたそのベットの端に座り、足の間にいない華を思ひ浮かべていた。

いつもハルを待っていた窓辺の椅子に目をやっても悲しそうな華の顔を浮んだ。

今になって、あの時のハルを失った華の気持ちを痛いほど理解した。こんな時に「俺を好きになれ」と言っても無理だったんだ・・・辛い思ひをさせたんだな・・・

泣き虫だと思っただけ、そう思えば華は案外気丈かもしれない。ずっと泣かないでハルが迎えに来るのを信じ

この椅子で座って待っていたんだと思うと、ハルと華の絆がなによりも強いものに思えた。

下からオヤジの呼ぶ声が聞こえ、部屋を出た。

「華、また来るから」そう言ってドアを閉めた。

なんとなく、さっきまでこみ上げていた怒りが沈んでいた。

ただ頭の中では（ハルにちゃんと逢えたのかな・・・）そう思っていた。

「また来ます。いいですか？」

「ええ、いつでも来てください。本当にごめんなさいね」

華の母親は目を真っ赤にして頭を下げた。

その泣いた目元が華に似ていた。

車で家までの道のりを黙って見ていた。

（この道を華は最後に覚えておきたかつたんだな・・・）

そう思いながらボンヤリといつも見慣れた販売機や、信号を見た。

家に着き、

「まだしばらくゆっくりしてる」とオヤジに言われ、部屋に入った。

胸に穴が開くとはこんなことを言うのだろうと思うほど

なにも手につかなかった。

人が突然いなくなるという体験を2回した。

どちらも自分にとって大事な人だった。

今、この瞬間に俺と同じ思いをしている人はこの世界にきつと
沢山いるんだろうと思った。

その人達はいつたいどうやってこの気持ちを乗り越えるのだろう。

ベットに横になると枕に華の髪の毛が一本落ちていた。

それを静かに持ち上げてみた。

綺麗な少しだけ茶色い長い髪だった。

華・・・あの日、どんな気持ちでこの部屋に来たんだ？

俺のこと好きってあの言葉は本当だったのか？

やっぱりお前は俺よりハルじゃないとダメだったのか？

華に聞きたいことが山ほどあった。

けれどももう聞けない。そう思うと悔しくて涙が出た。

いままで何人もコロコロと女を代えていたが、華だけは
違う気持ちで思っていた。

自分の中で「これが本当の愛じゃないか？」とか臭い台詞を
思ったこともあった。

触れたいけど触れられない思いがきつとそんなことを考えさせたの
かもしれない。

最初に会った時、普通にただ綺麗な人だな・・・それくらいの感情
だった

のに、家族のように毎日ハルの側で笑い、あんなに真剣に人のことを
心から愛せる華のことが好きになった。

ハルが羨ましくてドアの向こうに華がいると思うだけで辛かった。

最後に華を抱けた時、最高に幸せだと感じたのに……あの日のあの瞬間に今すぐ戻りたかった。今でも耳にはあの日の華の音が鮮明に残っている。

「好きよ」と言った声も「誠」と呼んでくれた声も……ほんの数日前まで笑っていてくれた華がもういないことにどうしていいのかわらなくなった……

家に戻り、何日かが過ぎた。シーンとした食卓が更に悲しい気持ちに拍車をかけた。ハルの席、華の席、相変わらずポツカリと空いていた。

誰も口を開かないその食卓にいるのが辛いと感じるほどだった。そんな時、オヤジがポツリと口を開いた。

「華ちゃんはハルに逢えたと思うか？」

その言葉に母さんが少し怒ったように「お父さん！」と俺のことを気遣うような感じで口を出した。

「どうかな……わかんないや……」
そう呟き口にサラダを詰め込んだ。

「俺とハルってどこが違うんだろうな……」

「全部じゃないか？お前はお前だしハルはハルだもの……」
ビールを注ぎながら当たり前たる？と言うような感じで親父が言った。

なにを口にしても虚しく、わからないことだらけだった。

「俺、華のことハル以上に好きだと思つてた……
ハルには負けなれないと思うくらいだったのに……」

飲み込もうと思つた口の中のものが、喉が詰まつたように流れていかなかった……

「今となつては華ちゃんをハルが連れていったのか、あれは偶然すぎる
事故だったのか、、、なにもかもがお蔵入りだな……」

そう言つて親父は悲しい顔をした。

暗い食卓が更に暗くなつたような気がした。

いつになつたら両親に笑顔が戻るのか、それが心配になつた。
もうすぐ大学が始まる。

そうなつたら、今よりも気持ちになるのだろうか。

仏壇の写真は二人が並んだお気に入りの写真になつていた。
もうそれを飾るなと怒ることはできない。

それを黙つて見つめながら、嬉しそうな二人の顔を見ていた。
そしてあの日の写真を撮つていた楽しそうな二人の姿が目に入った。

あの時、二人はこんな結末を予期していたのだろうか。

だから華は一緒に写真を撮りたいといったのだろうか。
なにもかもがそんな感じがした。

思い足取りで部屋に向かい、ドアを開ける時にふとハルの部屋で最後に華が何をしていたのか気になり、ハルの部屋に入った。
きちんとベットが綺麗になっていて、几帳面な華の性格がよくわかった。

ふと勉強機のスタンドに貼り付けてあるノートの切れ端に目があった。

華の字で英文が書いてあった。

（ハルの宿題かな？）少し色が変わったテープを引きその紙を剥がしその英文を読んだ。

C o m e r a i n c o m e s h i n e . I w i l l a l
w a y s b e i n l o v e w i t h y o u .
<たとえ何が起ころうと私はいつも君を愛する・・・>

（華らしいな・・・）そしてそれを大事にいつまでも目の前に貼っていた

ハルも、ハルらしいと感じた。

机の上にあったガラス細工を見て、軽く持ち上げた。
華と付き合うようになってから、こんな小物がハルの部屋にはいっぱい増えた。

いままでバイク雑誌と好きなCDしか部屋には転がっていなかったのに、
華というようになってからは、忘れて行ったピアスがあったり、

ゲームセンターで取ったぬいぐるみがあったり、ハルにと華が買った香水や、日焼け止めのクリームや・・・

「今、この部屋に女連れ込んだら一発でバレるな？」とよくからかった。

「そんなことするかよ！華がいるのに！」
そう言っただけハルはいつも華のことを一番に考えていた。

「昨日、家の前でキスしてたろ？」と冷かしても

「え？しらねえ」と下手な嘘をついた顔を思い出していた。
華が言った（私達の好きってレベルは一緒だった）と言う言葉
思い出し、本当だなんて思った。お互い他に男も女もないという
くらい

あの二人はお互いしか見ていなかった。

そしてその小物の下には、もう見飽きるくらい見た二人の写真があった。

「本当にいい顔してんなあ・・・制服つてのがなんだけど・・・」
写真を持ち上げ黙って見ていた。

しばらくこの写真を部屋に貼っておこう・・・そう思いながら
勉強机のスタンドを消そうとした時、写真の下に華の筆跡を見た。

胸がドキンと大きく動いた。少し左上がりの字で

「誠くんへ」と書き始めていた、その手紙を持ち気持ちを落ち着けて
ベットに座り直し読んだ。

ノートに数枚書かれた、遺書にも見えるその手紙を何度も何度も
読み返していた。

内容からして、きっとこの手紙を書いた後にあの夜、俺の部屋に
来たのだろう。

そしてどうしてそうしたか。俺のことを最後にどう思っていたのか。
どうしてこんなことになったのか・・・
その手紙を見てすべてわかった。

華に聞きたかったことがそこにはすべて書かれていた。
嬉しいような、でもとっても行き場の無い悲しみが溢れ
何度も読み返しながら、涙が頬を伝った。

その後に仏壇のところに行き、二人の写真を見た。

一瞬だけ二人が笑ったような気がした。
指でハルの顔をピンツと叩き、苦笑いをした。

「やっぱりお前のほうが華にお似合いだよ。馬鹿みたいに
一途なもの同士な・・・」

そう呟き離れようとした時、一瞬だけ二人の声が聞こえたような気が
した。

普通じゃ空耳と思うだろうが、俺にはそれは本当の声だと確信した。

「悪いな・・・兄貴」というハルの声と、

「ごめんね。誠君」と言う少し悪戯っぽい華の声だった。

「一生やってろ、バカ」

もう一度写真に言い、その場でいつまでも二人の写真を見ていた。

< F H H <
> Z H H >

エピソード

< 誠君へ >

なにかから書いていいのかわからないのですが、こうして貴方に手紙を書いています。

きつとこの手紙を貴方が見たということは、私はもうこの世に居ないのでしょね。そうだとしたら悲しい思いをさせてごめんなさい。

ハルが死んでから、私は貴方がいたことで本当に助かりました。貴方がいなければもつと私はボロボロになっていたと思います。辛い時にはいつも貴方が側にいてくれましたね。

ハルが死んでから、私はハルが迎えに来てくれることだけを支えに毎日、辛い日々を送っていました。

そんな私を励まし、支えてくれた貴方の優しさはとても大きなモノでした。

本当に何度感謝の言葉を言っても足りません。

私はハルが生きていた時に約束をしました。

もしもハルが死んでも連れて行つと。

普通誰が聞いても冗談だと思うのですが、私は本気でした。ハルが死んでからしばらくして、私はハルが約束を忘れてしまいもう私の前には来てくれないと諦めかけていました。

けど、そんな時にハルは夢に出てきてくれました。

そして、夏の・・・あの事故の日に私を迎えに来てくれると言ってく

れました。

それが明日です。

ハルは貴方のことを、とても心配していました。

もっと貴方と向き合うように、もっと大事にしてあげるように、

最後にバイクに乗るように、こうして手紙を書くようにと

ハルは言いました。

そして、私はハルに一つだけお願いをしました。

最後に貴方のことだけを考えて、貴方のことを好きな自分で

抱かれないと伝えました。

渋々ですが、ハルは了解してくれました。

この手紙を書き終えたら、貴方の部屋に行くつもりです。

そうすることで、もっと貴方がその後辛くなるかもしれないですね。

けれど、今、こうして生きている間は私は貴方のことが大好きです。

大好きだから、最後に抱かれないと心から思っています。

あんまり誠君のことを大好きと言い続けると、ハルが怒って来てくれないと

困るので、手紙はこれくらいにしておきます。

やっぱり私にはハルがお似合いです。そして貴方には

もっと素敵な人がお似合いです。

本当はそんな4人で楽しくお食事とかしたかったね。

それだけが心残りかなあ・・・

ハルは私がいないと泣いちゃうから。
誠君はハルより強いからきつと大丈夫。
幸せにしてあげられなくてごめんね。

そして本当にありがとう。

華

<華の手紙はここまでだった。けれど下の数行だけ筆跡が明らかに
違う、ちょっと汚い字で短い言葉が書かれていた>

やっぱ連れていくわ。約束だから・・・

こいつ俺がいないとすぐ泣くんた。兄貴本当にごめん・・・
俺しか華を幸せにできないし、俺も華だけなんだ。

- 春彦

・ その字は消えそうな字だったが、間違い無くハルの字だった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7672e/>

あなたを忘れない為に・・・

2010年10月8日15時18分発行